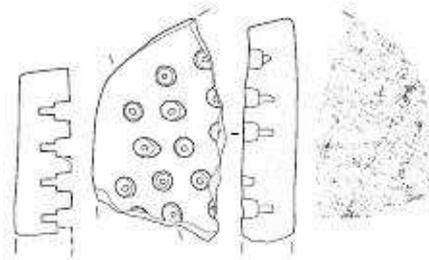


茨城県石岡市

府中城跡

—私道建設に伴う発掘調査—



2011

大和田 達郎
石岡市教育委員会
有限会社勾玉工房 Mogi

序

石岡市は、茨城県のほぼ中央部に位置する人口約8万人の都市です。古代には常陸国府、中世には府中城、そして近世には府中藩の陣屋が置かれ、常陸国の政治・経済・文化の中心地として繁栄を続けてきました。

さて、本書で報告されます遺跡は、その「府中城跡」という名前が示すとおり、府中城の南東部にあたり、また常陸国府の国庁からも150m程であり、石岡の中心部と言える場所です。

調査の結果、古代の掘立柱建物や竪穴住居、中世から近世の竪穴建物や井戸が発掘されましたが、その位置関係や時代、出土品を見ると、常陸国府や府中城、陣屋に関係するものと考えられるでしょう。また、茨城県内では初、関東地方でも8遺跡目となる「ガラス小玉鑄型」の出土が注目されます。

このような大きな成果をあげることができましたのも、調査にあたりご理解とご協力を賜りました事業者をはじめ、関係各位のみなさまのおかげであり、心から感謝を申し上げます。また石岡市としても、今回の豊富な成果をもとに、より一層、文化財の保護・保存、そして活用に取り組んでいく所存でありますので、引き続いてのご指導・ご協力をお願い申し上げます。

本書が学術的な研究資料としてはもとより、石岡市の歴史に関する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として、広くご活用いただければ幸いです。

平成23年12月

石岡市教育委員会
教育長 石橋 凱

例 言

1. 本書は石岡市に所在する府中城跡（第3地点-3）の発掘報告書である。
2. 調査は私道（位置指定道路）建設に伴い、大和田達郎の委託のもと、有限会社 勾玉工房 Mogi が行った。
3. 調査内容および調査組織は下記のとおりである。

所在地 茨城県石岡市総社1丁目421番86ほか

調査面積 191 m²

調査期間 発掘調査 平成23年7月28日～平成23年8月31日

整理調査 平成23年9月1日～平成23年12月16日

事務局・調査指導

石岡市教育委員会教育長	石 橋 凱
教育部長	高野喜市郎
次長	上 曾 宗 則
生涯学習課長	真 家 忠
生涯学習課長補佐	吉 川 隆
生涯学習課係長	安 藤 敏 孝
生涯学習課係長	箕 輪 健 一
生涯学習課主任	小 杉 山 大 輔
生涯学習課主幹	曾 根 俊 雄

調査担当者 発掘 長谷川秀久（有限会社 勾玉工房 Mogi）

整理 大賀 健（指導）・石山 啓・鈴木 徹（有限会社 勾玉工房 Mogi）

調査参加者

飯塚秀子 磯山孝一 今泉ふく 榎戸洋子 大木幸子 小野瀬健一 川上孝子 小松崎利夫
郡司 勇 小角みや子 高野美智子 田中正治 田村光清 塚本祐司 西出品子 藤田美代子
牧田保身 米山秀昭 持田 清

4. 本書は小杉山・曾根・石山・鈴木が分担執筆した。編集は小杉山の助言のもと、石山・鈴木・高橋歩美が行った。
5. 分担執筆は下記の通り。
第1章：曾根、第3章：小杉山、第2章・第4章・第5章の遺構：石山
第5章の遺物と第6章：鈴木
6. 遺構の写真撮影は長谷川、遺物の写真撮影は大越直樹が行った。
7. 遺物の基礎整理は谷 旬・須賀澤一憲・根本時子・篠原美代子・石津弘子、遺物実測・遺物観察表作成は大賀さつき・阿天坊弥生、採拓は根本、デジタル編集は岩崎美奈子・饗庭紀子・高橋・森 優里絵が行った。
8. 記録類及び出土遺物は石岡市教育委員会が保管している。

9. 発掘から本書の刊行に至るまで、次の方々や諸機関からご教示、ご協力を賜わった。ご芳名を記して謝意を表します。(敬称略)

江原昌俊 江藤隆博 小泉祐紀 酒巻忠史 鈴木敏則 高城大輔 中山清隆 林田利之 日高 慎
松田富美子 吉林昌寿 山田佳美 山本恵一 渡辺健二 芦田測量 (有) カワヒロ産業

凡 例

1. 本書に記してある座標値は世界測地系第IX系を用いている。全体図・遺構図の方位は座標北を示す。
2. 本文中の色調表現は『新版標準土色帖』2008年度版(農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修)を用いた。
3. 標高は東京湾の平均海拔を示している。
4. 掲載した図面は以下の縮尺で表した。

調査区全体図 1/100

遺構図 住居跡 1/60 カマド 1/30 掘立柱建物跡 1/60 土坑 1/60 方形竪穴遺構 1/60 井戸跡 1/60

遺物図 縄文・弥生土器 1/3 土師器・須恵器 1/4 土師質土器 1/4 瓦質土器 1/4 灰釉陶器 1/3

陶器・磁器 1/4 瓦 1/4 土製品 2/3 石製品 1/3 鉄製品 1/2

なお、変則的な縮尺を用いた場合には、スケールをもってその倍率を表した。

5. 遺物写真は実測図の縮尺に合わせて掲載した。なお、SK01-01は1/4で掲載した。
6. 掲載図中のスクリーントーン及び記号は以下に示す通りである。



遺物出土状況図

○…土師器 △…須恵器 ●…未掲載遺物

7. 本文中や一覧表、実測図に用いた略記号は整理作業の混乱を防ぐため、発掘調査現場において下記の意味で付与されたものを変更せずに表記している。そのため、SXとSKの一部については本書で報告する遺構種別のうち、方形竪穴遺構(SX01・03・04、SK16)、土坑(SX05)、井戸(SX02)に振り分けたものがある。

SI:住居跡 SB:掘立柱建物跡 SD:溝 SK:土坑 SX:不明遺構 P:ピット K:攪乱

8. 遺物観察表の法量単位はcm、重量単位はgである。法量に付した()は復元値、<>は残存値を示す。
9. 本遺跡の略称はFTJ-2011とした。遺物の注記もこれに従っている。

本文目次

序	
例言	
凡例	
目次	
第1章 調査に至る経緯	1
第2章 試掘調査	1
第3章 遺跡の概要	4
第4章 調査の方法と標準堆積土層	7
第1節 調査の方法	7
第2節 標準堆積土層	7
第5章 検出された遺構と遺物	8
第1節 古代の遺構と遺物	8
第1項 住居跡	8
第2項 掘立柱建物跡	15
第3項 土坑	18
第2節 中・近世の遺構と遺物	20
第1項 方形竪穴遺構	20
第2項 土坑	23
第3項 井戸跡	24
第3節 中世以降の遺物	24
第4節 表面採集遺物	27
第6章 まとめ	30
第1節 調査の成果と常陸国府との関連	30
第2節 ガラス小玉銚型の検討	32
参考引用文献	
写真図版	
抄録	

挿図目次

第1図	トレンチ配置図	1	第18図	SK10	18
第2図	トレンチ出土遺物	2	第19図	SK10出土遺物	18
第3図	府中城跡調査地点 (S=1/5000)	4	第20図	SX05	19
第4図	遺跡周辺図	6	第21図	SX05出土遺物	19
第5図	府中城跡調査地点位置図 (S=1/10000)	6	第22図	SX01・04	20
第6図	標準堆積土層	7	第23図	SX01出土遺物	21
第7図	調査区全体図 (折図1)		第24図	SX04出土遺物	21
第8図	SI01・02	9	第25図	SX03	22
第9図	SI02カマド	9	第26図	SX03出土遺物	22
第10図	SI01出土遺物	10	第27図	SK16	23
第11図	SI02出土遺物	12	第28図	SK01	23
第12図	SI03・05	13	第29図	SX02	24
第13図	SI03出土遺物	13	第30図	中・近世遺物	25
第14図	SI04	14	第31図	表面採集遺物 (1)	27
第15図	SI04出土遺物	14	第32図	表面採集遺物 (2)	28
第16図	SB01・02	16	第33図	ガラス小玉鋳型分類図	34
第17図	SB01・02出土遺物	17	第34図	平玉の製作法 (由水編1992)	35

挿表目次

第1表	トレンチ出土遺物観察表	3	第14表	SX01出土遺物観察表	21
第2表	府中城跡調査歴	5	第15表	SX04出土遺物観察表	21
第3表	SI01出土遺物観察表	11	第16表	SX03柱穴計測表	22
第4表	SI02出土遺物観察表	12	第17表	SX03出土遺物観察表	22
第5表	SI03出土遺物観察表	13	第18表	SK16柱穴計測表	23
第6表	SI04出土遺物観察表	14	第19表	SK01出土遺物観察表	24
第7表	SB01柱穴計測表	15	第20表	中・近世遺物観察表 (1)	25
第8表	SB02柱穴計測表	15	第21表	中・近世遺物観察表 (2)	26
第9表	SB01・02出土遺物観察表	17	第22表	表面採集遺物観察表 (1)	27
第10表	SK10出土遺物観察表	19	第23表	表面採集遺物観察表 (2)	29
第11表	SX05出土遺物観察表	19	第24表	ガラス小玉鋳型一覧表	37
第12表	SX01柱穴計測表	20	第25表	土坑・ピット一覧表 (1)	39
第13表	SX04柱穴計測表	20	第26表	土坑・ピット一覧表 (2)	40

写真目次

遺構図版 1

- 1 遺構確認状況 北から
- 2 テストピット 西から
- 3 SI01・02 セクション 南から
- 4 SI01・02 セクション 西から
- 5 SI01・02 遺物出土状況 南から
- 6 SI01 南から
- 7 SI02 カマド セクション 北から
- 8 SI02 カマド 東から

遺構図版 2

- 1 SI03・05 セクション 北東から
- 2 SI03 東から
- 3 SI04・SK18・P03 セクション 西から
- 4 SI04 西から
- 5 SI05 東から
- 6 SI05 カマド 南から
- 7 SB01・02 南から
- 8 SB01-P1 セクション 東から

遺構図版 3

- 1 SB01-P2 北から
- 2 SB01-P3 北から
- 3 SB01-P4・SB02-P10 西から
- 4 SB01-P5・SB02-P11 西から
- 5 SB01-P6・SB02-P12 東から
- 6 SB01-P7・SB02-P13 セクション 南から
- 7 SB01-P7・SB02-P13 南から
- 8 SB01・02-P8 セクション 西から

遺構図版 4

- 1 SB01・02-P8 西から
- 2 SB02-P9 セクション 西から
- 3 SB02-P9 南から
- 4 SK10 セクション 東から
- 5 SX05 セクション 西から
- 6 SX05 南から

7 SX01 南から

8 SX03 南から

遺構図版 5

- 1 SX04 北から
- 2 SK16 セクション 東から
- 3 SK16 北から
- 4 SX02 セクション 東から
- 5 SK01 セクション 南から
- 6 SK01 北から
- 7 表土除去
- 8 調査風景 北から

遺構図版 6

- 1 調査区全景 北から
- 2 調査区全景 南から

遺物図版 1

トレンチ出土遺物

SI01 出土遺物

遺物図版 2

SI02 出土遺物
SI03 出土遺物
SI04 出土遺物
SB01・02 出土遺物
SK01 出土遺物
SK10 出土遺物
SX05 出土遺物
SX03 出土遺物
SX04 出土遺物
表面採集遺物

遺物図版 3

表面採集遺物

遺物図版 4

中・近世 土器・陶磁器・銭貨
近世 陶磁器・土製品・石製品・銭貨
現代 磁器・鉄製品・ガラス製品

第1章 調査に至る経緯

平成16年11月、大和田達郎氏（以下、事業者）より宅地造成に伴い「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」照会文書が石岡市教育委員会に提出された。照会地は、周地の埋蔵文化財包蔵地である府中城跡に該当することから、市教育委員会は平成17年1月に試掘調査を実施した（第3地点-1）。その結果、多数の遺構・遺物を確認したことから、開発にあたっては事前協議が必要である旨を回答した。なお、この試掘調査の結果については、『市内遺跡調査報告書』第3集（小杉山・曾根2008）にて報告している。

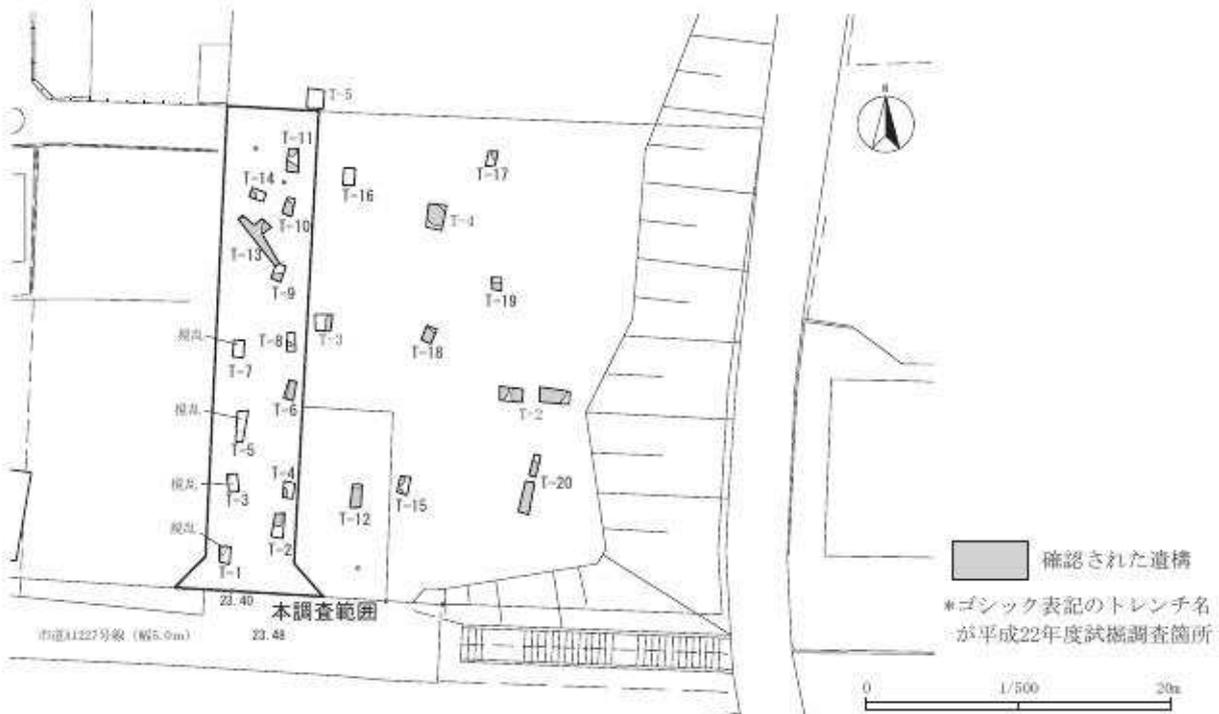
平成23年2月4日、詳細な開発計画が決定したことから、改めて「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」照会文書が市教育委員会に提出された。市教育委員会は平成23年2月21～24日に、開発計画に合わせ再度試掘調査を行い、奈良時代の竪穴住居跡や土坑を確認した（第3地点-2）。

その後、事業者が平成23年6月10日付で茨城県教育委員会に「埋蔵文化財発掘の届出」を提出し、平成23年6月17日付で茨城県教育委員会から、工事着手前に発掘調査を実施するように通知があった。

これらを受け、市教育委員会と事業者は協議を行い、記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。そこで、「埋蔵文化財発掘調査における民間発掘調査組織導入基準」に基づき選定手続きを行い、位置指定道路予定部分（約191㎡）について、有限会社 勾玉工房 Mogi に委託し発掘調査を実施することとなった。

第2章 試掘調査

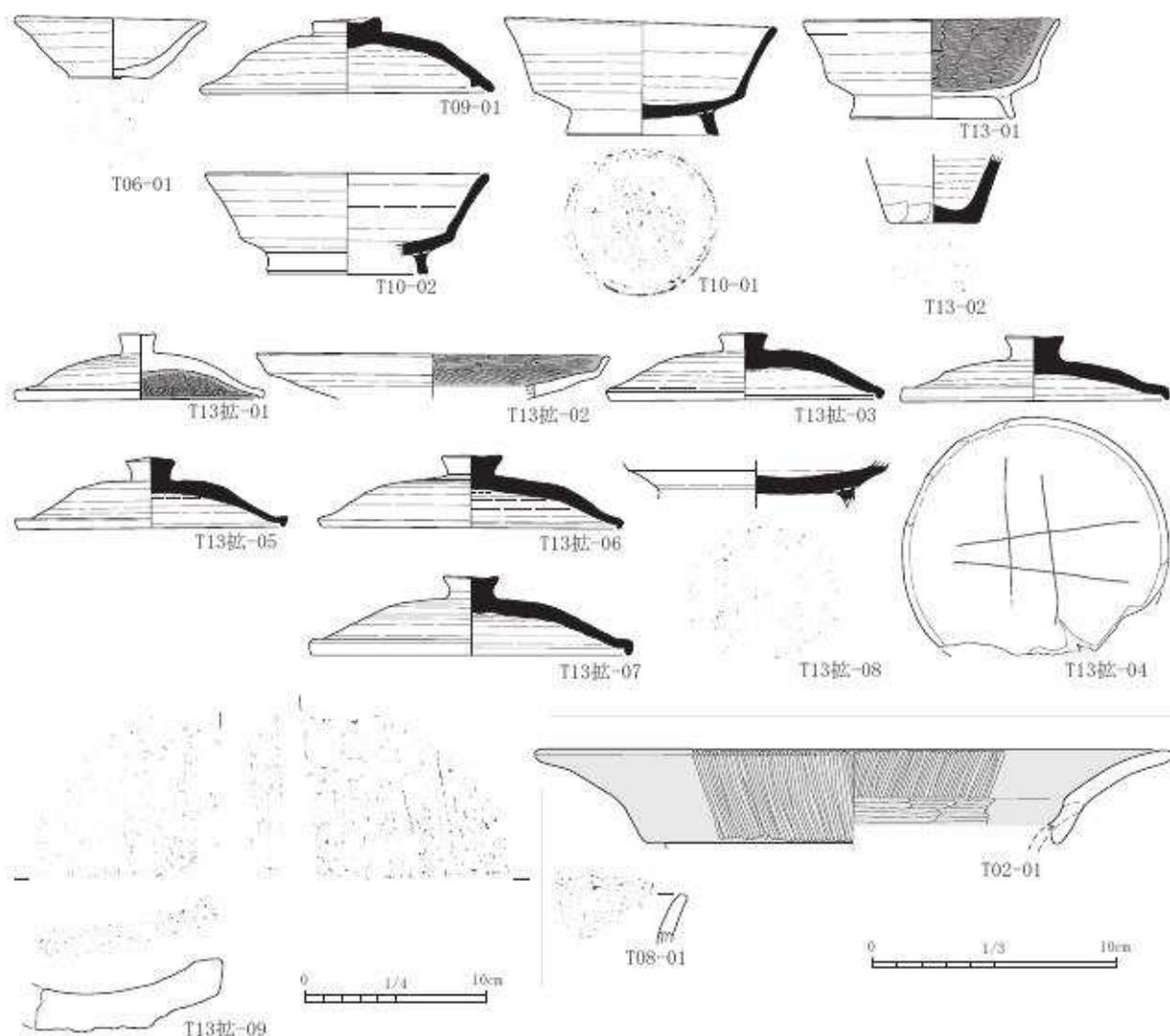
試掘調査は、平成23年2月21～24日、開発区域内にトレンチを任意に20か所設定して行った。調査の結果、奈良・平安時代の竪穴住居跡2軒、土坑14基が確認された。本調査の対象は試掘範囲の西端であり、T1～11・13・14が該当する。T13で確認された住居跡はSI01に該当し、T6の土坑はSI04、T9・10の土坑は掘立柱建物跡の柱穴に、T2・4の土坑は方形竪穴遺構SX01にあたる。西側のT1・3・5・7は攪乱であった。



第1図 トレンチ配置図

遺物は遺物整理箱1箱(37リットル相当)が検出され、時期は縄文時代から近・現代に至るまでが確認された。それらのうち、本報告では19点を抽出して実測図・写真に提示した(第2図、第1表、遺物図版1・4)。

T08(試掘トレンチT-8、P25の位置に当たる〔以下、遺構名のみ表示〕)-1は縄文施文の後期弥生土器の口縁部である。T02〔SX01〕-01は古墳時代前期の二重口縁壺である。頸部が直立する「茶臼山型」ではなく、外湾する頸部になるものと思われる。T06〔SI04〕-1は16世紀代の土師質土器の皿(かわらけ)である。その他は8世紀後半の土師器と須恵器で、今回の出土遺物の主体をなすものである。T09はSI02、T10はSB01-P3、T13とT13 拡張区は前記のとおりSI01の位置にあたり、次章で詳述する各遺構の出土遺物との齟齬はなく、それぞれの遺構に伴うものと見てよいだろう。遺物図版4に示した50は磁器の碁子で、青色の低圧引留碁子である。51は磁器小杯で、外面黒色・内面白色施釉、外面露胎丸窓にイッチン描き文様が施される。ともに現代のものである。



第2図 トレンチ出土遺物

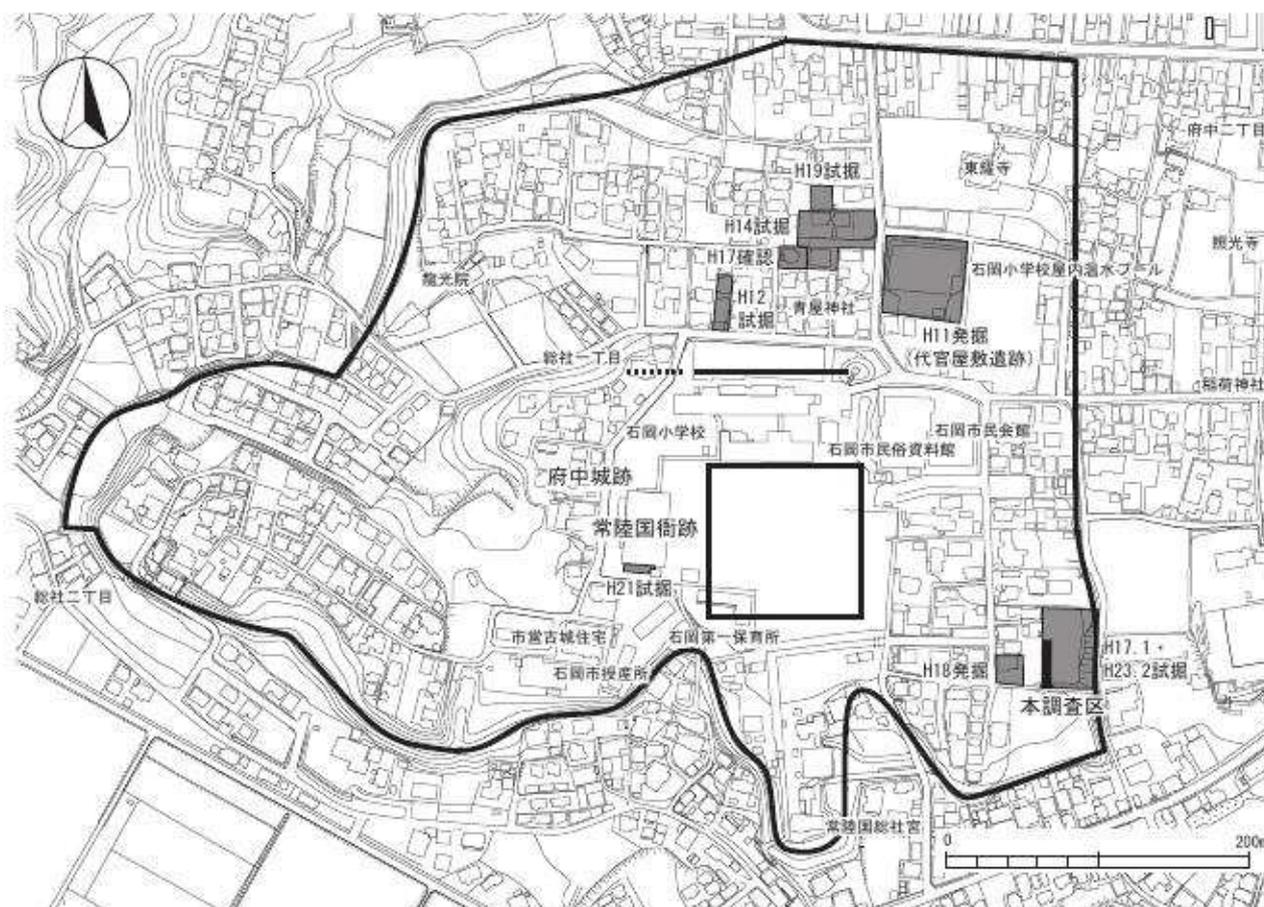
第1表 トレンチ出土遺物観察表

存在	遺物	種類	形状	口径	高さ	底径	残存	底部の特徴	底部の特徴	胎土	焼成	色調	重量	備考	
	706	01	土師質土器	かわらけ	16.1	3.2	4.6	2/3	丸味のある底部。口縁は外側。底部はやや突出する。	ロクロ製形。回転軸廻りは右方向。	灰母少量。白色。粒子少量。	良好	内外面 10187/3 に511番標	89.2	
	709	01	須恵器	返り蓋	16.0	3.8	幅み径 3.8	2/3	天井は弓張状を呈しフタミは傾きの太い扁平碗状。返しを有す。	ロクロ製形。天井の回転軸は右向きは1/3。	長石・石英等小一中粒非常に多い。白色針状物少量。	良好	内外面 X1/戻	203.5	
	710	01	須恵器	高台付坪	14.8	6.2	8.2	ほぼ完整	高台は「ハ」の字に付され底部は見込で傾斜した後やや外反気味に開く。	ロクロ製形。底部～体部下縁は回転軸向き。	胎分の噴出しが多い。小一中粒をやや多い。	良好	内面 2.0186/1 黄次 外面 7.0185/1 戻	268.9	
	710	02	須恵器	高台付坪	115.31	35.40	18.71	1/4	高台は「ハ」の字に付され体部は見込で傾斜した後やや外反気味に開く。	ロクロ製形。体部下縁は回転軸向き。	長石・石英等小一中粒・白色針状物やや多い。	やや還元不具	内外面 10186/2 灰黄肌	74.8	
	715	01	土師器	高台付坪	114.91	6.5	6.6	口縁1/2 一底部	高台は「ハ」の字に付され体部は見込で傾斜した後やや外反気味に開く。	ロクロ製形。底部～体部下縁は回転軸向き。内面はミガタ。	白色粒子少量。胎母微量。	良好	内面 10182/1 黒肌 外面 10182/4 に511番標	103.8	内面黒色地埋
	715	02	須恵器	蓋	—	32.71	5.6	胴部下縁	底部は平直。胴部下縁は扇形的に立つ。	ロクロ製形。外縁の回転軸は右向き。底部下縁は回転軸向き。	長石・石英等小一中粒やや多い。	良好	内外面 7.3176/4 戻	47.6	遺4
	715	01	土師器	蓋	13.8	3.5口径 3.5	幅み径 2.0	口縁1/2 欠損	天井は弓張状を呈しフタミは傾斜状。口縁で縁から外反し縁部は短く内傾し垂下する。やや小形。返しを持たない。	ロクロ製形。天井の回転軸は右向きは1/2。	白色粒子少量。胎母微量。	良好	内面 7.0182/1 黒 外面 10185/3 灰黄肌	126.1	内面黒色地埋
	715	02	土師器	蓋	119.21	32.40	—	口縁2/3	口縁は扇形的に開いた後傾斜し。底部はやや外反気味に垂下する。返しを持たない。	ロクロ製形。残存部の回転軸は右向きは1/3。	白色粒子・黒色粒子微量。	良好	内面 7.0182/1 黒 外面 10186/5 に511番標	63.8	内面黒色地埋
	715	02	須恵器	蓋	14.8	3.5	幅み径 2.6	3/4	天井は弓張状を呈しフタミは傾斜状。底部は短く内傾する。やや小形。返しを持たない。	ロクロ製形。天井の回転軸は右向きは1/3。	長石・石英等小一中粒・胎分の噴出しやや多い。	良好	内外面 X1/戻	161.6	
	715	04	須恵器	蓋	14.7	4.6	幅み径 3.2	口縁1/4 欠損	天井は弓張状を呈しフタミは傾斜状。底部は短く内傾する。やや小形。返しを持たない。	ロクロ製形。天井の回転軸は右向きは1/3。	長石・石英・雲母が多い。	良好	内面 2.0185/1 黄次 外面 10186/1 黒肌	186.2	新出物 内面地埋 「井」字状 子よ書き
	715	05	須恵器	蓋	114.51	33.90	幅み径 2.7	1/3	天井は弓張状を呈しフタミは傾斜状。底部は短く内傾する。やや小形。返しを持たない。	ロクロ製形。天井の回転軸は右向きは1/3。	胎分の噴出しをやや多い。小一中粒少量。	良好	内外面 X6/戻	111.7	
	715	06	須恵器	蓋	117.61	34.20	幅み径 3.13	1/4	天井は弓張状を呈しフタミは中央が膨らみ碗状内傾状。底部は短く先立ち状となる。	ロクロ製形。天井の回転軸は右向きは1/3。	長石・石英等小一中粒・胎母少量。	やや還元不具	内面 2.0186/1 黄次 外面 2.0186/2 灰黄	170.2	
	715	07	須恵器	蓋	117.41	34.30	幅み径 3.01	1/4	天井は弓張状を呈しフタミは扁平な碗状。口縁で縁から外反し底部は短く垂下する。返しを持たない。	ロクロ製形。天井の回転軸は右向きは1/3。	長石・石英等小一中粒多い。	やや還元不具	内外面 10186/1 黒肌	99.6	
	715	08	須恵器	高台付坪	—	32.60	—	底部	高台は「ハ」の字に付されるもの。体部は見込で縁やりに内傾し大きく開く。	ロクロ製形。底部～体部下縁は回転軸向き。	胎分の噴出しをやや多い。白色粒子少量。	良好	内外面 X6/戻	214.8	
	715	09	瓦	平瓦	厚 18.61 幅 19.91	厚さ 2.2	下辺・右 側辺残存	外面傾斜。内面有目肌。外面傾斜・側面ケズリ。	胎母微量。赤色粒子やや多い。黒色粒子やや多い。	良好	内外面 2.0184/1 灰白	231.1			
	702	01	土師器	蓋	126.91	33.81	—	口縁1/2	複合口縁。内面に強い襷を有し。折返し部分から大きく外反する。	内外面共にミガタ。	胎母多い。白色粒子少量。黒色粒子微量。	良好	内外面 7.5177/4 に511番標	61.9	内外面赤砂 古墳時代前期
	708	01	赤土器	蓋	—	32.21	—	口縁部片	縁やりに外反する。	口縁部片・外面に縄文彫文。	胎母多い。	良好	内外面 10182/1 黒	6.6	

第3章 遺跡の概要

石岡市は茨城県のほぼ中央、霞ヶ浦の北端に位置する。市街地は常総台地上（標高約24～26m）にあり、特にこの部分を石岡台地と呼ぶ。石岡台地の南側には恋瀬川、東側には山王川が流れ、それぞれ霞ヶ浦に注ぐ。府中城跡は石岡台地上の恋瀬川に面した縁辺部から市街地西部にかけての範囲に所在する。

今回報告される府中城周辺では近年、常陸国衙跡・代官屋敷遺跡・府中城跡の調査が行われている。縄文時代の遺構としては代官屋敷遺跡・府中城跡（第4地点）から中期の土抗群が確認されている。また、昭和45年の国衙跡の調査では阿玉台式土器が報告されており、中期の集落が広く存在していた可能性がある。古墳時代の住居跡は常陸国衙跡で確認されている。奈良・平安時代は常陸国衙跡（詳細は報告書に譲る）を中心として全ての遺跡で確認されている。住居跡は代官屋敷遺跡で8世紀から10世紀にかけてのものが確認されている。掘立柱建物は代官屋敷遺跡から9世紀半ばとされる5間×1間の東西棟が、府中城跡（第5地点）から柱穴1基（建物規模は不明）が確認されている。注目される資料としては平成17年度に今回の報告地点を試掘した折に円形の土抗から大量の須恵器が確認され木葉下窯と新治窯のものが拮抗して検出されるという結果を得ている。また、中世になると石岡小学校敷地内に存在する府中城土塁にみられるように府中城の



第3図 府中城跡調査地点 (S=1/5000)

範囲となる。府中城は常陸大掾氏の拠点であり、戦国時代末期に佐竹氏により滅ばされるまで機能していたものと思われる。遺物としては府中城跡（第4地点）及び代官屋敷遺跡から16世紀から17世紀初頭の土師質土器や内耳鍋などが確認されている。近世にはいと当地は府中藩の陣屋となり石岡小学校敷地内には県指定文化財の陣屋門が残る。府中城跡（第5地点）では穴蔵と思われる階段状の遺構が確認されており、床面からは美濃系腰錆茶碗や播鉢が出土している。また、石岡市史上巻に掲載されている陣屋略図によると今回の報告地点は府中陣屋の南東隅部分に相当しているものと思われる。略図では「土」（武士の邸宅の意か）、「役所」「クラ」「文武館」「訓練場」「井」などが記載されている。

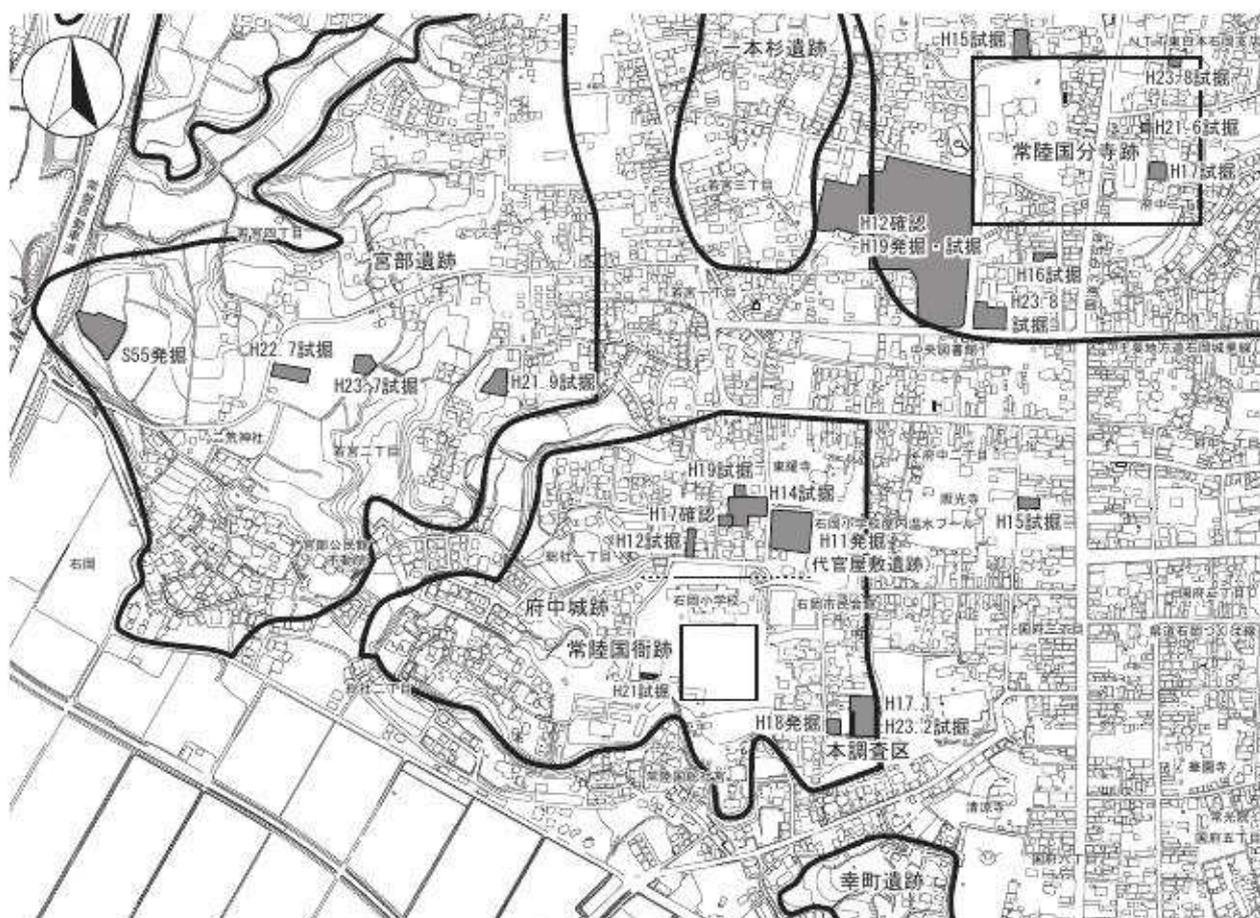
第2表 府中城跡調査歴

地点など	調査期間	調査面積	所在地	主な遺構（時期・遺物）	文献・備考	
第1地点	試掘（個人住宅）	平成12年6月	386㎡	総社1丁目270-7・9	なし（削平跡）	
第2地点	試掘（宅地造成）	平成14年6月～7月	1790㎡	総社1丁目274,275-1,275-2,281-1	堀, 掘立柱建物1, 竪穴住居1（縄文）, 土坑21（縄文）	
第3地点-1	試掘	平成17年1月	2300㎡	総社1丁目421-17ほか	土坑（古代, 中世）	小杉山・曾根2008
第3地点-2	試掘	平成23年2月	820㎡	総社1丁目421-86ほか	竪穴住居2, 土坑14	（平成23年度報告予定）
第3地点-3	発掘（道路）	平成23年7月～8月	191㎡	総社1丁目421-86ほか	掘立柱建物2（古代）, 竪穴住居5（古代）, 方形竪穴遺構4（中世）, 土坑17, ビット57	本報告
第4地点	確認	平成17年7月	330㎡	総社1-4	土坑（縄文）, ビット（中世）	小杉山2906
第5地点	発掘（個人住宅）	平成18年8月～9月	353㎡	総社1丁目421-22	掘立柱建物1, 土坑10, 穴蔵?（近世）	小杉山2007
第6地点	試掘（個人住宅）	平成19年5月	281㎡	総社1丁目281-7・9	なし（削平跡）	小杉山・曾根2009
工事立会い	道路改良	平成17年11月	2,145㎡	府中2丁目	なし（削平跡）	小杉山2906
代官屋敷遺跡	小学校温水プール建設	平成11年10月～平成12年2月	1,690㎡	総社1丁目408	掘立柱建物1, 竪穴住居4, 溝3, 土坑（縄文）ほか	小杉山2005
常陸田衛跡	小学校校舎改築	昭和45年3月～4月	560㎡	総社1丁目278ほか	掘立柱建物, 井戸2, 溝3, 竪穴住居1（古墳前期）	豊崎1973
	第0次確認	平成10年9月～平成11年9月	3,506㎡	総社1丁目278ほか	掘立柱建物6, 堀2, 大溝4, 溝4ほか	箕輪2001
	第1次確認	平成13年10月～平成14年3月	910㎡	総社1丁目278ほか		箕輪2009
	第2次確認	平成14年10月～平成15年4月	1,370㎡	総社1丁目278ほか		
	第3次確認	平成15年12月～平成16年3月	677㎡	総社1丁目278ほか		
	第4次確認	平成16年10月～平成17年5月	1,248㎡	総社1丁目278ほか	掘立柱建物34, 礎石建物4, 堀9, 掘立柱不明遺構2, 溝12, 土坑2ほか	
	第5次確認	平成17年7月～平成18年3月	1,155㎡	総社1丁目278ほか		
	第6次確認	平成18年7月～平成19年3月	906㎡	総社1丁目278ほか		
	試掘（屋内運動場耐震補強）	平成21年9月～10月	90㎡	総社1丁目278ほか	堀	



第4図 遺跡周辺図

(S=1/50000・国土地理院5万分の1地形図「石岡」「真壁」「玉造」「土浦」を合成・加筆)



第5図 府中城跡調査地点位置図 (S=1/10000)

第4章 調査の方法と標準堆積土層

第1節 調査の方法

調査区は、石岡市府中・総社・国府の市街地が載る台地上の縁辺に位置し、東北東に浸入する谷津に北面する。当該開発区域のうち、西端の位置指定道路建設予定地の191㎡が調査対象である。

表土は石岡市教育委員会が行った試掘調査結果に基づき、遺構確認面となるソフトローム層上面までをバックホーを用いて除去し、遺構検出作業は鋤簾を用いて行った。確認された遺構は平板実測で遺構確認図（100分の1）を作図し、遺構番号は調査順に付した。遺構の種類別表記は、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の記号表記に準じた。

グリッドの設定には世界測地系IX系を基準として、10m方眼となるように杭を打設した。調査区北西端の杭をA0グリッド（X=21060,Y=39330）に設定し、西から東へアラビア数字、北から南へアルファベット（大文字）を付し、北西角のグリッド番号をそれぞれのグリッドの名称とした。

遺構の精査は、土層観察用ベルトを設定し、移植鍬を用いて掘り下げを行った。記録は遺構平面図、全体測量図は平板実測にて作図し、状況に応じて遺方実測を行い補足した。遺物の出土状況はレベルおよび平板を用いて3次元位置の記録をした後、取り上げた。平面図、土層断面図、エレベーション図の縮尺は20分の1を基本とし、必要に応じて10分の1で作図した。写真による記録は、35mmの白黒ネガフィルム及びカラーポジフィルムカメラ、デジタルカメラを用いて行った。

出土遺物はそれぞれの遺構毎に遺物収納箱に収納し、遺物台帳を作成した。

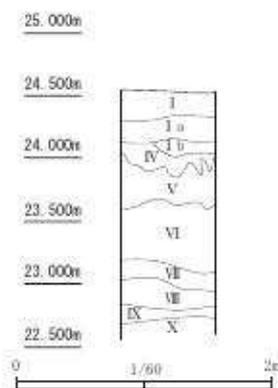
発掘調査

- 7月28日 器材の類入、重機を用いて表土掘削を行う。
- 8月2日 遺構確認作業を行い、確認図を作成する。
- 3日 基準杭を設置する。
- 5日 遺構の掘削を開始する。住居跡にはベルトを設置し、土坑は半裁して堆積状況を確認した後、完掘する。
- 31日 全ての遺構の調査を終了する。完掘写真を撮影し、教育委員会小杉山氏立ち会いのもと終了確認を行う。

整理調査

- 9月1日 基礎整理作業を開始する。
- 8日 遺物の実測を開始する。
- 30日 遺物実測図・遺構実測図のデジタルトレースを開始する。
- 11月22日 初稿版組みを行う。
- 30日 校正を行う。
- 12月16日 報告書編集を終える。
- 28日 報告書を教育委員会へ納品し、資料を返還する。

第2節 標準堆積土層



第6図 標準堆積土層

第I a～c層は耕作土であり、炭化物ブロックを含む。ただし、第I c層はテストピットでは存在しなかった。第IV層は褐色のソフトローム漸移層である。第V層はソフトローム層であり、上面が本調査の確認面である。第VI層はハードローム層である。第IX層は黄褐色土粒子を含む鹿沼軽石層である。

I 耕作土

- I a 10YR3/4 暗褐色 ローム粒子・ブロックφ1～5mm 中量、炭化物ブロックφ1～3mm 中量。
- I b 10YR3/4 暗褐色 ローム粒子・ブロックφ1～5mm 中量、炭化物ブロックφ1～2mm 数量。
- I c 10YR3/4 暗褐色 ローム粒子・ブロックφ1～10mm 多量、炭化物ブロックφ1～3mm 微量。
- IV 10YR4/6 褐色 ローム粒子・ブロックφ1～10mm 多量、ややしまりあり、やや粘性あり。
- V 10YR4/6 褐色 暗褐色土粒子極微量。しまり、粘性あり。
- VI 10YR4/4 褐色 黄褐色土粒子極微量。しまり強、やや粘性あり。
- VII 10YR4/4 褐色 黒褐色土粒子微量。しまり強、粘性あり。
- VIII 10YR5/4 にぶい黄褐 黄褐色土微量。しまり、粘性強。
- IX 10YR5/6 黄褐色 黄褐色土粒子φ3～5mm 極微量。しまり、粘性強。
- X 10YR5/6 黄褐色 黒褐色土粒子・ブロックφ3～5mm 極微量、黄褐色土ブロックφ3～5mm 中量。しまり強、粘性あり。

第5章 検出された遺構と遺物

本調査では住居跡5軒、掘立柱建物跡2棟、方形竪穴遺構4基、土坑17基、ピット57基が確認された。土坑・ピットについては帰属時期や性格を明らかにし得ないものが多く、基本的に各属性を一覧表にまとめ（第25・26表）、その内、伴出遺物が明確なものや特徴的なものについて個別に取り上げることとした。

検出された遺物の総量は遺物整理箱6箱（37リットル相当）、重量63,009gに上る。種別内容は試掘調査同様、縄文時代から近・現代に至るまで採取された。中でも主体を示すのは、奈良時代・8世紀後葉で、遺構では住居跡に伴うものとなる。以下、遺物データの提示方針としては、当該期の遺物は遺構外出土のものも極力図化・提示することとし、個別の詳細は観察表に委ねた。その他の時期、特に中世以降の遺物については写真と解説を示すこととした。

第1節 古代の遺構と遺物

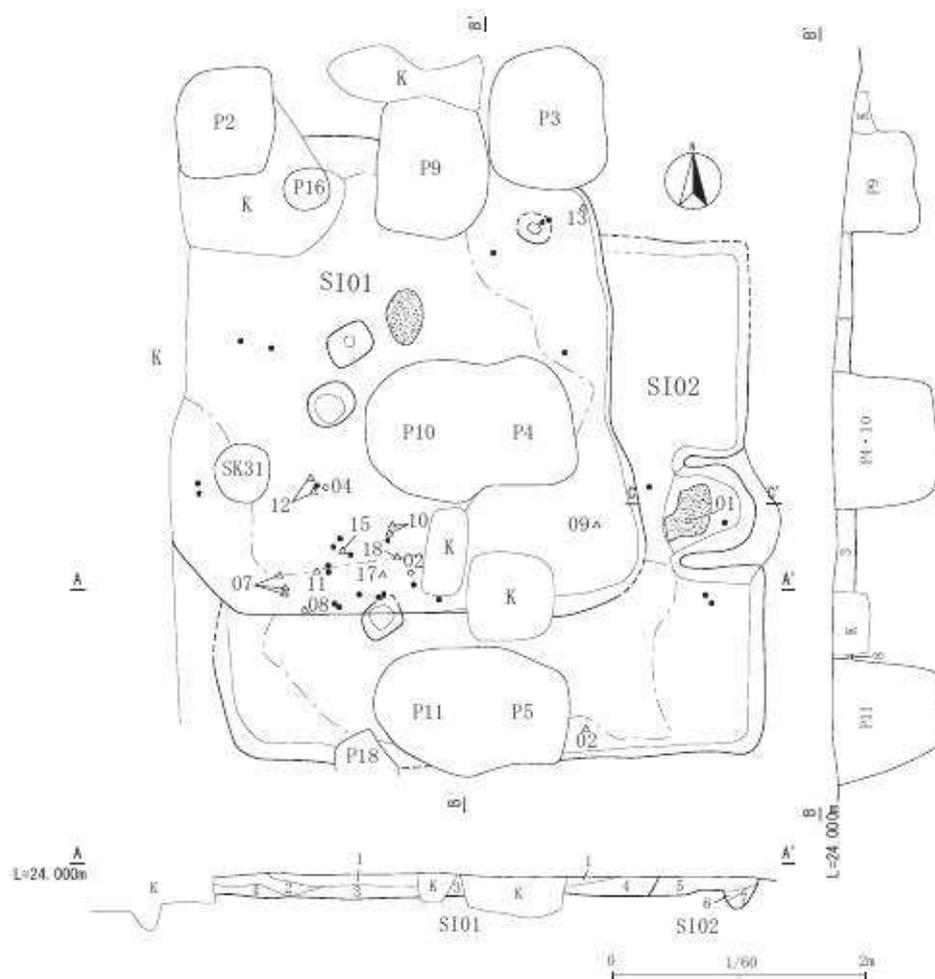
第1項 住居跡

SI01（第8・10図、第3表、遺構図版1、遺物図版1）

B1グリッドに位置する。SI02を切る。西側の壁は配管埋設で壊され、掘立柱建物跡SB01・02の柱穴に切られる。平面規模は南北3.81m、東西3.75mまでが確認され、ほぼ正方形を呈する。主軸方向はN-1°-E。床はほぼ平坦であり、壁付近を除き硬化面が確認された。深さは確認面から最深部で26cmを測る。覆土は暗褐色を基調とした4層に分層された。床面中央やや北寄り（北側壁から約1.1m、東側壁から約1.5m）で火床面が検出された。火床面の規模は長軸45cm、短軸29cm、南北方向に長い不整楕円形を呈する。直接的な関係を示す遺物や特筆すべき状況は看取されなかった。カマドの付設は確認されていない。北・西壁付近に可能性を残すが、カマド構築土・材や焼土等の分布は確認できなかった。柱穴は3基確認され、支柱穴と判断できるものはない。

出土遺物には、土師器4620.7g、須恵器8617.9g、瓦287.8gがある。南西側の覆土第1・2層下部に集中する。また、掘立柱建物跡の柱穴（SB01-P4、SB02-P9・10）の覆土から検出された遺物（土師器290.0g、須恵器861.2g、瓦132.5g）は、遺物相から見て本来、本住居跡覆土に含まれていたものと考えられる。さらに、前述したとおり試掘調査T13及びT13拡張区で検出された遺物（土師器971.8g、須恵器1755.7g、瓦231.1g）も、同トレンチが本住居跡の中央～南東に位置していたことから、本住居跡に伴うものとしてよい。SB01-P3に位置するT10検出遺物（土師器178.2g、須恵器447.5g）も同様にSI01由来の遺物と見てよいだろう。

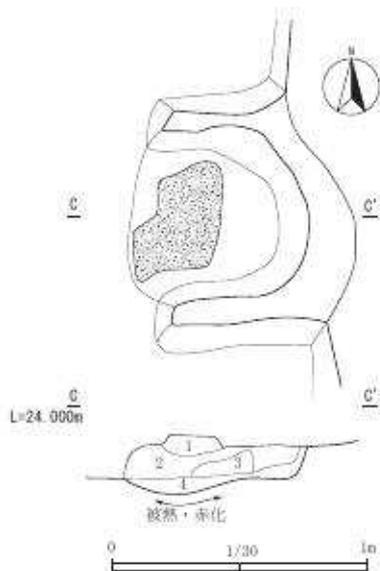
須恵器は丈高・小径の擬宝珠摘みの蓋が付く、腰部有稜の高台付坏が主体で、高台付盤や脚付盤が伴う。土師器もこれらの坏・盤を模倣したもので、内面ミガキ・黒色処理が施される。8世紀後葉に位置づけられよう。また、本住居跡において採取された礫1499.3gの中には、石英円礫破片1点18.3g（一括取り上げ）がある。



S101-02 セクション

1. 10YR5/4 暗褐色 コーム粒子・ブロック径1~3mm少量、黒褐色土ブロック径1~3mm少量、炭化物ブロック径1~1mm微量、ややしまりあり、やや粘性あり。
2. 10YR5/4 暗褐色 コーム粒子・ブロック径1~3mm少量、暗褐色土ブロック径1~10mm少量、黒褐色土ブロック径1~10mm少量、炭化物ブロック径1~10mm微量、ややしまりあり、やや粘性あり。
3. 10YR5/4 暗褐色 コーム粒子・ブロック径1~10mm少量、黒褐色土ブロック径1~10mm少量、炭化物ブロック径1~5mm微量、ややしまりあり、やや粘性あり。
4. 10YR5/4 暗褐色 コーム粒子・ブロック径1~20mm少量、黒褐色土ブロック径1~5mm少量、ややしまりあり、やや粘性あり。
5. 10YR5/4 暗褐色 コーム粒子・ブロック径1~3mm少量、暗褐色土ブロック径1~5mm少量、黒褐色土ブロック径1~8mm少量、炭化物ブロック径1~3mm微量、ややしまりあり、やや粘性あり。
6. 10YR5/4 暗褐色 コーム粒子・ブロック径1~10mm少量、暗褐色土ブロック径1~5mm少量、ややしまりあり、やや粘性あり。
7. 10YR5/4 暗褐色 コーム粒子・ブロック径1~3mm少量、暗褐色土ブロック径1~3mm少量、ややしまりあり、やや粘性あり。

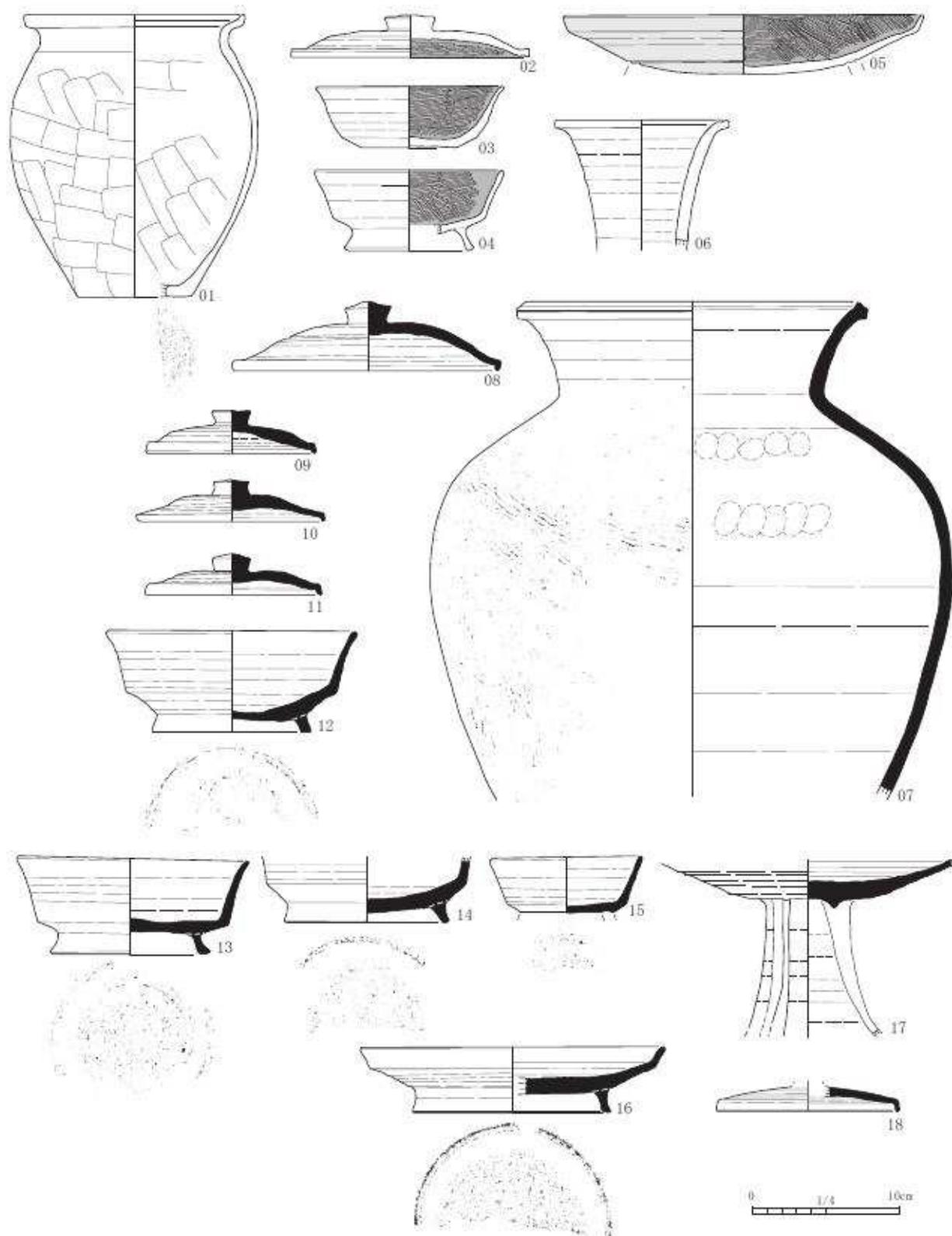
第8図 S101・02



S102 カマド セクション

1. 10YR5/2 濃い黄褐色 コーム粒子・ブロック径1~5mm少量、黄土ブロック径1~5mm少量、炭化物ブロック径1~3mm微量、網砂粒子径1~2mm少量、ややしまりあり、やや粘性あり。
2. 5YR4/6 赤褐色 コーム粒子・ブロック径1~3mm少量、黒褐色土ブロック径1~10mm少量、黄土ブロック径1~10mm少量、炭化物ブロック径1~2mm微量、ややしまりあり、やや粘性あり。
3. 10YR5/4 暗褐色 コーム粒子・ブロック径1~8mm少量、黒褐色土ブロック径1~5mm少量、黄土ブロック径1~4mm少量、炭化物ブロック径1~3mm少量、ややしまりあり、やや粘性あり。
4. 10YR5/3 暗褐色 コーム粒子・ブロック径1~10mm少量、黄土ブロック径1~15mm少量、炭化物ブロック径1~10mm微量、ややしまりあり、やや粘性あり。

第9図 S102 カマド



第10図 SI01 出土遺物

第3表 SI01 出土遺物観察表

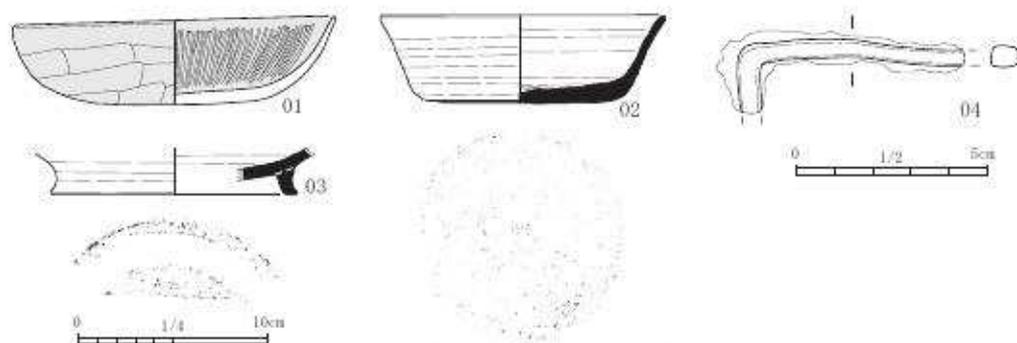
遺物番号	土層	種類	形状	口径	高さ	底径	残存	器身の特徴	底部の特徴	胎土	焼成	色調	重量	備考
01	層土、T-13 灰層	土師器	浅	114.8	38.9	7.7	口縁1/6 胴高1/3 底高1/4	最大径を上部に有し、口縁で「C」の字に外反した後口縁は縮み上げられる。	口縁は内外面に横ナシ、胴部外面はナガサヘラケズリ、内面はナガサ横ナシ。	長石・石英・雲母多い。	二次焼成あり	内外面 10B5/3 に近い黄褐色	377.1	漆器木製痕
02	No.30	土師器	蓋	16.9	2.8	横み径 3.4	2/3	天井部が平頂で扁平なボタンの縁のみが外反し、肩部は縁が外反し短く垂下する。蓋しを持たない。	ロクロ整形。内面はミガキ。天井部ヘラケズリは1/2。	炭母やや多い、白色粘土・スロリア・ア少量、白色斜状物質少量。	良好	内面 10B11/7/1 帯 外面 10B27/3 に近い黄褐色	129.9	内面黒色地埋
03	層土	土師器	器	112.6	4.2	6.4	1/4	肩部はやや上げ気味の平頂、見込で縁や小に内反した後直線的に縁が縮み上げられる。	ロクロ整形。内面はミガキ。肩部へ体部下縁は回転ヘラケズリ。	黒色粘土・白色粘土・スロリア・雲母少量	良好	内面 10B22/4 黒 外面 10B27/4 に近い黄褐色	28.9	内面黒色地埋
04	No.21	土師器	高台付伴	112.0	5.4	6.1	1/3	高台は「フ」の字に付され、体部は身込で縁出した後直線的に縁が縮み上げられる。	ロクロ整形。内面はミガキ。	黒色粘土・白色粘土・スロリア・雲母少量	良好	内面 10B22/4 黒 外面 10B27/4 に近い黄褐色	45.7	内面黒色地埋
05	層土	土師器	高台付盤	121.1	3.9	—	1/4 高台欠損	平や大形の盤。高台欠損、見込は縁や小に内反し、口縁は短く外反する。	ロクロ整形。肩部及び体部下縁は回転ヘラケズリ、内面はミガキ。	白色粘土少量	良好	内面 10B22/4 黒 外面 10B27/4 に近い黄褐色	195.6	外面赤砂 内面黒色地埋
06	層土	土師器	長頸甕	111.0	38.1	—	頸高1/2	直線的に縁が縮み上げられ、口縁は短く外反する。	ロクロ整形。	白色粘土多い、黒色粘土少量、雲母・スロリア少量	二次焼成あり	内面 7.10B27/4 に近い黄褐色 外面 7.10B27/6 黄褐色	75.7	
07	No.19・01・11、層土、黄砂	須恵器	大甕	122.6	33.0	—	口縁へ胴部下縁1/2欠損	口縁の垂りは無い、口縁で「C」の字に外反した後やや外反気味に縁が縮み上げられる。口縁は縮み上げ直下に浅い花線が二重ある。	回転使用あり。胴部外面は平頂中反、内面は前部直線・耳縁が縮み上げられる。	長石・石英等小一中粒やや多い	良好	内面 8B/1 外面 8B/1	1282.0	東海系
08	No.49	須恵器	蓋	17.8	4.6	横み径 3.1	ほぼ完形	天井は弓張状を呈し横みは縮み縮み、口縁で縁が外反し縮み短く垂下する。蓋しを持たない。	ロクロ整形。天井の回転ヘラケズリは1/2。	長石・石英等小一中粒多い	やや焼成不良	内外面 10B16/4 黄褐色	290.1	
09	No.50	須恵器	蓋	11.4	2.9	横み径 2.1	ほぼ完形	天井は弓張状を呈し横みは縮み縮み、口縁で縁が外反し縮み短く垂下する。蓋しを持たない。	ロクロ整形。天井の回転ヘラケズリは1/2。	長石・石英等小一中粒多い	良好	内外面 8A/1	312.4	
10	No.26・27	須恵器	蓋	12.5	2.7	横み径 2.4	口縁部1/2欠損	天井は弓張状を呈し横みは縮み縮み、口縁で縁が外反し縮み短く垂下する。小形で縁無し。	ロクロ整形。天井の回転ヘラケズリは1/2。	長石・石英等小一中粒多い	良好	内外面 8B/2	107.3	
11	No.42	須恵器	蓋	11.9	2.7	横み径 2.6	2/3	天井は平頂、横みは縮み縮み、口縁で縁が外反し縮み短く垂下する。小形。	ロクロ整形。天井の回転ヘラケズリは1/2。	長石・石英・雲母多い	良好	内外面 2.10B1/1 灰白	85.9	新治産
12	No.22・25	須恵器	高台付伴	116.7	6.7	10.8	口縁部1/4一底高1/2	高台は「フ」の字に付され、体部は身込で縁出した後直線的に縁が縮み上げられる。	ロクロ整形。底部へ体部下縁は回転ヘラケズリ。	長石・石英等小一中粒多い、白色斜状物質少量	良好	内外面 8B/2 灰オリーブ	181.2	内比金埋あり
13	No.4	須恵器	高台付伴	115.0	6.4	10.9	ほぼ完形	高台は「フ」の字に付され、体部は身込で縁出した後直線的に縁が縮み上げられる。	ロクロ整形。底部へ体部下縁は回転ヘラケズリ。	長石・石英等小一中粒非常に多い	良好	内外面 8A/1	376.9	
14	層土	須恵器	高台付伴	—	34.4	110.5	体部下縁一底高1/2	高台は「フ」の字に付され、体部は身込で縁出した後直線的に縁が縮み上げられる。	ロクロ整形。底部へ体部下縁は回転ヘラケズリ。	長石・石英等小一中粒非常に多い	良好	内外面 8A/1	182.4	
15	No.47	須恵器	高台付伴	115.1	3.7	—	1/2 高台欠損	高台は「フ」の字に付され、体部は身込で縁出した後直線的に縁が縮み上げられる。	ロクロ整形。底部へ体部下縁は回転ヘラケズリ。	長石・石英等小一中粒多い	良好	内外面 8B/1	64.2	
16	層土	須恵器	高台付盤	120.0	4.4	13.2	1/2	高台は「フ」の字に付され、体部は身込で縁や小に大きく内反し、口縁は土粒に明確な縁を有し外反する。	ロクロ整形。底部は回転ヘラケズリ。	長石・石英等小一中粒非常に多い	良好	内外面 8B/1	250.5	
17	No.15・21	須恵器	餅付盤	—	31.3	—	口縁及び胴部欠損	土師は大きく内反し、餅付はやや外反気味に縁が縮み上げられる。	ロクロ整形。	長石・石英等小一中粒やや多い、雲母少量	良好	内外面 8A/1	407.3	三宅群 新治産
18	No.29	須恵器	短頸甕	12.2	11.8	—	1/2 横み欠損	天井は弓張状を呈し、肩部はやや外反気味に垂下する。	ロクロ整形。天井の回転ヘラケズリは1/2。	鉄分の噴出し土量	良好	内面 8B/1 灰 外面 8B/2 灰オリーブ	56.5	自然酸化埋

SI02 (第8・9・11図、第4表、遺構図版1、遺物図版2)

B1 グリッドに位置する。北西側の大部分がSI01に切られる。また、南側の壁付近をSB01・02の柱穴に切られる。平面規模は南北4.14 m、東西4.33 mを測り、ほぼ正方形を呈する。主軸方向はN-86° -E。床はほぼ平坦であり、南側の残存範囲では硬化面が確認された。深さは確認面より15 cmを測る。覆土は暗褐色を基調とした3層に分層される。カマドは東壁中央部のやや南寄りを約19 cm掘り込んで構築される。天井部は残存せず、両袖の基部が確認された。規模は全長90 cm、最大幅101 cm、床面からの高さ約17 cmが残存する。袖部は住居壁面からほぼ直角に並走し、左袖は基部で最大幅39 cm、奥行き53 cm、右袖は基部で最大幅31 cm、奥行き69 cmを測る。火袋部は最大幅67 cmを測る。柱穴は1基確認したが、主柱穴と判断できるものではない。周溝は東壁の一部で確認された。

出土遺物には、土師器1445.4g、須恵器649.1gがある。他に、試掘調査T9検出遺物(土師器41.3g、須恵器208.5g)も本住居跡に伴うものとしてよい。前述のとおり、SI01に大半を切られているために、本来の分布状況を窺い知ることはできないが、カマド火袋部中央の覆土中に正位の状態で検出された土師器坏(01)の完形品は注意される。内面ミガキ、内外面赤彩された塊形・丸底の坏で、被熱痕跡や使用痕跡は認められない。いわゆるカマド廃絶に係わる祭祀に使用された可能性が指摘される。

須恵器は扁平・凹み摘みの返り蓋(T9-01)と底部径が大きく、丸味をのこす無台坏(02)、高台付盤(03)が見られる。8世紀前葉に位置づけられるだろう。



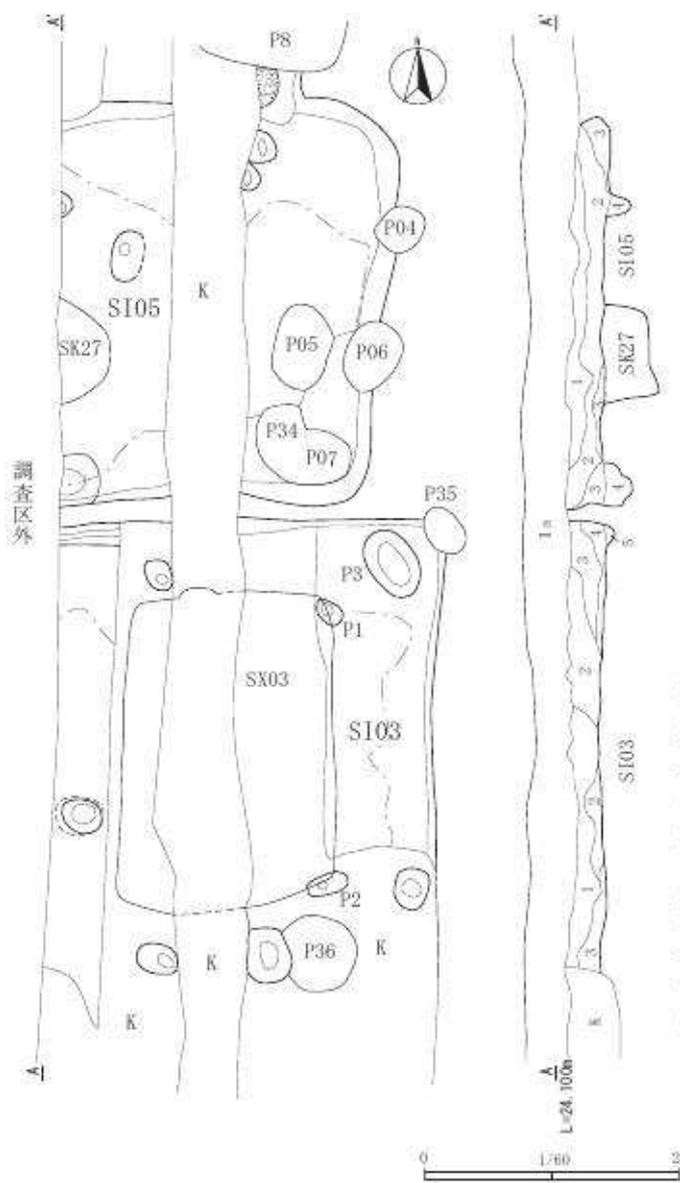
第11図 SI02 出土遺物

第4表 SI02 出土遺物観察表

遺物番号	出況	種類	図種	口径	深高	底径	残存	器目の特徴	意匠の特徴	胎土	焼成	色調	重量	備考
01	No.3	土師器	坏	16.8	4.3	丸底	ほぼ完形	底部は平底丸味の丸底、見込で緩やかに内湾し口縁に至る。	口縁は内外面共に横ナシ。体部外面はヘラケズリ。内面は放射状線文が施されている。	白色粘土やや多い、炭母散在	良好	内外面 2.5B5/8明赤褐	316.9	内外面赤彩
02	No.1	須恵器	坏	15.0	4.5	10.0	口縁1/3欠損	底部は平底、身込で内湾し体部はやや外反架橋に開く。	コケロ整形。体部下縁へ基部同様にヘラケズリ。	長石・石英・炭母多い、鉄分の抽出しやや多い	良好	内外面 10B6/3に3/1黄橙	308.5	断片産
03	礎土	須恵器	高台付盤	—	(2.45)	(13.0)	底部1/3欠損	高台は「コ」の字に付され体部は見込で緩やかに開く。	コケロ整形。基部同様にヘラケズリ。	白色粘土少量、鉄分の抽出し散在	良好	内外面 N5/灰	68.1	
04	礎土	鉄製品	鏡	長さ16.00	幅0.7	厚さ0.6	西側欠損	全形不明。軸心、断面は概ね長方形を呈する。					15.1	

SI03 (第12・13図、第5表、遺構図版2、遺物図版2)

C1 グリッドに位置する。中央を南北に走る水道管理設と、南側は大きく攪乱されている。また、中央部には方形竪穴遺構SX03が掘り込まれている。西側は調査区外に延びる。北・東壁、北東隅を確認、平面規模は南北2.84 m以上、東西3.04 m以上、方形を呈する。主軸方向はN-2° -E。床はほぼ平坦であり、壁付近以外では硬化面が確認された。深さは第1(a)層直下から27 cmを測る。覆土は暗褐色を基調とした5層に



第12図 SI03・05

分層される。柱穴は8基が確認され、P1は深さ41.3cm、P2は同36.6cmで、配置から四本支柱の2基と思われる。すると、平面規模は一辺3.5～4.0m程になるだろうか。北東隅にあるP3は長軸57.3cm、短軸37.1cm、深さ14.7cmの平面楕円形の土坑状で、いわゆる貯蔵穴と見られる。周溝は北側壁の一部で確認された。

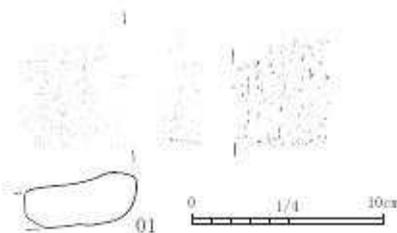
出土遺物には、土師器18L、8g、瓦126.5gがある。少量の小破片資料のため、明確な位置づけが難しいが、9世紀末葉に比定される内面黒色処理の坏類が見られる。図示した01は内面布目、外面漉タタキの瓦で、常陸国分寺系瓦と同類のものである。

SI03 セクション

- 1 10R3/4暗褐色 ローム粒子・ブロック径1～10mm中量、暗褐色土ブロック径1～15mm少量、黒褐色土ブロック径1～10mm少量、ややしまりあり、やや粘性あり。
- 2 10R3/4暗褐色 ローム粒子・ブロック径1～5mm中量、黒褐色土ブロック径1～10mm多量、ややしまりあり、やや粘性あり。
- 3 10R3/4暗褐色 ローム粒子・ブロック径1～10mm少量、暗褐色土ブロック径1～10mm少量、黒褐色土ブロック径1～3mm少量、ややしまりあり、やや粘性あり。
- 4 10R3/4暗褐色 ローム粒子・ブロック径1～3mm少量、黒褐色土ブロック径1～5mm中量、炭化物ブロック径1～2mm少量、ややしまりあり、やや粘性あり。
- 5 10R3/4暗褐色 ローム粒子・ブロック径1～5mm量、黒褐色土ブロック径1～10mm多量、ややしまりあり、やや粘性あり。

SI05 セクション

- 1 10R3/4暗褐色 ローム粒子・ブロック径1～10mm中量、黒褐色土ブロック径1～5mm少量、ややしまりあり、やや粘性あり。
- 2 10R3/4暗褐色 ローム粒子・ブロック径1～15mm中量、黒褐色土ブロック径1～10mm少量、炭化物ブロック径1～3mm少量、ややしまりあり、やや粘性あり。
- 3 10R3/4暗褐色 ローム粒子・ブロック径1～10mm多量、黒褐色土ブロック径1～10mm中量、ややしまりあり、やや粘性あり。
- 4 10R3/4暗褐色 ローム粒子・ブロック径1～5mm多量、ややしまりあり、やや粘性あり。



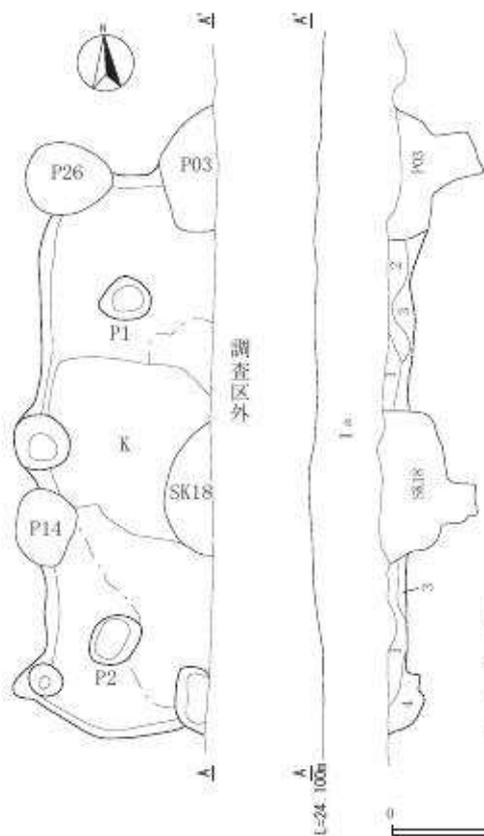
第13図 SI03出土遺物

第5表 SI03出土遺物観察表

遺物番号	注記	種類	部種	口径	長さ	高さ	厚さ	状態	器形の特徴	意匠の特徴	胎土	焼域	色調	重量	備考
01		瓦	平瓦	縦 36.3	横 55.8		厚さ 2.4	右側切 残存	外面漉可き、内面有目肌、田間編目・側面ケスリ。		白色灰子や多い	良好	内外面 3R5/1灰	126.5	

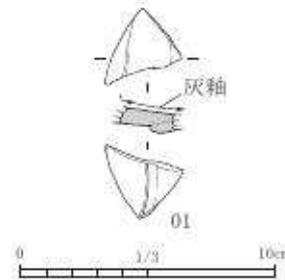
SI04 (第14・15図、第6表、遺構図版2、遺物図版2)

C1グリッドに位置する。大部分は調査区外であり、西壁付近が確認された。SK18、P03(時期不明)などに切られる。平面規模は南北4.47m、東西1.34m以上、方形を呈する。主軸方向はN-5°-E。床は平坦であり、中央部から南側壁付近にかけて硬化面が確認された。深さは第I(a)層直下から14cmを測る。覆土は暗褐色を基調とした4層に分層され、下層に多くロームブロックを含む。柱穴は床面に2基、壁に3基確認した。前者のP1は深さ20.6cm、P2は同23.3cmを測り、4本支柱のうちの2基と見られる。



第14図 SI04

出土遺物には、土師器 304.8g、須恵器 156.7g、灰釉陶器 5.6g(1点)がある。いずれも小破片のため遺構への帰属及び時期を明確にし難い。掘方から8世紀初頭の土師器坏、覆土から8世紀後半の須恵器坏と10世紀代の内面黒色処理の土師器碗が見られる。図示した01は灰釉陶器で、作りから平瓶と考えられる。



第15図 SI04出土遺物

- SI04セクション
- 10A33/4 暗褐色 ローム粒子・ブロックφ1~5mm少量、赤褐色土ブロックφ1~5mm少量、ややしまりあり、やや粘性あり。
 - 10A35/4 暗褐色 ローム粒子・ブロックφ1~10mm中量、黒褐色土ブロックφ1~5mm少量、灰化物ブロックφ1~2mm微量、ややしまりあり、やや粘性あり。
 - 10A37/4 暗褐色 ローム粒子・ブロックφ1~20mm少量、赤褐色土ブロックφ1~10mm少量、灰化物ブロックφ1~2mm微量、ややしまりあり、やや粘性あり。
 - 10A38/4 暗褐色 ローム粒子・ブロックφ1~5mm少量、赤褐色土ブロックφ1~5mm少量、黒褐色土ブロックφ1~10mm中量、ややしまりあり、やや粘性あり。

第6表 SI04 出土遺物観察表

遺物番号	位置	種類	器種	口径	器高	口径	残存	器形の特徴	器形の特徴	胎土	焼成	色調	重量	備考
01	覆土	灰釉陶器	平瓶	瓶 (3.0)	瓶 (3.1)	-	瓶口縁部	体部直群時の瓶口縁部、外面に立ち上り筋部、把手の付け根。	瓶口縁部を内側で磨き、外面灰釉。	鉄粒子微量。	良好	外面 7.556/3 オリーブ黄 内面 7.556/2 灰白	5.6	

SI05 (第12図、遺構図版2)

C1 グリッドに位置する。SK27 (時期不明) を切って構築され、SB01 の柱穴にカマドを切られる。また、中央を南北に走る水道管理設によって壊されている。西側壁は調査区外であり、確認されなかった。平面規模は南北 3.45 m、東西 2.68 m 以上、方形を呈する。主軸方向は N-1° -W。床は平坦であり、カマド周辺と南東隅・南壁付近を除いて硬化面が確認された。深さは第 I (a) 層直下から約 25 cm を測る。覆土は暗褐色を基調とした 3 層に分層された。北壁の北東隅寄りには掘り込みがあり、火床部を伴うことからカマドと判断されるが、天井部と袖部は確認されなかった。全長 44 cm、幅約 40 cm までが残存する。柱穴は 3 基、調査区壁際の床下に 2 基確認したが、いずれも支柱穴とはならないものである。

出土遺物には、土師器 162.4g、須恵器 76.8g がある。やはり、いずれも小破片のため遺構への帰属及び時期を明確にし難い。8 世紀代の須恵器甕、9 世紀代の須恵器甕、10 世紀代の土師器皿が見られる。しかし、SB01・02-P8 にカマドを切られていることからすると、SI01・02 と同じく、8 世紀代の住居跡とし、後世の遺物の出土は著しい攪乱によるものと見る方が穏当であろう。

第2項 掘立柱建物跡

SB01・02 (第16・17図、第7～9表、遺構図版2～4、遺物図版2)

B・C1グリッドに位置する。同位置における建て替えによる重複関係を示すものと考えられる。新旧関係はSB01(旧)→SB02(新)である。SB01に帰属するのはP1～8であり、SB02に帰属するのはP8～13である。また、2棟ともに住居跡SI01・02・05を切って構築されている。

SB01 桁行4間、梁行2間以上の側柱建物である。桁行方向はN-2°-E。それぞれの柱間の芯々距離は、P2-P3間:2.35m、P3-P4間:2.23m、P4-P5間:2.24m、P5-P6間:2.16m、P6-P7間:2.11m、P7-P8間:2.19mである。1尺=29.6cm(令小尺〔唐尺])を用いると、一間7.5尺=2.22m、桁行30尺=8.88mとなる。各柱穴は平面隅丸方形で、長軸84～116cm、短軸80～92cm、深さ34～70cm、北東隅のP3が浅い。柱痕跡や柱のあたりは確認されなかった。P1・2・7では覆土下半部にローム粒子・ブロックを多く含む黒褐色土と暗褐色土の互層が確認でき、版築状を呈する。また、掘方埋め土と柱抜き痕跡の切り合いは確認されていない。

遺物は、P2から土師器188.7g、須恵器207.3g、P3から土師器143.3g、須恵器501.1g、SB02と区別できないP4・10から土師器251.4g、須恵器312.5gが検出された。大半が重複するSI01伴出遺物と同時期と見てもよいものである。SI01で記したとおり、これらには同住居跡由来のものが含まれると見られる。

P2-01の須恵器坏は小型化した底部と丸味を帯びた体部形状を呈する。雲母粒子を多く含む胎土、底部回転ヘラ切り無調整、体部下端無調整、還元不良の軟質焼成を示す。9世紀後半の新治産と推定され、本建物の存続時期の一端を示すものと考えられる。

P3-02の須恵器長頸壺は肩部～頸部付け根の成形が「三段構成」の猿投産であり、岩崎25号窯式～折戸10号窯式、8世紀中葉～末葉の所産となる。SI01由来の遺物の1つとなろう。

SB02 SB01と同様、桁行4間、梁行2間以上の側柱建物である。桁行方向はN-0°-E。北側妻柱列の東から2番目の柱は攪乱のために確認できなかったものと考えられる。それぞれの柱間の芯々距離は、P9-P10間:2.42m、P10-P11間:2.19m、P11-P12間:2.04m、P12-P13間:2.22m、P13-P8間:1.73mである。SB01と同じ一間7.5尺=2.22m、桁行30尺=8.88mの規模と考えてよいだろう。やはり、柱痕跡や柱のあたりは確認されなかった。また、覆土にはSB01で指摘した版築状の埋め土は確認できていない。

遺物は、P9から土師器38.6g、須恵器548.7g、瓦132.5g、SB01に記したP4・10でも土師器・須恵器が検出された。SB01と同様、重複するSI01伴出遺物と同時期と見てもよいものであり、同住居跡由来のものが含まれる可能性がある。

第7表 SB01 柱穴計測表

柱穴番号	旧遺構名	規模		
		長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
P1	SK13	92	(28)	70
P2	SK12	84	80	42
P3	SK09	116	92	34
P4	SK29	160	104	63
P5	SK30	156	100	84
P6	SK24	(52)	80	63
P7	SK15	(36)	(72)	65
P8	SK17	124	96	66

第8表 SB02 柱穴計測表

柱穴番号	旧遺構名	規模		
		長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
P8		SB01-P8に同じ		
P9	SK11	112	88	63
P10	SK29	160	104	63
P11	SK30	156	100	84
P12	SK28	120	96	90
P13	SK14	(120)	(108)	72

SB01-P1 セクション

1. 10VR3/4 暗褐色 コーム粒子・ブロックφ1~7mm中量、にがい黄褐色土ブロックφ1~5mm少量、炭化物ブロックφ1~2mm微量、ややしまりあり、やや粘性あり。
2. 10VR3/4 暗褐色 コーム粒子・ブロックφ1~3mm少量、炭化物ブロックφ1~2mm微量、ややしまりあり、やや粘性あり。
3. 10VR2/3 暗褐色 コーム粒子・ブロックφ1~15mm中量、黒褐色土ブロックφ1~10mm少量、ややしまりあり、やや粘性あり。
4. 10VR2/3 暗褐色 コーム粒子・ブロックφ1~40mm極多量、しまり強い、やや粘性あり。
5. 10VR2/3 黒褐色 コーム粒子・ブロックφ1~10mm少量、ややしまりあり、やや粘性あり。
6. 10VR3/4 暗褐色 コーム粒子・ブロックφ1~3mm多量、黒褐色土ブロックφ1~5mm少量、ややしまりあり、やや粘性あり。

SB01-P3 セクション

1. 10VR3/4 暗褐色 コーム粒子・ブロックφ1~3mm少量、ややしまりあり、やや粘性あり。
2. 10VR3/4 暗褐色 コーム粒子・ブロックφ1~20mm極多量、ややしまりあり、やや粘性あり。

SB01-P6 セクション

1. 10VR3/4 暗褐色 コーム粒子・ブロックφ1~15mm多量、黒褐色土ブロックφ1~10mm中量、ややしまりあり、やや粘性あり。
2. 10VR2/3 黒褐色 コーム粒子・ブロックφ1~30mm多量、暗褐色土ブロックφ1~5mm少量、黄土粒子・ブロックφ1~2mm微量、炭化物ブロックφ1~2mm微量、ややしまりあり、やや粘性あり。
3. 10VR2/3 黒褐色 コーム粒子・ブロックφ1~20mm中量、ややしまりあり、やや粘性あり。
4. 10VR2/3 暗褐色 コーム粒子・ブロックφ1~10mm多量、暗褐色土ブロックφ1~10mm少量、ややしまりあり、やや粘性あり。
5. 10VR3/4 暗褐色 コーム粒子・ブロックφ1~25mm極多量、黒褐色土ブロックφ1~10mm少量、ややしまりあり、やや粘性あり。

SB01-P7・P10 セクション

1. 10VR3/4 暗褐色 コーム粒子・ブロックφ1~20mm多量、黒褐色土ブロックφ1~10mm極多量、ややしまりあり、やや粘性あり。
2. 10VR3/4 暗褐色 コーム粒子・ブロックφ1~50mm多量、黒褐色土ブロックφ1~10mm極多量、ややしまりあり、やや粘性あり。

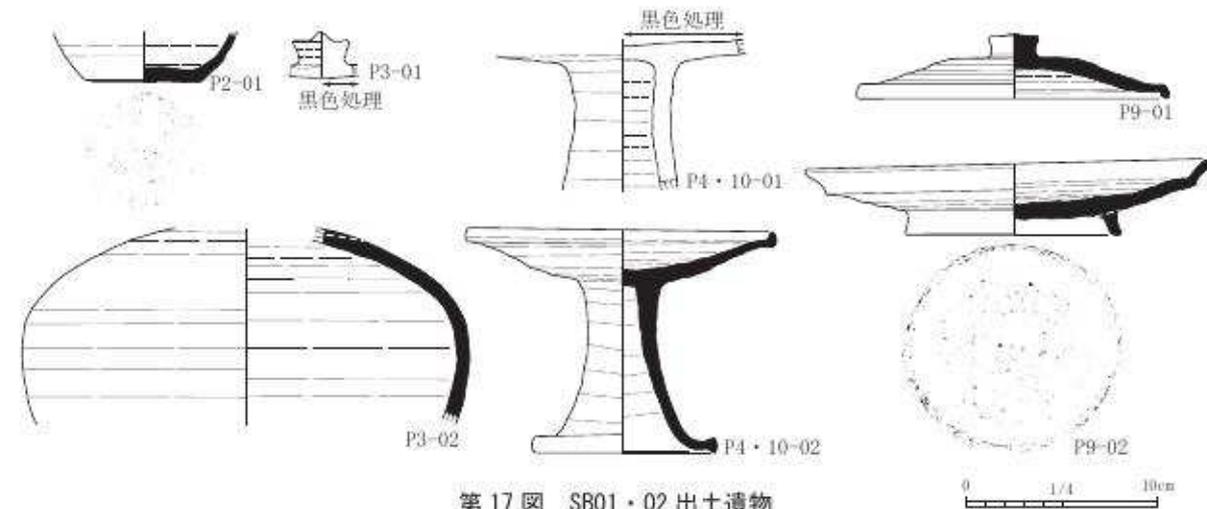
3. 10VR3/4 暗褐色 コーム粒子・ブロックφ1~30mm極多量、炭化物ブロックφ1~3mm極微量、黒褐色土ブロックφ1~10mm極微量、ややしまりあり、やや粘性あり。
4. 10VR3/4 暗褐色 コーム粒子・ブロックφ1~50mm極多量、ややしまりあり、やや粘性あり。
5. 10VR3/4 暗褐色 コーム粒子・ブロックφ1~15mm極多量、ややしまりあり、やや粘性あり。
6. 10VR3/4 暗褐色 コーム粒子・ブロックφ1~10mm極多量、しまりあり、やや粘性あり。
7. 10VR3/4 暗褐色 コーム粒子・ブロックφ1~50mm極多量、ややしまりあり、やや粘性あり。
8. 10VR3/4 暗褐色 コーム粒子・ブロックφ1~20mm多量、炭化物ブロックφ1~5mm極微量、ややしまりあり、やや粘性あり。
9. 10VR3/4 暗褐色 コーム粒子・ブロックφ1~40mm極多量、しまりあり、やや粘性あり。
10. 10VR2/3 黒褐色 コーム粒子・ブロックφ1~20mm多量、炭化物ブロックφ1~2mm極微量、ややしまりあり、やや粘性あり。

SB01-P2・P8 セクション

1. 10VR3/4 暗褐色 コーム粒子・ブロックφ1~10mm中量、黒褐色土ブロックφ1~8mm少量、ややしまりあり、やや粘性あり。
2. 10VR3/4 暗褐色 コーム粒子・ブロックφ1~25mm極多量、黒褐色土ブロックφ1~10mm中量、黄土粒子・ブロックφ1~2mm微量、ややしまりあり、やや粘性あり。
3. 10VR3/4 暗褐色 コーム粒子・ブロックφ1~20mm極多量、ややしまりあり、やや粘性あり。
4. 10VR3/4 暗褐色 コーム粒子・ブロックφ1~25mm極多量、黒褐色土ブロックφ1~10mm少量、ややしまりあり、やや粘性あり。

SB02-P9 セクション

1. 10VR3/4 暗褐色 コーム粒子・ブロックφ1~5mm少量、黒褐色土ブロックφ1~10mm中量、ややしまりあり、やや粘性あり。
2. 10VR3/4 暗褐色 コーム粒子・ブロックφ1~10mm多量、黒褐色土ブロックφ1~10mm中量、ややしまりあり、やや粘性あり。
3. 10VR3/4 暗褐色 コーム粒子・ブロックφ1~20mm極多量、暗褐色土ブロックφ1~10mm中量、ややしまりあり、やや粘性あり。
4. 10VR3/4 暗褐色 コーム粒子・ブロックφ1~10mm極多量、黒褐色土ブロックφ1~10mm少量、ややしまりあり、やや粘性あり。

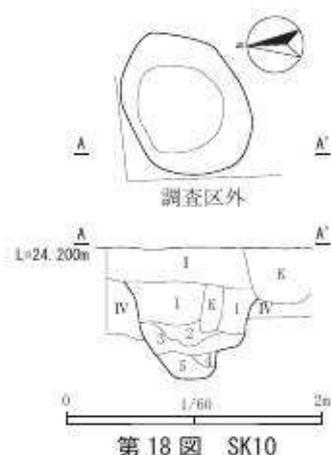


第17図 SB01・02 出土遺物

第9表 SB01・02 出土遺物観察表

遺物番号	状況	種類	添物	口径	高さ	経径	残存	形状の特徴	装飾の特徴	取上	焼域	色調	重量	備考
P2-01	破土	羽形器	茶	—	22.40	6.0	体部下端一断部	体部は丸みを帯び、底部はやや突出する。	コテロ製形、底部は凹輪へツクリ後、無調整。体部下端も無調整。	装飾多い、白色粒子少量	良好	内外面 10VR3/4 黒褐色	53.7	還元不具 新装束
P3-01	破土	土師器	茶	—	22.40	幅のみ 2.1	横片	縦立模様を見せる。	コテロ製形	白色粒子少量	良好	内面 7.5VR2/3 黒褐色 外面 10VR1/4 にがい黄褐色	22.1	内面黒色処理
P3-02	破土、TD	羽形器	長卵型	—	10.40	—	胴部欠損片	胴部の面は強く、最大径を上面に有する。	コテロ製形、胴部付け後は「三段構成」。	胴部の増出しやや多い、白色粒子少量	良好	内面 7.5VR2/3 黄褐色 外面 5VR1/4 灰	35.9	自然焼 新装束
P4・10-01	№.14	土師器	餅竹笠	—	35.00	—	口縁一断部欠損	胴部は直線的に開き、上端は僅かに内湾気味に大きく開く。	コテロ製形、上端内面はツクリ。	黒色粒子・白色針状物質やや多い、炭屑少量	良好	内面 10VR3/4 黒褐色 外面 10VR2/3 灰褐色	251.4	内面黒色処理 既装束
P4・10-02	№.19	羽形器	餅竹笠	16.00	41.4	9.50	1/3欠損	上端は大きく開き口縁は僅かに上げられる。胴部は直線的に開き胴で僅かに外反し、胴部には僅かに上げられ丸く曲下する。	コテロ製形、直内焼成有り。	長石・石英等小粒やや多い、白色針状物質微量	良好	内面 №.14 灰 外面 7.5VR1/4 灰	312.5	
P9-01	№.2	羽形器	茶	16.20	31.40	幅のみ 2.6	1/3	天井は内湾気味を呈し、幅内は縦立模様、口縁で僅かに外反し、胴部は丸く曲下する。底に付いた。	コテロ製形、天井の凹輪へツクリは1/3。	長石・石英等小粒～中粒多い	やや硬 還元不具	内外面 6VR1/4 灰	95.7	
P9-02	№.1	羽形器	高背付型	23.20	31.80	11.20	ほぼ完形	高背は「ハ」の字に付され体部は見地で緩やかに大きく開き、口縁は上段に明確な段を有し外反する。	コテロ製形、底部は凹輪へツクリ。	長石・石英等小粒～中粒・鉄分の増出し多い	良好	内外面 7.5VR2/3 灰褐色	453.0	

第3項 土坑

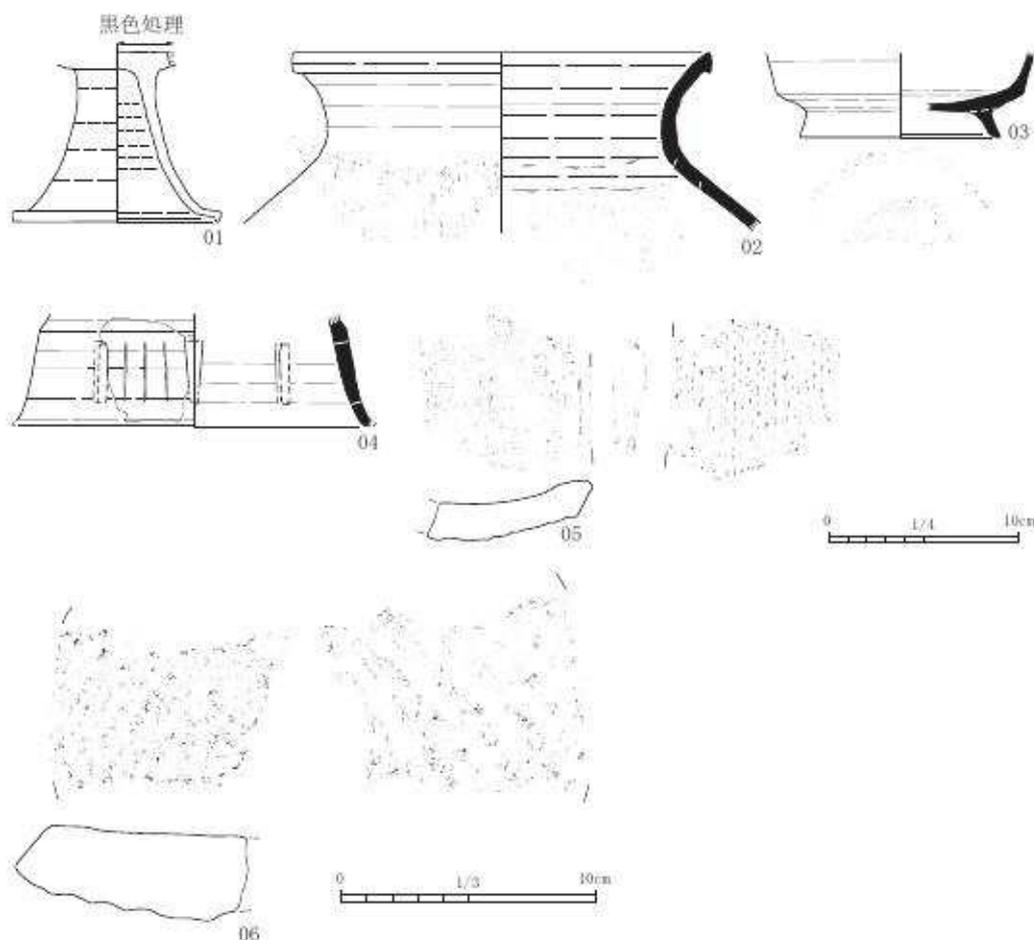


SK10 (第18・19図、第10表、遺構図版4、遺物図版2)

A1グリッドに位置する。平面形は不整形円形、規模は長軸124cm、短軸92cm。深さは確認面から68cmを測り、セクションでは第I層の直下から80cmが確認される。覆土は暗褐色を基調として5層に分層され、全層に粒径の小さいロームブロックを多く含む。最上層の第1層では焼土ブロック・炭化物ブロックが確認された。

- SK10 セクション
- 1 107K3/4暗褐色 ローム粒子・ブロックφ1~5mm多量、焼土ブロック3~5mm極微量、炭化物ブロックφ5~15mm微量、しまりあり、やや粘性あり。
 - 2 107K3/4暗褐色 ローム粒子・ブロックφ3~5mm多量、ややしまりあり、やや粘性あり。
 - 3 107K3/4暗褐色 ローム粒子・ブロックφ1~5mm多量、ややしまりあり、やや粘性あり。
 - 4 107K3/4暗褐色 ローム粒子・ブロックφ1~2mm多量、ややしまりあり、やや粘性あり。
 - 5 107K3/4暗褐色 ローム粒子・ブロックφ1~10mm多量、ややしまりあり、やや粘性あり。

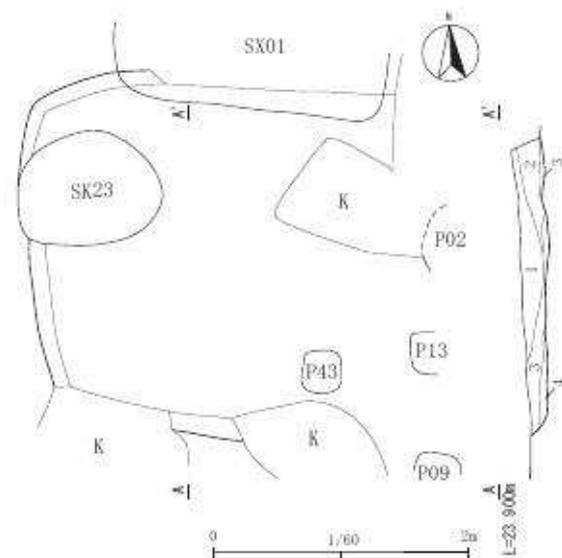
出土遺物には、土師器271.7g、須恵器595.6g、瓦437.3gがある。図示したものを始め、8世紀後半のものと考えてよいだろう。他に中世土師質土器、近世土師質土器・陶器・磁器・石製品、近・現代磁器、現代鉄製品、礫が出土したが（一部後述）、これらは覆土第1層中に含まれ、同層は近・現代の擾乱土と見られる。06の石臼も近世以降の所産と考えられる。



第19図 SK10出土遺物

第10表 SK10 出土遺物観察表

遺物番号	状況	種類	図種	口径	器高	底径	残存	器底の特徴	意匠の特徴	胎土	焼成	色調	重量	備考
01	覆土	土師器	餅付蓋	—	(8.8)	(10.8)	餅付部 1/2	餅付は直線的に筒を覆って僅かに外反し、筒部には傾み上げが施され斜めに垂下する。	コテロ整形。	灰白少量、白色粒子・スコーリア少量。	良好	内外面 10136/3 にぶい黄褐色 外面 10137/3 にぶい黄褐色	117.8	内面黒色処理
02	覆土	須恵器	甕	(22.0)	(9.3)	—	口縁 1/8	筒部の裏りは強いが、口縁で「C」の字に外反し開く。口部は折返しが施され、下縁はシャープに尖る。	コテロ整形。胴部外面は平行甲走、内面は黄褐色が観察される。	白色粒子やや多い。白色針状物質少量。	還元不具	内外面 7.538/2 灰黒	171.8	
03	覆土	須恵器	高台付伴	—	(4.2)	(10.4)	底面 1/3	高台は「F」の字に付され、体部は身で結線した後直線的に開く。	コテロ整形。底面は凹輪ヘラケズリ。	白色粒子やや多い。灰母微量。	良好	内外面 10107/1 灰白	88.1	黄褐色
04	覆土	須恵器	円筒甕	—	(8.0)	(18.2)	底面 1/10	杯を逆さにした形状、筒部に横を持ち、「八」の字に開く。残存範囲内縁は透かし(方形)。筒に線跡5本。	コテロ整形。	白色粒子やや多い。	良好	内外面 66/1 灰	23.4	
05	覆土	瓦	平瓦	縦 (8.0)	横 (8.0)	厚さ 1.9	右側切欠存在	外面鈍角、内面有目紋。両面凹輪・横面ケズリ。		白色粒子やや多い。	良好	内外面 516/1 灰	211.2	
06	覆土	古製品	浅口皿	縦 (8.0)	横 (8.8)	厚さ 1.2	1/16 程度	平直円形、無状。縁辺は内縁。上面(内面)に浅い四方の溝。下面(外面)に縁辺で深い四方の溝あり。				上面 10136/3 にぶい黄褐色 下面 7.016/1 にぶい黄褐色	62.1	焼熱、上面劣化、下面黒化



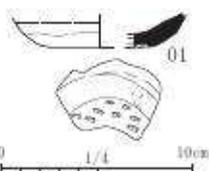
SX05 セクション

- 10136/1 黄褐色 コーム粒子・ブロック径 1~10mm 中量、暗褐色土ブロック径 1~20mm 少量、横土ブロック・粒子径 1~3mm 微量、灰化物ブロック径 1~2mm 微量、ややしまりあり、やや粘性あり。
- 10137/1 黄褐色 コーム粒子・ブロック径 1~20mm 中量、黄褐色土ブロック径 1~3mm 少量、灰化物ブロック径 1~2mm 微量、ややしまりあり、やや粘性あり。
- 10138/1 黄褐色 コーム粒子・ブロック径 1~4mm 中量、暗褐色土ブロック径 1~5mm 少量、しまりあり、やや粘性あり。

第20図 SX05

SX05 (第20・21図、第11表、遺構図版4、遺物図版2)

D1 グリッドに位置する。SK23 (時期不明)、SX01 などに切られ、東側は攪乱され、壁が確認できなかった。平面形は方形が想定され、規模は南北 2.88 m、東西 2.88 m 以上。深さは確認面から 24 cm を測る。全体として方形の竪穴状の遺構である。床面は凹凸があり、攪乱も著しいために明瞭ではない。周辺に分布する土坑・ピットは上位から掘り込まれているものであり、付帯施設は確認されなかった。覆土は暗褐色を基調とした3層に分層され、自然堆積を示す。



第21図 SX05 出土遺物

出土遺物には、土師器 348.9g、須恵器 234.4g があり、縄文土器・礫も検出されている。01 は須恵器で底面に刺突が施される。同様のものとしては、いわゆる播鉢(陶白)があり、底部周辺の剥離痕跡は鏝状部位が欠損したものであろうか。他には8世紀中葉の須恵器坏蓋、8・9世紀代の須恵器瓶類、10世紀代の土師器碗がある。

第11表 SX05 出土遺物観察表

遺物番号	状況	種類	図種	口径	器高	底径	残存	器底の特徴	意匠の特徴	胎土	焼成	色調	重量	備考
01	覆土	須恵器	陶白(播鉢)	—	(1.7)	(6.10)	体部下縁 1/4	杯の底筒状を示す。外面には剥離痕あり。筒状部分付く。	コテロ整形。底面の筒状はヘラ状工具の角で刺突。	灰白多い。白色粒子多い。	良好	内外面 7.535/1 陶白	24.5	

第2節 中・近世の遺構と遺物

第1項 方形竪穴遺構

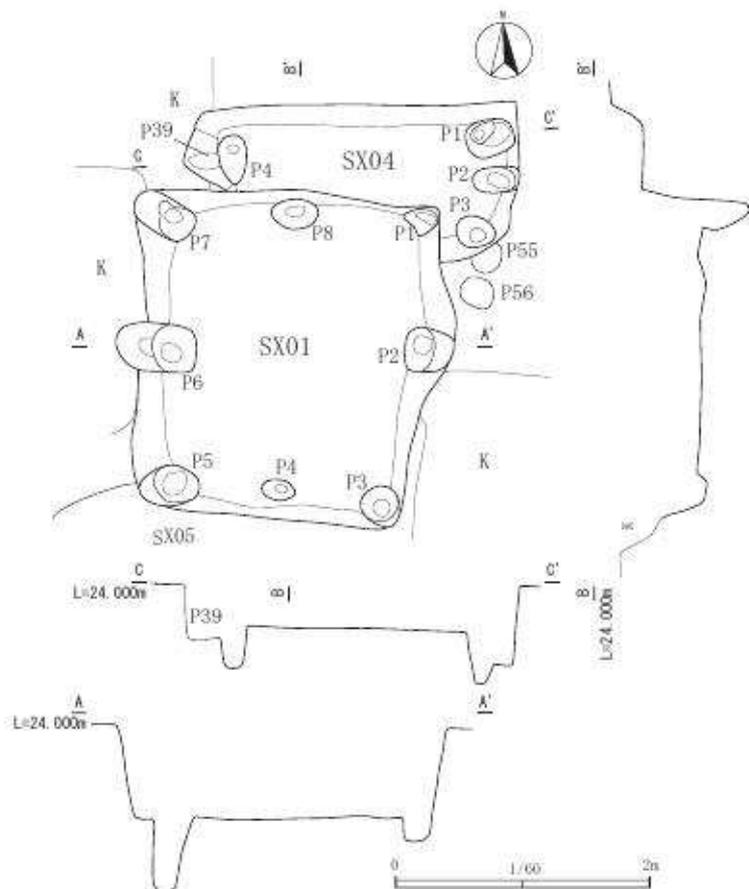
平面方形、長辺 2.00～2.64 m、短辺 1.26～2.64 mを測る、住居跡より平面規模の小さな竪穴で、隅部あるいは壁際に柱穴が配置される特徴を示す遺構。以下の4基が該当する。

SX01・04 (第22～24図、第12～15表、遺構図版4・5、遺物図版2・4)

C・D1 グリッドに位置する。新旧関係はSX04 (旧) → SX01 (新) である。

SX01 SX05を切る。平面規模は南北2.64 m、東西2.64 mを測り、やや南北に長い方形を呈する。主軸方向はN-8° -E。床までの深さは確認面から78 cmを測り、床はほぼ平坦で壁はやや外傾する。柱穴は四隅と四壁際中央に計8基が確認された。四隅と東西壁の柱穴 (P1～3・5～7) は壁面に食い込む形に掘り込まれている。各柱穴 (掘方) は平面円形と捉えたが、P2やP6などは方形を呈している。角柱であった可能性がある。火床などは確認されなかった。

覆土から縄文土器 24.2g、古代土師器 243.1g、同須恵器 348.5g、同瓦 38.2g、中世土師質土器 386.9g、近世磁器 5.3g、近・現代陶器 110.9g、現代磁器 20.2gが検出された。これらのうち、中世土師質土器が本遺構に伴うものと思われる。01 (遺物図版4の2) は土師質土器の鉢類で、16世紀代のものであろう。遺物図版4の28は肥前系の磁器仏飯器で19世紀前半の所産か。同46は現代の磁器皿の底部で、高台内に「寺内酒店 / 石岡市貝地 / 電七〇二」の上書きがある。国道6号線「貝地」交差点角にある同名の酒類小売店の販促品か。



第22図 SX01・04

第12表 SX01 柱穴計測表

柱穴番号	規模		
	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
P1	24	18	76
P2	36	24	6
P3	30	30	32
P4	24	18	6
P5	36	30	16
P6	36	30	61
P7	30	30	31
P8	36	24	39

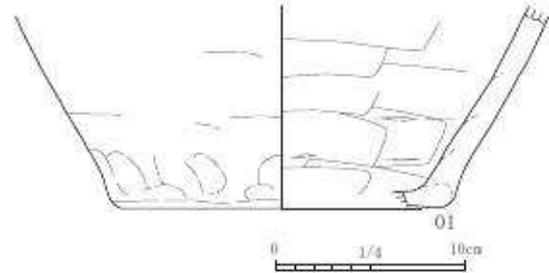
第13表 SX04 柱穴計測表

柱穴番号	規模		
	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
P1	36	30	41
P2	36	24	20
P3	30	24	16
P4	42	24	33

第14表 SX01 出土遺物観察表

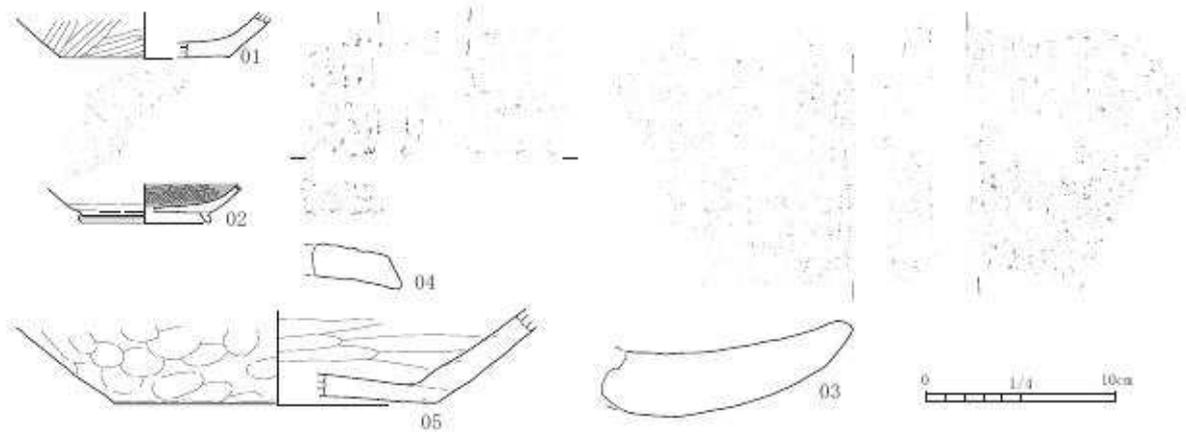
遺物番号	出記	種類	器種	口径	器高	底径	残存	器身の特徴	器底の特徴	胎土	焼成	色調	重量	備考
01	SX-1 表様	土師質土器	鉢類(鉢)	—	(10.4)	(17.0)	体部下半 ～底辺 1/4	底肉の体部	底面ケズリ。体部ナデ。	炭母・スコリア やや多い。白色 粘土多い	良好	内面：T.0105/4 に赤い縞 外面：T.0105/4 に赤い縞	186.9	遺物図版4-2 破砕劣化

SX04 P39に西側の壁上部を切られる。平面規模は南北1.26m、東西2.64m、幅狭の長方形を呈する。主軸方向はN-87°-W。床までの深さは確認面から41cmを測る。柱穴は南西以外の三隅と東壁中央の計4基が確認された。やはり、いずれも壁に接して配置されており、P2は壁面に食い込む。平面長楕円形を呈し、角柱であった可能性がある。床は概ね平坦で、火床などは確認されなかった。



第23図 SX01 出土遺物

覆土から弥生土器10.2g、古代土師器463.3g、同須恵器297.3g、同瓦735.7g、中世土師質土器412.9g、近世瓦5.5g、同石製品2540.0gが検出された。05(遺物図版4の1)は土師質土器鉢類の体部下半～底部で、本遺構に伴うものと思われる。16世紀代に位置づけられるか。その他の遺物は、本遺構に伴うものではないと思われる。02は9世紀代の内面黒色処理された土師器碗である。遺物図版4の18は挽白の上石で、近世のものであろうか。

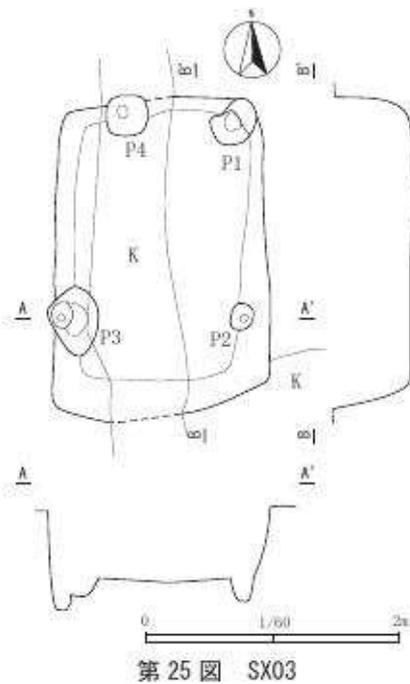


第24図 SX04 出土遺物

第15表 SX04 出土遺物観察表

遺物番号	出記	種類	器種	口径	器高	底径	残存	器身の特徴	器底の特徴	胎土	焼成	色調	重量	備考
01	表土	土師器	鉢	—	(2.4)	(8.0)	体部下端 ～底辺 1/2	底面は平坦。体部下端は直線的に閉く。	外面体部下端にはケズリが施されている。底面木炭灰。	炭石・石英・雲母 やや多い	良好	内面：19932/5 黒地 外面：19936/4 赤い黄縞	77.8	木食器 常態劣化
02	表土	土師器	碗	—	(2.1)	(6.8)	体部下端 ～底辺 1/2	底面は短く「ハ」の字に付され体部は見込で縁交かに内湾し閉く。	コタロ型。底面1400輪 ヘケケズリ。	白色針状物が多い。白色粘土・炭母 やや多い	良好	内面：19932/1 黒地 外面：T.0107/3 に赤い縞	35.4	内面黒色処理 常態劣化
03	表土	瓦	平瓦	縦 (13.7)	横 (12.4)	厚さ 3.5	右側の 残存	外面溝付き。内面有目肌。側面縁辺・側面ケズリ。	白色粘土少量・炭色粘土 やや多い。	良好	内外面：19937/2 に赤い縞	655.8		
04	表土	瓦	割瓦	縦 (6.7)	横 (4.6)	厚さ 1.6	下辺・右 側面残存	外面溝付き。内面有目肌。側面ケズリ。	白色粘土・炭色粘土 やや多い。雲母 少量	良好	内外面：19934/2 灰青地	79.2	破砕劣化。炭 化物付き	
05	SX-4	土師質土器	鉢類(鉢)	—	(4.9)	(17.0)	体部下半 ～底辺 2/3	大型の底肉。側面大きく開く。	底面縞状(赤)外周ケズリ。内面無ケズリ。	炭母やや多い。白色粘土 少量。スコリア 少量	良好	内面：T.0105/4 に赤い縞 外面：T.0105/6 縞	112.9	遺物図版4-1 破砕劣化・ 劣化

SX03 (第25・26図、第16・17表、遺構図版4、遺物図版2)



第25図 SX03

C1グリッドに位置する。長軸方向西側に水道管理設による攪乱を被る。平面規模は南北2.52m、東西1.68m、長方形を呈する。主軸方向はN-1°-E。床までの深さは確認面から41cmを測り、床は平坦で壁はやや外傾する。柱穴はいずれも壁際で4基確認され、いずれも隅柱と思われるが、隅で確認されたのは北東のP1のみであり、南側の柱穴(P2・3)は西南・東南の隅より北側に位置する。いずれも壁面に食い込む形で掘り込まれている。P1は平面方形を呈し、角柱であった可能性がある。火床などは確認されなかった。

覆土から縄文土器8.7g、弥生土器21.3g、古代土師器1371.2g、同須恵器550.9g、同瓦33.7g、灰釉陶器8.9g、鉄滓50.1g、石器180.7g、礫51.7gが検出された。これらの遺物はいずれも本遺構に伴うものではないと思われる。01・02は10世紀代の土師器碗・皿、03は胎土に雲母を多く含む須恵器返り蓋で、8世紀前葉に位置づけられる。04・05は灰釉陶器長頸瓶であるが、帰属時期は明確にし得ない。

第16表 SX03 柱穴計測表

柱穴番号	規模		
	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
P1	36	30	15
P2	24	18	19
P3	54	42	26
P4	42	36	18



第26図 SX03 出土遺物

第17表 SX03 出土遺物観察表

遺物番号	位置	種類	形態	口径	高さ	底径	保存	器形の特徴	器形の特徴	胎土	焼法	色調	重量	備考
01	覆土	土師器	碗	—	(2.3)	(7.9)	底面1/3	胎土は「F」の字に付くが体面は見込で緩やかに開く。	コシロ整形。器底の切跡は不明。口縁部は右方向。	灰石・石炭・雲母や多量、クコリア散見	良好	内外面 10B2/3 に赤い黄緑	39.3	
02	覆土	土師器	皿	(11.1)	2.1	6.7	口縁1/4一底縁	器面は平坦。体面は直線的に大きく開く。	コシロ整形。口縁部は右方向。	白色粒子・スコリア多い雲母微量	良好	内外面 7.50B/6 橙	106.5	
03	覆土	須恵器	返り蓋	(17.1)	(2.8)	—	1/3	天井は弓張状を呈す。隅部で水平となり返しを有す。	コシロ整形。天井の同軸ヘラケツは1/3。	雲母多い。白色粒子・スコリア微量	良好	内面 7.50B/1 黒黒 外面 10B5/3 に赤い黄緑	81.0	調査済
04	SX-3	灰釉陶器	長頸瓶	—	—	—	口縁部破片	口縁部上部に配筋。	コシロ整形。全面灰釉。	鉄・白色粒子含有	良好	内外面 2.537/1 灰白 内部 2.507/1 灰白	2.4	
05	SX-3	灰釉陶器	長頸瓶	—	—	—	頸部破片	大きく外傾。	コシロ整形。外面灰釉。	鉄・白色粒子含有	良好	内面 5B/2 灰オリーブ 外面 2.506/2 灰黄 内部 2.507/1 灰白	5.2	

SK16 (第27図、第18表、遺構図版5)

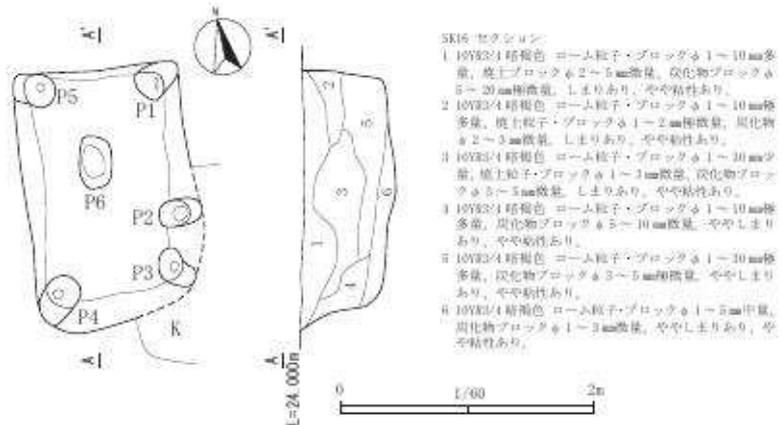
C1グリッドに位置する。平面規模は南北2.00m、東西1.33m、南北に長い長方形を呈する。主軸方向はN-3°-E。床までの深さは確認面から73cmを測り、床はほぼ平坦で壁は垂直に近く外傾する。柱穴は隅柱のほか、南東隅から北へ65cmの壁際の計5基が確認された。いずれも壁面に食い込む形で掘り込まれている。平面方形を呈するものは明確ではない。床面中央部からやや北寄りに不整形な浅い掘り込みがあるが、焼土・被熱痕跡等は見られない。覆土は暗褐色を基調とした6層に分層される。全層に焼土ブロック、炭化物ブロックを

み、第3・5層には粒径の大きいロームブロックを含む。土質と堆積状況から人為堆積と見られる。

遺物は検出されなかった。

第18表 SK16 柱穴計測表

柱穴番号	規模		
	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
P1	24	18	16
P2	24	18	16
P3	30	18	22
P4	30	24	20
P5	30	24	27
P6	42	24	13



第27図 SK16

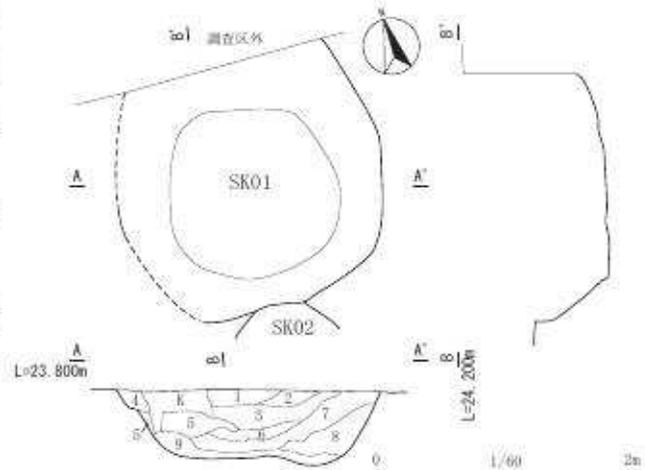
第2項 土坑

SK01 (第28図、第19表、遺構図版5、遺物図版2)

A1 グリッドに位置する。北側の一部は調査区外である。平面規模は長軸245cm、短軸216cmまでが確認され、不整形円形を呈する。深さは確認面から62cmを測り、底部はほぼ平坦である。覆土は暗褐色土が主体であり、9層に分層される。ロームブロックを多く含み、第3層には焼土が多量含まれ、第5層には炭化物ブロックが極多量含まれる。覆土の状態から本遺構は焼却・廃棄施設である可能性が指摘される。

覆土から弥生土器11.8g、古代土師器369.9g、同須恵器319.5g、同瓦189.1g、近世土師質土器116.3g、同瓦質土器2561.9g、同陶器665.2g、同磁器65.3g、同瓦333.2g、同土製品13.6g、同石製品107.6g、現代ガラス製品183.6g、同鉄製品55.8g、礫1358.3gが検出された。近世の遺物を主体としている。01 (遺物図版2) は瓦質土器で、内部の造作から箱底道具の盤と思われる。江戸遺跡で「仕切盤」と分類されるものと同種のものであろう。本体は三足付きの火鉢形であるが、内外・底面の全面に疎らなミガキが施され、暖房具ではないことが明らかである。内部構造の容器状の部位には水を入れて池に、紐状部位は橋に見立てたものと想像される。

遺物図版4の8(中世)、12・21・22・29~31・34(以上、近世)、36・38・43(同現代)も本遺構出土である。8(第30図の8)は1600年前後の瀬戸・美濃産の陶器播鉢で、底部外面回転ケズリ、底面回転系切り無調整である。12(第30図の12)は磁器小碗で、波佐見系の「くらわんか手」、18世紀代に位置づけられる。21は瀬戸産の陶器、灰釉練鉢で、緑釉が流し掛けられる。19世紀前半に位置づけられる。22も緑釉流し掛けの灰釉施釉陶器、19世紀



第28図 SK01

代の鉢類か。産地不明。29は肥前系の磁器小碗、18世紀の所産か。30は瀬戸・美濃産陶器の給釉片口、19世紀前半。31は土製の鳩笛。素焼き・無釉で、風切羽・雨覆羽を詳細に表現する。明治期に降るか。34は砥石である。36・38は用途不明のガラス瓶。36はコルク栓の水薬容器か。38の底面には「K7」の陽刻がある。43は茎部のない、丸尻の切り出しナイフである。

第19表 SK01 出土遺物観察表

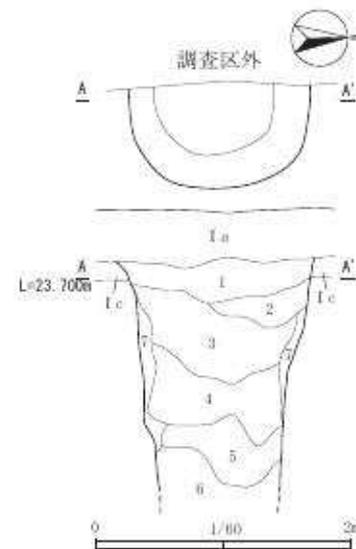
遺物番号	注記	種別	図種	口径	高さ	経径	残存	器形の特徴	胎土の特徴	胎土	地味	色調	重量	備考
01	覆土	灰質土器	壺 (除底 道具4)	36.8	11.5	29.1	1/4	火鉢形(口縁内側厚型)。 白粒料の三足付。口縁 第四方輪花。内部に空疎 状と楕状構造を呈する丸 形。	セラミック。三足はハ ンカ。内外面全面に粗 い5角水。内部の楕状 は子割のまゝ無調整。	白色粒子少量・黒 色粒子・ヌメリ ア散見	瓦粒	内外面 灰/黒	2500.0	口縁断面形状 19世紀後半

第3項 井戸跡

SX02 (第29図、遺構図版5)

A1グリッドに位置し、西側半分は調査区外である。平面円形の素掘り井戸。確認面の直径142cmを測る。事故防止のため、覆土の掘り下げはI(a)層の直下から184cmまでに止めた。壁面は直線的に外傾する。覆土は暗褐色土を基調として、7層に分層された。

遺物は検出されなかった。



第29図 SX02

SX02 セクション

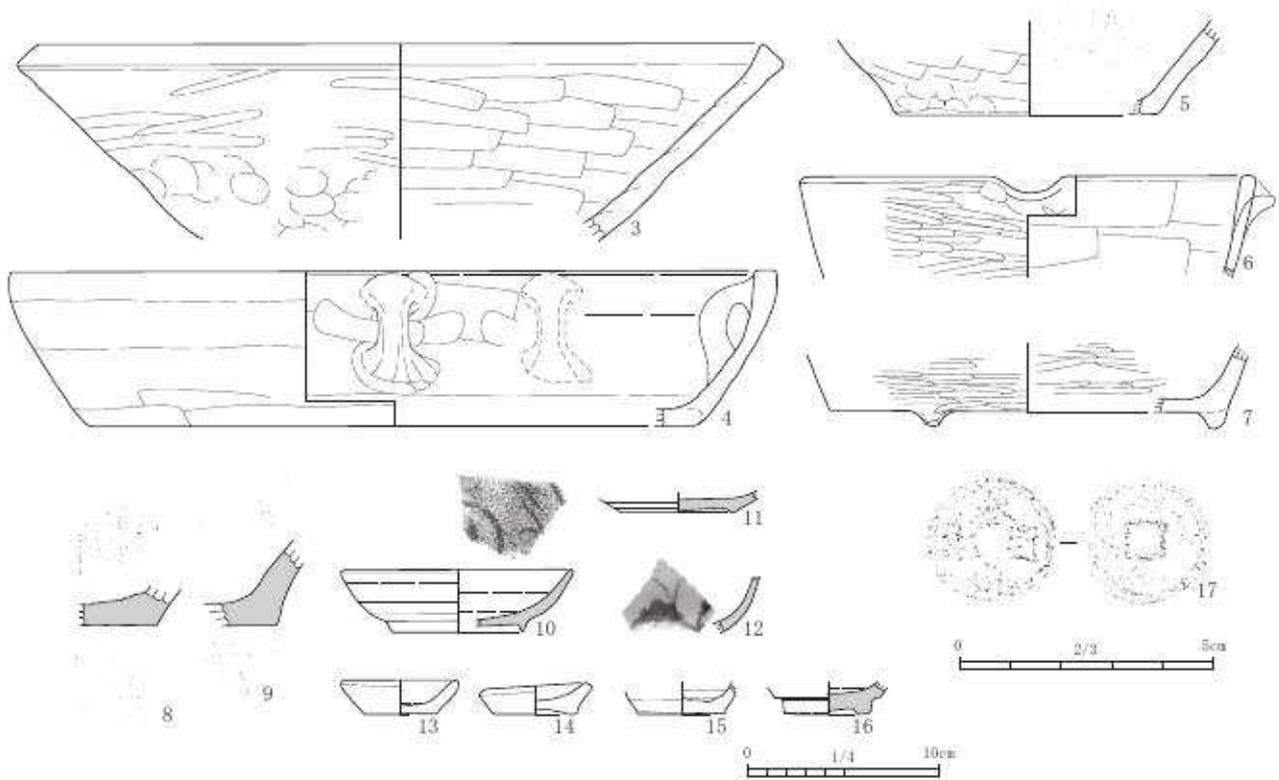
1. 10VRS/4 暗褐色 ローム粒子・ブロックφ1~3mm少量、灰化物ブロックφ1~2mm散見。しまりあり。やや粘性あり。
2. 10VRS/4 暗褐色 ローム粒子・ブロックφ1~5mm中量、黒褐色土ブロックφ1~2mm散見。黄土粒子・ブロックφ1~2mm散見。灰化物ブロックφ1~2mm散見。ややしまりあり。やや粘性あり。
3. 10VRS/4 暗褐色 ローム粒子・ブロックφ1~5mm少量、黒褐色土ブロックφ1~3mm散見。灰化物ブロックφ1~2mm散見。ややしまりあり。やや粘性あり。
4. 10VRS/4 暗褐色 ローム粒子・ブロックφ1~3mm少量。しまり強い。やや粘性あり。
5. 10VRS/4 暗褐色 ローム粒子・ブロックφ1~3mm少量。しまり強い。粘性強い。
6. 10VRS/3 暗褐色 ローム粒子・ブロックφ1~10mm少量。しまり弱い。粘性強い。
7. 10VRS/4 暗褐色 ローム粒子・ブロックφ1~15mm少量。暗褐色土ブロックφ1~3mm少量。ややしまりあり。やや粘性あり。

第3節 中世以降の遺物

今回の調査区は全面に渡り、近・現代の攪乱が著しく、古代の遺構にも新しい時期の遺物の出土が記録されている。したがって、中世以降の遺構については、本来の帰属遺物と攪乱由来のものとの峻別が難しく、前述の方形竪穴遺構を除いては時期の推定を困難にしている。そのため、土坑とピットについては、すべての出土遺物の種別・重量の一覧表を巻末に提示する。ここでは、古代の遺構出土のものも含めて、中世以降の遺物（前節既述のものは除く）について特徴的なものを概観しておく。

1 中・近世 (第30図、第20・21表、遺物図版4・上段)

3~5は土師質土器で、3は16世紀代の鉢類口縁~体部、4は浅めの内耳鍋で17世紀初頭か。5は16世紀代の播鉢である。6・7は17世紀前葉のものと思われる瓦質土器で、6は片口、7は三足付きの鉢類である。9はSK07出土の陶器播鉢で、8(SK01)と同じ属性を示す。10はSK10出土の陶器鉄絵皿、1600年前後の美濃産か。被熱・黒化が著しい。11は17世紀前半以降瀬戸・美濃産の陶器鉄絵皿。13~15は土師質土器小皿(かわらけ)で、いずれも17世紀初頭のものか。15の見込みには回転ナデが渦状に表れる。16は腰・底部露胎、17世紀前半の瀬戸・美濃産天目茶碗。見込みと壺付の使用痕はほとんど認められない。17は明銭の永楽通寶である。



第30図 中・近世遺物

第20表 中・近世遺物観察表(1)

遺物番号	状況	種類	図種	口径	器高	底径	残存	器形の特徴	装飾の特徴	胎土	焼成	色調	重量	備考
3	グランド B-1, グロリア C-1	土師質土器	鉢形(脚)	38.0	10.0	-	口縁部へ底面1/5	口縁部は内側にやや広気、体部は大きく開く。	押ナゲ。	量が多い、白色粒子や多い、黒色粒子・スコーリア少量	良好	内面 7.035/6 横 外面 1033/4 広口・黄褐色	275.2	16世紀代
4	SI-1	土師質土器	内耳鉢	39.0	8.0	32.0	口縁部へ底面1/6	やや内湾する深味の体部。口縁部は水平面、耳2個1対。	体部コシナゲ、外唇下縁コシナゲ。耳は細気。	量多・白色粒子やや多い、スコーリア少量	良好	内面 3185/9 粉赤褐色 外面 3185/4 赤い赤褐色	262.1	体部外面保付着 17世紀初期頃
5	グロリア D-1	土師質土器	摺鉢	-	7.9	11.5	体部下縁高1/4	体部外反。	体部コシナゲ。2本1単位、縁なら張り目。	白色粒子少量、量多・スコーリア少量	良好	内外面 3185/6 横	105.7	内面使用による磨減、16世紀代
6	SI-1	灰質土器	片口鉢	33.0	6.2	-	口縁部1/8	やや開く体部。	内面ナゲ、外面コシナゲ。片口部縁み出し。	量が多い、白色粒子少量	良好	内面 1033/1 横 外面 1033/7/1 横	65.2	17世紀前後頃
7	表探	灰質土器	鉢形	-	8.5	20.7	底面破片	内湾してやや開く体部。乳頭状の足部。	内面体・底面と外面体部コシナゲ。	量多やや多い、白色粒子少量	良好	内面 1033/1 横 外面 1033/1 横	62.3	17世紀前後頃
8	SK-1	陶器	摺鉢	-	2.0	-	底面破片	張り目1単位3本以上。体部下縁回転ナゲ。底面回転糸切り無調整。鉄粒散在。		鉄粒子散在含む	良好	内面 2.038/3 横 外面 7.034/6 横 内径 2.038/3 横	45.4	内面使用による磨減顯著。瀬戸・美濃産 16世紀末葉～17世紀初期
9	SK-7	陶器	摺鉢	-	3.4	-	底面破片	張り目1単位13本以上。体部外湾ナゲ。底面不明目鼻。無調整。鉄粒散在。		鉄粒子散在含む	良好	内面 2.038/3 横 外面 2.032/4 横 内径 1.031/3 広口・黄褐色	32.7	瀬戸・美濃産 16世紀末葉～17世紀初期
10	SK-10	陶器	鉄粒皿	112.0	3.2	16.9	口縁部へ底面1/4	やや浅めの体部。玉縁状の口縁縁部。	張り出し高台。内面鉄粒「網線+葉文+唐草文」。長石細散在。	磨製	良好	内外面 2.536/1 横 内径 2.037/3 横	25.7	高台内トーン。網線、葉形散在。美濃産か 16世紀末葉～17世紀初期

第21表 中・近世遺物観察表(2)

遺物番号	出所	種類	素材	口径	高さ	底径	現存	器形の特徴	胎土の特徴	胎土	地域	色釉	重量	備考
11	SI-1	陶器	鉄釉煎	—	(3.1)	06.00	底面1/3	浅めの鉢型。	高台削り出し浅い。内面鉄釉煎。長石釉施釉。	長石微量含む。	長野	内外面 2.538/1.8(白) 内面 2.5387/3 浅黄	27.0	瀬戸・美濃産 17世紀前半
12	SK-1	磁器	小皿	—	(3.4)	—	体部下半 破片	まるい鉢型。下縁平。外面白磁施釉(草葉文)。	胎土	長野	内外面 82/白	13.4	高松見・半戸系 「くらわんか子」 17世紀末葉～ 18世紀	
13	SI-4	土師質土器	かわらけ	6.9	4.8	3.8	ほぼ完形	コロボ型。底面切欠あり。	スコリアやや多い。白色粒子多い。黒田少量。	長野	内外面 7.5385/4 に白・黒	41.9	17世紀初期頃	
14	グロッド ドール	土師質土器	かわらけ	5.8	4.5	4.3	ほぼ完形	コロボ型。底面切欠あり。	白色粒子多い。黒田や多い。スコリア少量。	長野	内外面 7.5386/6(緑)	32.1	17世紀初期頃	
15	SI-1	土師質土器	かわらけ	—	(4.6)	4.4	底面1/4	コロボ型。底面切欠あり。見込み有切欠アタリ。底面有釉。	白色粒子・黒色粒子やや多い。黒田・スコリア少量。	長野	内外面 7.5387/6(緑)	35.3	17世紀初期頃	
16	SI-1	陶器	天目茶碗	—	(4.7)	4.5	底面1/4	コロボ型。高台削り出し浅い。唇付ナブ。内面鉄釉。外面鉄釉。	鉄・長石微量。	長野	内面 7.5382/1 黒 外面 10/37/5 に白・黄緑 内面 10/37/3 に白・黄緑	37.1	瀬戸・美濃産 17世紀前半	
17	SI-1 No. 11	磁器	水筒通寶	径 25.2mm	高 5.9mm								5.9	明治1887年

2 近世(遺物図版4・中段)

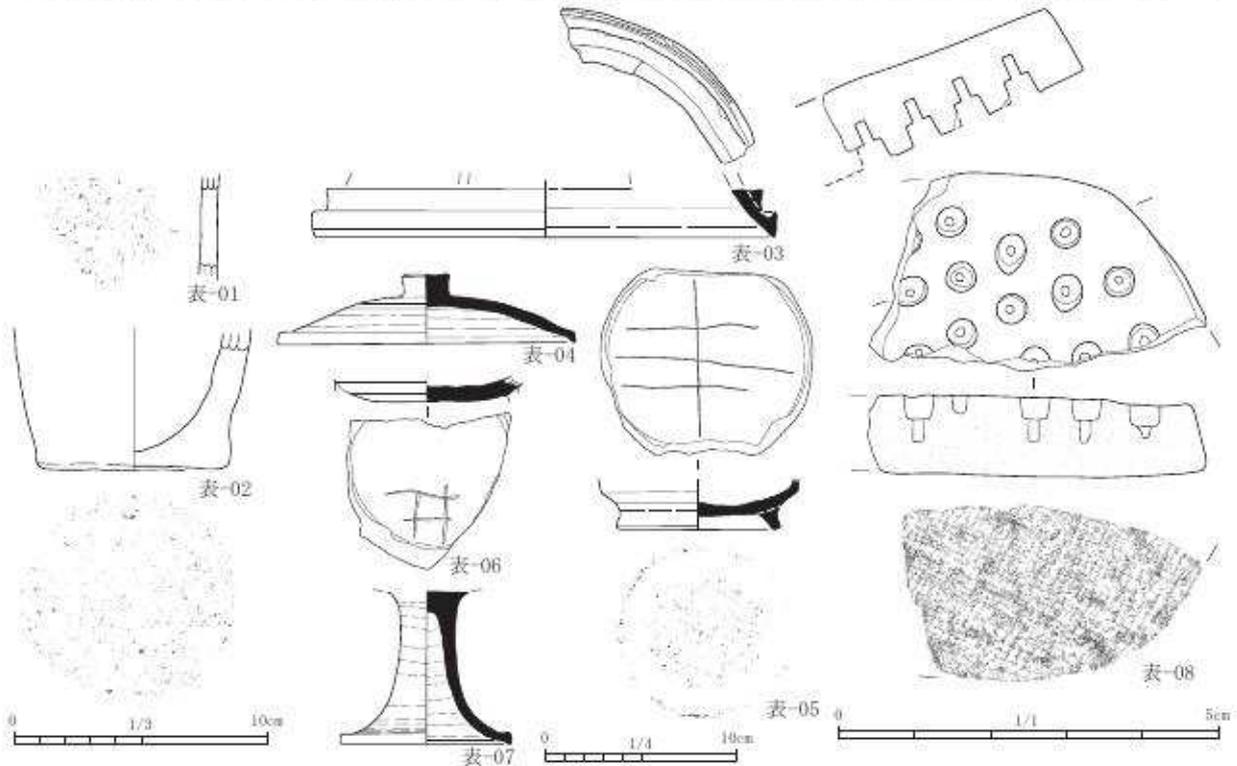
19はSK10出土の磁器徳利。口縁部を欠失、高台は削り出し。肥前系、17世紀中葉のもの。20はSD01出土の陶器半胴で、瀬戸産、19世紀代か。32と33は寛永通寶で、前者はSD01出土。23は瀬戸産の陶器、鉄釉有耳壺で18世紀代か。24は陶器鉢類で、外面上部に櫛描き横線文、同下部に波状文を施し、内外面鉄釉のうち外面上部に緑釉を施釉する。相馬産の瓶掛の類であろうか。25は陶器丸碗で、高台露胎、内外面胎釉に口縁部に灰釉(ウノブ釉)が漬け掛けされる。胎土は妬器質で、口縁部から底部・高台に至るまで薄手に作られている。19世紀代の相馬産であろうか。26は19世紀初頭の瀬戸産播鉢。27は土瓶蓋。外面白泥・透明釉で貫入が著しい。産地・時期不明。

3 現代(遺物図版4・下段)

35はガラス製のお弾き。37は武田薬品工業(株)製の「アリナミンV」50ml瓶、1987年以降の製造である。39は白色不透明ガラス瓶。側面に「IDEAL」の陽刻がある。40と41は牛乳瓶である。40は筑波乳業(株)(本社:茨城県石岡市)製(丸瓶、紙栓)で、側面に「筑波山デザインのマーク+T.K.B/筑波牛乳/ビタミン入」「姉妹品 純良バター」の赤文字印刷、「○に正/180cc」の陽刻、底面に「8-C」の陽刻が確認でき、同社の瓶入り牛乳生産中止の1970年(我孫子市2006)以前の製造である。41は明治乳業(株)製のゴールド明治牛乳(角瓶、紙栓)の瓶で、側面に「乳の社章/明治牛乳」「Meiji MILK GOLD」印刷、底面に「4G 180cc □」の陽刻がある。1957～1968年に生産されていたものである。44はSK10出土の鉄製切り出しナイフで、SK01出土のものと同種のもの。45は鉄製の蓋状品。用途・時期不明。47は磁器の醤油入れで、横浜名物「崎陽軒のシウマイ」の折箱添付品、初代「ひょうちゃん」(1955～1988年)。栓(コルクまたはゴム製)は失われている。48はいわゆる「統制陶器」の磁器小皿で、高台内に生産者表示記号「岐232」の陰刻がある。岐阜県東濃地区産。平面十角形。見込み独楽文様に呉須と鉄釉の瓢箪文染付。1931～1955年の製造である。49は磁器五寸皿で、平面八角形。内面型押し網目文、草葉文+呉須、全面灰色釉。産地・時期は不明。

第4節 表面採集遺物

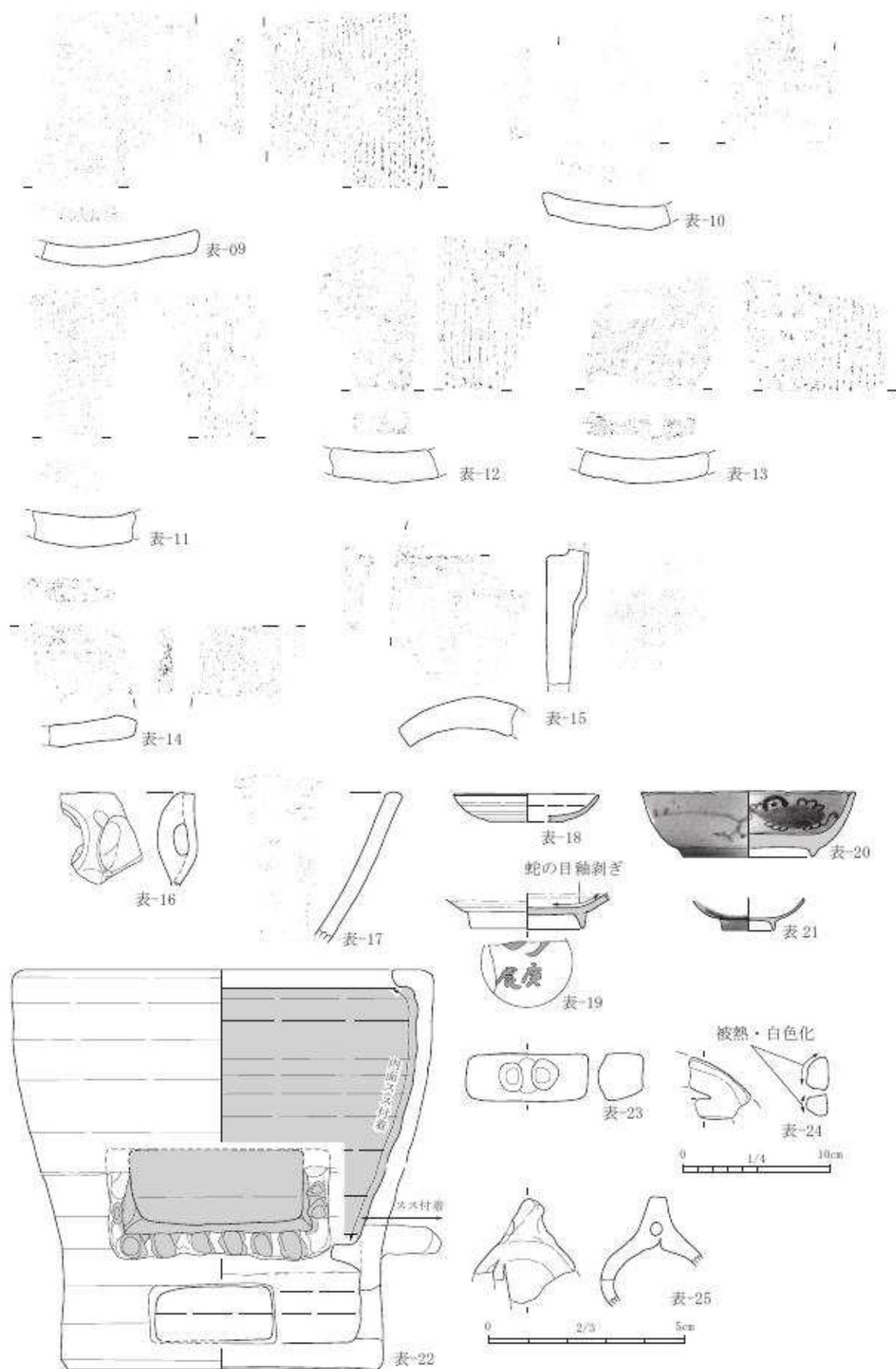
表面採集したものと、近・現代の攪乱土から取り上げられた遺物の総量は、縄文土器 458.1g、古代土師器 1534.4g、同須恵器 2189.4g、同灰釉陶器 7.9g、同瓦 2015.0g、同土製品 12.7g、中世土師質土器 274.9g、近世土師質土器 2222.1g、同瓦質土器 130.4g、同陶器 347.3g、同磁器 202.7g、同瓦 1448.5g、同土製品 4.5g、近代陶器 4.4g、近・現代磁器 320.4g、現代磁器 275.2g、同ガラス製品 795.3g、同鉄製品 170.1g、礫 398.4g（うち石英 26.5g）である。ここに示す遺物は、それらのうち主要なものを図示した。詳細は観察表を参照されたい。



第31図 表面採集遺物(1)

第22表 表面採集遺物観察表(1)

遺物番号	出所	種類	原産	口径	器高	底径	残存	器形の特徴	装飾の特徴	胎土	焼成	色調	重量	備考
01	表採	縄文土器	花押	—	(4.0)	—	銅板破片	外面は縄文、内面は方弁。	装母・白色粒子少量	良好	内面 19337/4 に赤い黄斑 外面 19336/4 に赤い黄斑	22.0	母資料B式	
02	表採	縄文土器	筒体	—	(5.9)	(7.8)	銅板下部一断片	文様確認できない。底面外縁に径10mmほどの粘土粒貼付あり。四方向。2個存在、1個割断破片あり。	白色粒子やや多い。黒色粒子少量。装母微量	良好	内外面 19337/4 に赤い黄斑	237.0	解之内式	
03	表採	須恵器	圓筒状陶器	—	(2.8)	(26.0)	基部1/4強	基部は折返し口縁を逆さにした状態。透かし孔あり。	コゲロ装飾。基部三角帯の装飾破片。	良好	内外面 5184/2 灰釉	75.8		
04	表採	須恵器	蓋	15.6	3.5	筒径2.5	完整	天井は円筒状を呈し筒みは縦型床状。基部はやや高さがあり内傾し垂下する。やや小形。透しを押し付けない。	コゲロ装飾。天井の0.5mmヘラケズリは1ヶ所	還元不 良	内面 19335/2 灰黄褐 外面 19335/3 に赤い黄斑	230.1	垂れ筒を擬あり	
05	表採	須恵器	高台付伴	—	(2.8)	8.6	体部下端一断片	表面は「()」の字に付さる体部は見込で割断した後やや外反気味に開く。	コゲロ装飾。基部一体部下端は10mmヘラケズリ。	良好	内外面 2.5386/1 灰黄	145.7	内面底部焼成後「()」字状へらケズリ跡を新出定	
06	表採	須恵器	高台付伴	—	(1.4)	—	断面2/3	断面はやや丸味を有する。	コゲロ装飾。断面20mmヘラケズリ。	良好	内外面 2.5385/2 灰黄	85.0	外面底部「井」字状へらケズリ(焼成前)	
07	表採	須恵器	脚付蓋	—	(8.5)	19.60	脚付部	脚付は直線的に筒状で筒みは縦型に外反し基部には筒み上げが施され短く垂下する。	コゲロ装飾	良好	内外面 2.5385/2 灰黄	121.9		



第32図 表面採集遺物(2)

第6章 まとめ

第1節 調査の成果と常陸国府との関連

1 調査の成果

今回の調査においては、縄文時代から近・現代に至る遺物が検出されたが、遺構については近・現代の攪乱が著しく、帰属時期を明確にし得ないものが多い。中でも、古代、奈良・平安時代の住居跡5軒と掘立柱建物跡2棟が確認され、出土遺物も該期のものが主体をなしていることは、前章で報告したとおりである。これら、古代の遺構については次項以降にまとめ、本調査区が位置する常陸国府跡との関連を考察する。

古墳時代以前 縄文時代については土器が1197.1g検出されている。早～後期のものが確認できた。弥生時代は後期土器のみで、171.3gになる。古墳時代も遺構外で試掘調査T-2出土の二重口縁壺（同図T02-01）の他に、SI01の掘方で検出されたハケ調整壺底部の2点の前期土器が確認できたに過ぎない。ちなみに、本遺跡に含まれる常陸国衙跡では古墳時代前期の住居跡が少なくとも10軒は確認されている（箕輪2009）。

中世以後 中世では16世紀代の土師質土器が1510.6g確認され、4基確認された方形堅穴遺構は当該期のものと考えられる。主軸を南北あるいは東西に向け、互いに近接している。平面長方形を呈し、長辺2.00～2.64m、短辺1.26～2.64mを測る。いずれも隅部あるいは壁際に柱穴が配置される特徴を示し、さらに、各柱穴は堅穴の壁面に喰い込むように掘り込まれる点が注意される。また、平面方形の柱掘方が認められるものもあり、本遺構の特徴の1つに加えることができよう。宇留野主税氏が分析した茨城県内の事例（宇留野2003）には同様の形態を示すものはなく、管見では、千葉県佐倉市の江原台遺跡（1号堅穴遺構：16世紀前半、高田編1980）や埼玉県志木市の城山遺跡（553号土坑：15世紀末葉～16世紀代、尾形・鈴木2008）に近似する遺構を見ることができた。遺構の性格については明らかにし得ない。近世では16世紀末葉から17世紀中葉に掛けての土師質土器かわらけや鍋、瀬戸・美濃産陶器、肥前系磁器が目につくものの、18世紀から幕末に至る遺物もあり、明確なピークを示さない。いずれにせよ、今回の調査区は中世・府中城の三の丸の東側腰郭に比定され、近世（後期）・府中藩陣屋の南側に当たるようであるので（石岡市1979・箕輪2001）、確認された遺構・遺物はこれらとの関連を考慮しなければならないだろう。

2 古代の建物遺構

住居跡 5軒確認したが、①8世紀前葉：SI02、②8世紀後葉：SI01、③9世紀末葉～10世紀代：SI03・SI04、の3期に分けられる。SI05は8世紀代で、①・②のいずれかと同期のものと思われる。これら住居跡と掘立柱建物跡（後述）との前後関係を見ると、①②は掘立柱建物以前、③は同以後の建物ということになる。ところで、5軒のうち、SI01は①平面規模3.81×3.75mと小型で支柱穴を持たない、②カマドがない、③床に火床面がある、④土師器約4.6kg・須恵器約8.6kgと多量である、ことが特筆される。特に、②・③から一般的な住居ではない可能性をはらんでいる。そして、次節で検討するように、8世紀代と推定される「ガラス小玉鑄型」の存在は、当該期におけるガラス小玉の製作工房の存在を予見させるものである。

掘立柱建物跡 同一場所における同規模・同構造の建て替えとして2棟を把握した。梁行き2間を基本形とすれば（山中編2003）、SB01・02には廂は確認できないので、「桁行4間、梁行2間」の平面構造であったと推定される。一間7.5尺、桁行30尺、梁行15尺の平面規模となる。国府の施設にはほぼ同一規模の建物（第

Ⅲ期の西第一脇殿(SB1401、箕輪 2009) を見ることができる。第Ⅲ期は9世紀前半～後半で、SB01・02の存在時期(9世紀後半前後)と一致する。主軸(桁行)方向はSB01が2°東に偏するが、SB02は座標軸に一致するものと見られ、国庁の造営方位・真北方位と同調する。SB01・02は国衙関連施設、「曹司」の建物の一つ、と考えてよいだろう。

3 古代の遺構の変遷

本調査区における古代の遺構の変遷を概観すると、8世紀代に住居群が展開し、これにガラス小玉製作工房が関連すると思われる。その後、これらの住居跡の上に9世紀後半前後、真北の造営方位を採る曹司施設が建設される。9世紀末葉～10世紀代には掘立柱建物の南側に住居が建てられる。北側のSI04は近接しているので、同住居が建てられる10世紀代には掘立柱建物(SB02)は存在していなかったであろう。

本調査区は国庁院東辺から東にわずか120mしか離れていない。こうした遺構の変遷は、国庁施設の変遷と密接な関係があると考えられる。平成10～18年度の調査で明らかにされた国庁の変遷(箕輪 2009)に照らして、周辺地点の調査成果も合わせて見ていこう。8世紀代の居住域あるいは工房は、国庁成立期(第Ⅰ・Ⅱ期)に当たる。本調査区で確認された住居跡には、一般の住居も含まれるものと思われ、すべてに「工房」的な性格を付与する訳にはいかない。その居住者が官人であるのか係丁であるのかは、知る由もないが、国庁北側の代官屋敷遺跡においても8世紀後半の住居跡(SI-1)が存在している。

9世紀後半前後の曹司施設と見られる掘立柱建物の造営は、国庁の荘厳化の時期(第Ⅲ期)に当たり、国衙機構の拡充に伴う曹司諸施設の新・増設の一端を示すものと解釈できる。代官屋敷遺跡においても9世紀半ばまでに桁行5間、梁行1間、造営方位東西の掘立柱建物(SB-1)が存在している。また、本調査区西側20mの第5地点においても掘立柱建物の柱穴(SP-1)が確認されており、本調査区建物と関連する建物の可能性が高い。

9世紀末葉～10世紀代には掘立柱建物は姿を消し、再び住居群が展開する。代官屋敷遺跡でも10世紀半ばの住居跡(SI-4)が認められる。国庁院の消滅・機能停止と終末期国庁の出現の時期(第Ⅳ期)であり、939年の平将門の襲撃事件も影響しているに違いない。そして、国衙施設の衰退と解体へと進んでいくことになる。

以上、狭く、乏しい知見に立脚した解釈であるので、今後、周辺の調査が進展していく中で、大幅な訂正を受けることも予想される。ただ、常陸国衙・国府跡、ひいては諸国官衙遺跡における政庁周辺空間の解明への踏み台となることができれば、今回の調査の目的は達せられたと言えるだろう。

第2節 ガラス小玉鑄型の検討

今回の調査において、土製のガラス小玉鑄型、いわゆる「多孔土盤」(白井 2005)・「たご焼き型鑄型」(肥塚 2002、田中 2007) が検出された。茨城県内では初出、関東では 8 遺跡目となる、希少な遺物である。しかし、前章で報告したとおり、攪乱覆土からの出土であり、残念ながら使用状況や帰属時期を明確にすることができない。そのため、本稿において全国の出土事例と研究事例を確認し、型式学的なアプローチ、属性の整理・分析から本資料の位置づけを試みておく。なお、この種の遺物についての研究史については、紙幅の都合上、触れることができない。先学の業績(田中 2007・中山 2007・京嶋 2009 など)を参照されたい。また、鑄型部分等の名称については、京嶋 覚氏の用例(京嶋 2009)に準拠する。したがって、本稿では基本的にガラス小玉の鑄造方法・過程の詳細には言及しない。

1 本調査出土のガラス小玉鑄型について

出土状況と鑄型の認識 今回の調査で出土したガラス小玉鑄型(以下、「鑄型」と略す。)は破片 1 点のみである。攪乱土からの検出で、詳細な出土位置(グリッド)は記録していない。鑄型としての認識も、遺物洗浄・注記作業後である。一方、出土遺物の悉皆的な確認作業によって、ガラス素材溶解用の坩堝などの製作関連道具類は見出されなかったものの、ガラスの原材料として挙げられる、「石英」破片を 3 点見出すことができた。これらの石英片は SI01:最大長 31.7mm、18.3g と C-1 グリッド:同 51.1mm、42.4g、攪乱:同 47.9mm、26.5g(すべて一括取り上げ)出土で、製作痕跡との直接的な関係を有しておらず、ガラス素材の原料とは断言できないものの、関連資料として示しておく。

鑄型の特徴 次項で示すとおり、既出例から判断して、本例もオープン・モールド open mold(開放型・単体型)と判断できる。詳細は観察表(第 23 表)に委ねるが、特徴を列挙しておく。まず、形態的特徴は、①平面形が「小判形」と想定される。②型穴の配置は「直線配列」。③軸孔は「盲孔」で先端は平ら。④型穴の直径(上端)は 4mm、である。次に、鑄型自体の製法について、⑤胎土は緻密、雲母微量、白色粒子をやや多く含み、在地産と目される古式土師器や古代土師器と異なるところはない。⑥裏面に平織の「布目圧痕」がある。⑦焼成品、である。そして、資料状態は⑧鑄型として想定される使用痕跡(被熱・損耗など)は一切認められない。また、鑄型の素形となる粘土板の製法として、盲孔軸孔のものに「2 枚の粘土板の貼り合わせを想定する」京嶋氏の指摘は確認できず、否定的である(注 1)。

以上の特徴のうち、③盲孔軸孔と⑥布目圧痕の属性の組み合わせは、これまでの類例では平城京跡出土例にしか確認できない、際立った存在であった。そこで、次に、鑄型の類例を集成し、それらの属性分析を行う。

2 日本出土のガラス小玉鑄型の検討(第 33 図、第 24 表)

管見の限りであるが、本例を含めて第 24 表に示す 32 遺跡(No. 13・16 は時期を異にするが、同一遺跡)を確認することができた。ただし、今回いずれの資料も実見しておらず、また、調査報告書もすべては確認していないことを断っておく。法量を「未計測」としたものは、筆者がデータ取得をした文献(文末の典拠一覧●印)に計測値が示されていないものである。

分布と時期 現状では、朝鮮半島からの搬入品と考えられる 4 世紀前葉の北部九州・西新町遺跡例のほか、4 世紀代の南関東地域、5 世紀後半～7 世紀後葉の難波・河内地域と大和盆地東南部、7 世紀前葉～8 世紀初

頭の飛鳥・藤原地域、8世紀初頭以降（8世紀代）の平城京城、8世紀代の信州千曲川上流域・関東・駿河地域が把握できる。特に、難波・河内地域の（断続的ながらも）息の長さと、畿内地域における5世紀から8世紀への分布傾向は示唆的で、ガラス生産技術の中核と政権中核との関連が推察される。

製作法 基本形は、平板な土製の板に、円筒形の型穴と軸孔を無数に開けた状態である。成形法の推定については白井洋輔氏の解説に詳しい（白井2005）。実見に基づく悉皆的な資料調査ができていないので、注意された点を挙げておく。裏面の成形痕跡は、使用による損耗で確認できなかつたり、報文に記述がなく、十分に把握できなかった。しかし、本調査例の特徴の一つである「布目圧痕」（平城京左京七条一坊十五・十六坪の3点と唐招提寺境内8次〔平城京右京五条二坊〕例）と「格子タタキ痕」（平城京左京七条一坊十五・十六坪の1点と平城京左京一条三坊十五・十六坪例）が確認できた。平城京左京七条一坊十五・十六坪における両痕跡を示す資料の共存や、古代瓦の成形法を参考にすれば、布目圧痕と格子タタキ痕は表裏の関係であったのではないだろうか。なお、西新町例は唯一、裏面ケズリ成形が確認された事例である。

また、4世紀代の南関東の事例は断面形に凹凸が見られるものがあり、5世紀以降の諸例と比べ、平面形を含めて形状が一定しない。土器製作で言えば、「手づくね」的である。また、損耗の程度も5世紀以降のものと異なって、とろけるように風化し、丸味を帯びているようである。奥田 尚・酒巻忠史両氏が説くように、非焼成の「生型」であった可能性がある。これに対して、5世紀以降のものは「焼き型」と考えてよいだろう。

形態 平面形は方形基調と円形基調のものに大別できる。すべての資料が破片で、全形を窺うことはできないが、前者についてはケズリ成形による西新町例の「胴張り方形」と、川戸下遺跡例から想定される「やや不整形の（隅丸カ）方形」がある。後者は平城京左京一条三坊十五・十六坪例などから、ケズリ成形による外周・縁辺部の輪郭には弧状部分と直線部分が共存することが判り、全体として「小判形」が想定できる。ただ、船橋遺跡例の型穴配置を見ると、当例などは「楕円形」であった可能性もある。

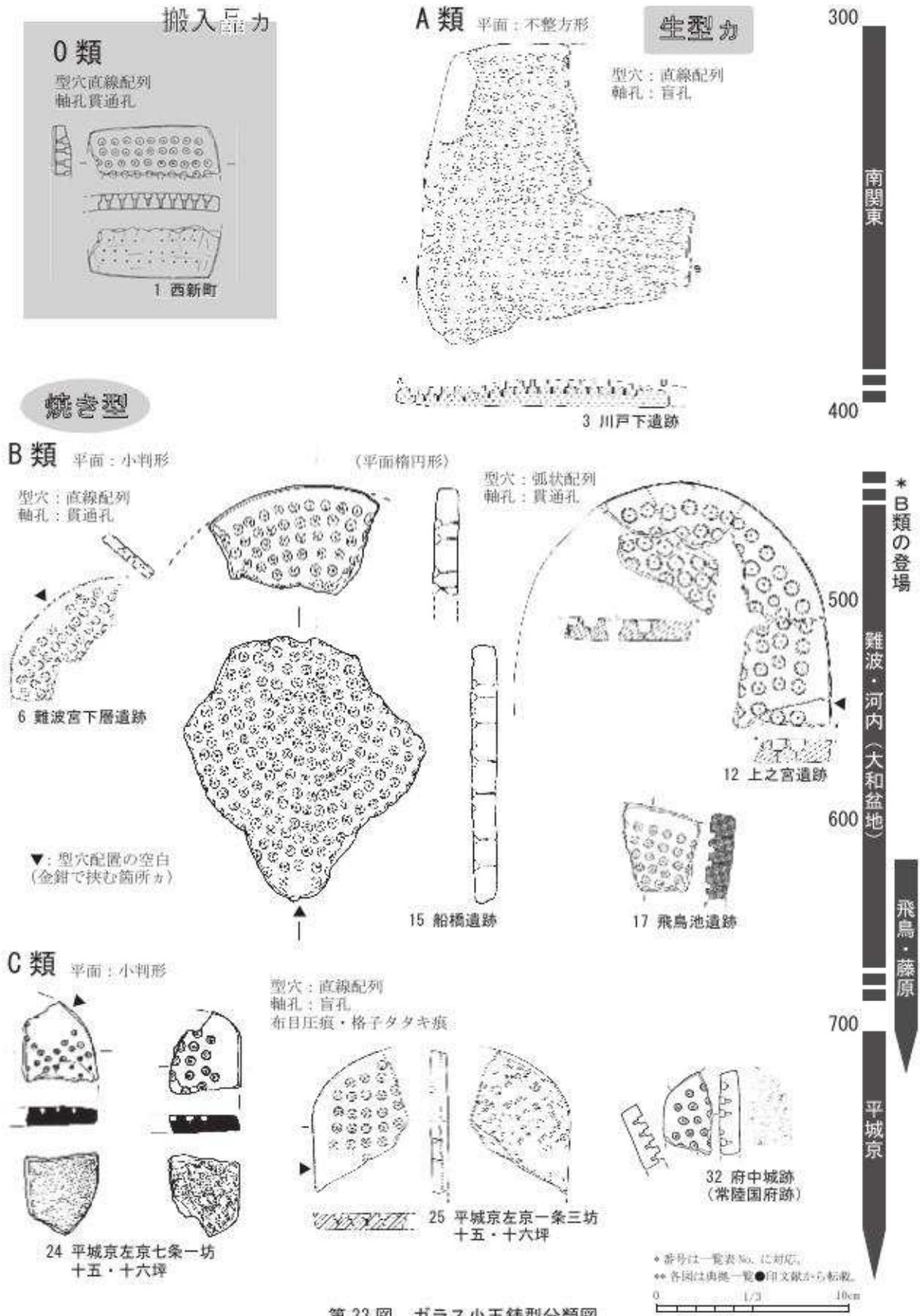
型穴配置は、京嶋氏が分類されたとおり、「直線配列」と「弧状配列」の二者が認められる。ただ、後者については見かけ上の呼称である。白井氏がアフリカ・ガーナ共和国で調査された民族例（鑄型平面形は円形）のように、①「格子状にタテ・ヨコ整然と直線上に空け」たものと②「外周を一周するように（輪郭に沿って：筆者注）、そして次第に内側に向かって孔を開けてい」ったもの（白井2005）、という穿孔手順を反映した分類とすべきであろう。したがって、①外周非相似配列と②外周相似配列とでも称すべきところである。しかし、平面形に方形と円形があり、さらに②の場合、「小判形」平面形の想定が妥当であれば、弧状外周と直線外周が共存するため、いずれの配列であるか区別できなくなる。全資料が全体形を把握・推定できない現状を考えると、資料の認識や分析の視点としては重要であるが、属性データの表記としては適当ではないため、今回は京嶋分類を用いた（注2）。また、田中清美氏が指摘した（田中2007）、金鉗（金箸）で挟む箇所と推定される配置の空白が認められるものがある（現状では後述のB・C類）。

軸孔穿孔は、「盲孔」と「貫通孔」がある。前者は西新町例と4世紀代の南関東の諸例、8世紀代の平城京例に見られ、後者は5世紀～7世紀代の事例、というように、比較的明瞭に区別される。

型式分類と評価 焼成・平面形・型穴配置・軸孔穿孔の属性の組み合わせによって、A～Cの3類にまとめることができた。

A類：生型、平面不整形、型穴直線配列、軸孔盲孔→4世紀代、南関東地域に分布

B類：焼き型、平面小判形あるいは楕円形、型穴直線配列と弧状配列（注2）、軸孔貫通孔→5世紀後半～8世紀中葉、難波・河内地域、大和盆地東南部、飛鳥・藤原地域と信州（屋代例）、関東・武蔵地域に分布



第33図 ガラス小玉鑄型分類図

C類：焼き型、平面小判形、型穴直線配列、軸孔盲孔、タタキ成形・布目圧痕→7世紀末葉～8世紀代、藤原地域、平城京城（、関東・常陸国府）に分布

西新町例は搬入品と考えて「0類」とし、いわゆる国産と考える上記3類とは別扱いとする。これら3類型は、「たこ焼き型鋳型」として類似する資料群であるが、各類型はパラレルではない可能性がある。詳細な検討まで及んでいないが、成形法・帰属時期・分布においてA類とB・C類には断絶があるように見える。また、今回は各資料を実見していないため、さらに有効な分類属性を取得できる余地がある。特に、B類は型穴配置で細分できる可能性を残している。

3 本調査例の位置づけ

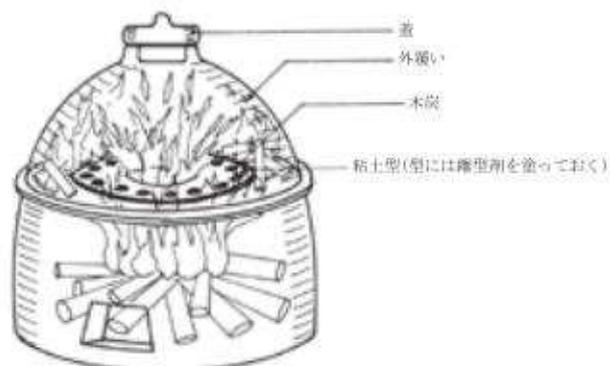
以上の検討から、本調査出土例は「C類」に分類され、「8世紀代」のものと考えてよいだろう。本調査地点は常陸国庁の東側に当たり、中央官衙・平城京例と同類の遺物の存在から、本鋳型は官営（国衙）工房、ガラス製作工房の遺物と考えるのが素直なところであろうか。ただ、本例は未使用と判断されるものであり、直接の生産痕跡を有していない。しかし、今回集成した資料の中には、使用痕が認められないものも存在していた（西新町5点中の1点、中里峡上2点とも、平城京左京一条1点）。また、用途が限定される性格のものであるので、工房の存在を示すものと考えてもよいだろう。しかも、鋳型の製作法の酷似からすれば、生産技術も中央（「典鋳司」^{いしものつくり}管掌）直伝のものが推察される。

C類は、現状では平城京城にほぼ限られている。近年、関東地方における8世紀代の事例として、中里峡上遺跡例が加わったが、B類の残存形態を示している。そうした状況で、新式のC類が東海道東端の地である常陸で発見された意義は大きい。

4 本遺跡におけるガラス小玉製作の検討

ところで、本例は攪乱土からの検出であったが、本来の帰属する遺構は想定できないだろうか。本調査区において8世紀代の遺構にSI01・02・05の3軒の住居跡がある。冒頭で記したとおり、SI01からは石英の円礫破片が出土している。また、前節で検討したように平面規模が小さく、主柱穴やカマドもなく、床面中央付近に火床面が確認された。ガラス原料（石英）としての加工痕跡（破片等の分布）や、その溶解施設（炉）、そして製品（ガラス小玉）の製作痕跡といった生産過程を示す遺構・遺物の出土は確認されておらず、直接的な根拠はない。ガラス原料の溶解炉の痕跡は求めるべくもないが、ガラス小玉の製作痕跡は特別に大掛かりな施設を想定する必要もないと見られている（酒巻1998・2002、大賀2010）。つまり工房跡は、通常、住居跡に分類される建物跡に含まれている可能性がある。由水常雄氏は第34図に示す「置きカマド」的なものを想定されている（由水編1992）が、SI01床面の火床はその痕跡と想像することもできる。敢えて、今回の狭い調査範囲に工房跡を求める必要はないのであるが、SI01を工房跡としての候補の一つとして挙げておこうと思う。

本調査区付近に8世紀代のガラス小玉製作工房があり、その後、9世紀後半前後に掘立柱建



第34図 平玉の製作法（由水編1992）

物SB01が建設される。前節で記したとおり、国衛曹司の施設と考えられる。常陸国府におけるガラス工房は、全国的な趨勢と同調するように消滅してしまうのか、場所を違えて存続したのか、今後の調査に期待したい。

小 結

本稿では、本調査例の位置づけを第一義としたために、判断材料として集成した全国の類例についての検討には及ばなかった。また、鑄造法によるガラス小玉製品の状況から、生産の実態を検証する作業も必要であろう。近在の墳墓では、千葉県市原市の横穴墓や土壙墓、同印旛郡酒々井町や同八千代市の古墳など、7世紀前半代の鑄造ガラス小玉の副葬が確認されている(酒巻2002)。また、7世紀代(～後半)の土浦市の武者塚古墳では、3号人骨装着のガラス小玉(岡林1986)が鑄造品の可能性がある。以下、今回の集成作業の結果、気が付いた点を記しておきたい。

まず、3類型のうち、A類とした4世紀代の南関東地域例については、他のB・C類との形態的・時期的断絶があった。特に、「生型」であったとすると、韓国出土例や西新町例が焼き型か否か確認していないので、明確な位置づけを言及できないが、ガラス小玉鑄造技術の伝播形態については一考の余地がある。勢い、朝鮮半島との直接的あるいは間接的な伝播を想定する向きもあるが、静岡県沼津市の二ッ洞遺跡における弥生時代(後期)のガラス勾玉土製鑄型(沼津市2005)の発見などを見ると、弥生時代以来の日本列島独自の技術も考慮に入れなければならないだろう。

また、今回の常陸国府跡における検出から、各地の国府・国分二寺関連遺跡における発見が予測される。特に、7世紀以降は墳墓の副葬品のみならず、古代寺院の仏具や荘厳具、地鎮具・鎮壇具としてもガラス玉(瑠璃)の使用が見込まれるからである。

ところで、本稿で検討の対象としたガラス小玉鑄型は、平成の時代に入って、1990年前後の奈良県内における調査報告(清水1992)や山内紀嗣氏の報告をきっかけとして認知されてきた、新しい遺物種である。既出例の発見事情を見ても、調査現場では把握できず、整理作業で認識しているという報告を散見した。おそらく、報告書未(非)掲載遺物として処理されている、膨大な保管資料群の中に埋もれている可能性が十分にあるだろう。今後は、少なくとも、ガラス製作を想定させる、溶解炉(火床)の確認、原材料としての石英・長石・方鉛鉱等、製作道具としての増場や鉄製工具類、製作過程で生成されるガラス滓などの検出を見た場合、また、いわゆる一般集落・住居跡でガラス小玉(製品あるいは再生原料)が検出された場合、出土遺物の悉皆的な把握が必要とされるだろう。また逆に、鑄型を検出した場合には、これらの製作関連遺物の確認が必要である。

【注】

- 1 今回の集成の結果、「2枚の粘土板の貼り合わせ」の報告に触れることができたのは、平城京左京一条三坊十五・十六坪出土の土例のみであった。また、京嶋氏が豊島馬場遺跡例を挙げて指摘している表裏面の色調の相違は、報告者の中島広顕氏によって「二次的な高い加熱によるもの」と判断されており、また、「基本的な成形は1枚の粘土を伸ばし」て成形されたと報告されている(中島1993・1995)。さらに、同様の状態を示す反町遺跡例の報告においても、X線撮影によっても「貼り合わせた痕跡はなく、火を強く受けて裏面の色調が変化したものと考えられ」ている(上野2011)。こうした鑄型の変色については、川戸下遺跡例と鶴ヶ岡1号墳例を報告した酒巻忠史氏の見解も加熱によるものと判断されている(酒巻1998、酒巻・喜多2011)。そもそも、京嶋氏が説く盲孔触孔例の鑄型成形法は、手順の矛盾をはらんでいる。
- 2 手作業による1孔ずつの穿孔と判断されるので、直線配列とは違って、「ぶれ」が大きい。小破片で実測図の精度が低い場合、分類作業は困難である。今回、資料を実見していないことや、写真によって資料を確認できなかったことから、正当な属性取得・分析が果たせていない。

第24表 ガラス小玉鋳型一覽表

No.	遺跡名	所在地	出土遺構	分類	平面形状	型穴配置	軸孔形状	厚さ	型穴径	型穴深さ	状態	伴出遺物	備考	時期
1	西野遺跡	福岡県福岡市	土居層、土坑、竪穴墓、溝	C型	方形	直線配置	直線孔	未計測	3.0~4.0	3.0~4.0	1点は破砕品に、断面内側、1点は破砕品なし。	不明	0点あり、重箱型ガラスあり。	1世紀前半
2	豊原高野遺跡	東京都北区	土居層、タリヤノ一拵	A型	横長方形	直線配置	直線孔	12.0~16.0	3.0~4.0	1.0~2.0	破砕、断面に着色	土居層、土坑、土器等出土、石皿	1点あり、重箱型ガラスあり。	1世紀前半
3	川戸1号遺跡	千葉県市川市	土居層	A型	横長方形	直線配置	直線孔	8~10	0.0	3.0~4.0	断面に、緑色着色、土坑、土器等出土、土坑、土器等出土、土坑、土器等出土。	同一個体本館で検出されたものあり。	1世紀前半	
4	足尾遺跡(第3次)	埼玉県東松山市	土居層	B型	不明	直線配置	直線孔	12	0~1.0	3~3.5	破砕、断面に着色	土居層	型穴は断面に着色、断面に着色、断面に着色。	1世紀前半
5	駒ノ瀬1号遺跡	千葉県木更津市	古墳時代土中	A型	不明	直線配置	直線孔	15.0~18.0	4.0	4.0	破砕、断面に着色	不明	2点あり。	1世紀後半
6	鶴宮下層遺跡(遺跡番号不明)	大塚市中央区	土坑	B型	小方形	直線配置	直線孔	5~6	0.5	3.5	不明	不明	不明	5世紀後半
7	有田5号(和/内(横ノ下、タノ下)集)	埼玉県大塚市	大塚(日本書紀「石上遺」)土坑	B型	小方形	直線配置	直線孔	13.0~19.0	3.0~4.0	2.0~2.0	有厚さ、土坑、断面に着色、断面に着色。	不明	3点あり。	5世紀末
8	高根北遺跡(高根北集)	大塚市東区(東区)・東区	河川層	B型	小方形	直線配置	直線孔	15	0.0	0.0	断面に着色	不明	不明	5世紀末
9	高根北遺跡(高根北集)	埼玉県東松山市	高根北(土居層)	B型	小方形	直線配置	直線孔	0	0	0	不明	不明	不明	5世紀末
10	高根北遺跡(高根北集)	埼玉県東松山市	高根北(土居層)	B型	小方形	直線配置	直線孔	1.1	3.5	未計測	不明	不明	不明	5世紀末
11	高根北遺跡(高根北集)	埼玉県東松山市	高根北(土居層)	B型	不明	直線配置	直線孔	未計測	1.5	4	不明	不明	不明	5世紀末
12	土之谷遺跡	埼玉県東松山市	高根北(土居層)	B型	小方形	直線配置	直線孔	11	0	0	不明	不明	不明	5世紀末
13	大塚南遺跡(高根北集)	埼玉県東松山市	高根北(土居層)	B型	小方形	直線配置	直線孔	13~14	3.0~3.0	未計測	不明	不明	不明	5世紀末
14	石神遺跡(石神、高根北集)	埼玉県東松山市	高根北(土居層)	B型	不明	直線配置	直線孔	未計測	未計測	未計測	不明	不明	不明	5世紀末
15	高根北遺跡	埼玉県東松山市	高根北(土居層)	B型	小方形	直線配置	直線孔	未計測	未計測	未計測	不明	不明	不明	5世紀末
16	高根北遺跡	埼玉県東松山市	高根北(土居層)	B型	小方形	直線配置	直線孔	未計測	未計測	未計測	不明	不明	不明	5世紀末
17	高根北遺跡	埼玉県東松山市	高根北(土居層)	B型	小方形	直線配置	直線孔	13~14	2.5~5.0	未計測	不明	不明	不明	5世紀末
18	高根北遺跡	埼玉県東松山市	高根北(土居層)	B型	小方形	直線配置	直線孔	12.0	4.5~5.0	3.5~3.5	不明	不明	不明	5世紀末
19	高根北遺跡	埼玉県東松山市	高根北(土居層)	B型	小方形	直線配置	直線孔	9	1~5	2	不明	不明	不明	5世紀末
20	高根北遺跡	埼玉県東松山市	高根北(土居層)	B型	小方形	直線配置	直線孔	10	0	0	不明	不明	不明	5世紀末
21	高根北遺跡	埼玉県東松山市	高根北(土居層)	B型	小方形	直線配置	直線孔	未計測	未計測	未計測	不明	不明	不明	5世紀末
22	高根北遺跡	埼玉県東松山市	高根北(土居層)	B型	小方形	直線配置	直線孔	未計測	未計測	未計測	不明	不明	不明	5世紀末
23	高根北遺跡	埼玉県東松山市	高根北(土居層)	B型	小方形	直線配置	直線孔	未計測	未計測	未計測	不明	不明	不明	5世紀末
24	高根北遺跡	埼玉県東松山市	高根北(土居層)	B型	小方形	直線配置	直線孔	未計測	未計測	未計測	不明	不明	不明	5世紀末
25	高根北遺跡	埼玉県東松山市	高根北(土居層)	B型	小方形	直線配置	直線孔	未計測	未計測	未計測	不明	不明	不明	5世紀末
26	高根北遺跡	埼玉県東松山市	高根北(土居層)	B型	小方形	直線配置	直線孔	未計測	未計測	未計測	不明	不明	不明	5世紀末
27	高根北遺跡	埼玉県東松山市	高根北(土居層)	B型	小方形	直線配置	直線孔	未計測	未計測	未計測	不明	不明	不明	5世紀末
28	高根北遺跡	埼玉県東松山市	高根北(土居層)	B型	小方形	直線配置	直線孔	未計測	未計測	未計測	不明	不明	不明	5世紀末
29	高根北遺跡	埼玉県東松山市	高根北(土居層)	B型	小方形	直線配置	直線孔	未計測	未計測	未計測	不明	不明	不明	5世紀末
30	高根北遺跡	埼玉県東松山市	高根北(土居層)	B型	小方形	直線配置	直線孔	未計測	未計測	未計測	不明	不明	不明	5世紀末
31	高根北遺跡	埼玉県東松山市	高根北(土居層)	B型	小方形	直線配置	直線孔	未計測	未計測	未計測	不明	不明	不明	5世紀末
32	高根北遺跡	埼玉県東松山市	高根北(土居層)	B型	小方形	直線配置	直線孔	未計測	未計測	未計測	不明	不明	不明	5世紀末
33	高根北遺跡	埼玉県東松山市	高根北(土居層)	B型	小方形	直線配置	直線孔	未計測	未計測	未計測	不明	不明	不明	5世紀末
34	高根北遺跡	埼玉県東松山市	高根北(土居層)	B型	小方形	直線配置	直線孔	未計測	未計測	未計測	不明	不明	不明	5世紀末

※ 出典：本誌、他誌

【参考文献(本節分)】

●ガラス小玉鈿型関連

同林孝作 1986「武者塚古墳—出土遺物—玉類」増田精一編『武者塚古墳』武者塚古墳・同2号墳・武具八幡古墳の調査 新治村教育委員会
 奥田 尚 1990「ガラス玉造り」『古代学研究』第120号 古代学研究会
 清水眞一 1992「ガラス小玉鈿型についての一考察」『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズV 同志社大学考古学シリーズ刊行会
 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1992『飛鳥の工房』平成4年度秋期特別展図録
 (web page URL: <http://www.asukamet.gr.jp/ASUKA4/koubou/welcome.html>)
 中島広顕 1995「考察—ガラス小玉鈿型について」小林高編『豊島馬場遺跡』北区埋蔵文化財調査報告第16集 東京都北区教育委員会
 酒巻忠史 1998「東国における古墳時代の鈿造技術について—鶴ヶ岡1号墳出土のガラス小玉鈿型を中心に—」『研究紀要』Ⅷ (財) 君津都市文化財センター
 肥塚隆保 2002「文化財の素材と技法—古代のガラス」京都造形芸術大学編『文化財のための保存科学入門』角川書店
 酒巻忠史 2002「鈿造技法によるガラス小玉の特徴と類別」『国学院大学考古学資料館紀要』第18輯 加藤晋平先生古稀記念 国学院大学考古学資料館
 白井洋輔 2005「古代鈿造ビーズ製作技法の研究」『文化財情報学研究』第2号 吉備国際大学文化財総合研究センター
 沼津市史編さん委員会・沼津市教育委員会編 2005『沼津市史』通史編 原始・古代・中世 沼津市
 福島雅儀 2006「古墳時代ガラス玉の製作技法とその痕跡」『考古学と自然科学』第54号 日本文化財科学会
 田中清美 2007「『たに二岐聖鈿型』によるガラス小玉の生産」『大阪歴史博物館研究紀要』第6号 (財) 大阪市文化財協会
 中山清隆 2007「日韓地域出土のガラス小玉鈿型とその周辺—小さな鈿型が語る初期国家形成期の断想—」『利根川』29 利根川同人
 中山清隆 2008「ガラス小玉鈿型の資料補遺」『利根川』30 利根川同人
 京嶋 寛 2009「ガラス小玉鈿型出土の意義」『古代学研究』第182号 古代学研究会
 大賀克彦 2010「日本列島におけるガラスおよびガラス玉生産の成立と展開」『月刊 文化財』556号 特集 古代ガラスと考古科学 第一法規
 肥塚隆保・田村朋美・大賀克彦 2010「材質とその歴史の変遷」『月刊 文化財』556号 特集 古代ガラスと考古科学 第一法規
 松村恵司 2010「日本の古代ガラス」『月刊 文化財』556号 特集 古代ガラスと考古科学 第一法規
 上野高由美 2011「玉作とガラス小玉鈿型について」赤藤浩一編『反町遺跡』Ⅱ 大規模小売店舗建設事業関係埋蔵文化財発掘調査報告 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第380集 ユニー(株)・(財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
 奈良県立橿原考古学研究所 2011「奈良県内出土のガラス鈿造関係遺物」奈良県立橿原考古学研究所アトリウム展示リーフレット

●ガラス工芸・技術関連

由水常雄 1977『火の磨りもの—ガラス—鏡 ステンドグラス トシボ玉』せりか書房
 由水常雄 1989『トシボ玉』平凡社
 由水常雄 1992『ガラス工芸—歴史と技法—』桜楓社
 由水常雄編 1992『世界ガラス美術全集』第5巻 日本 求龍堂
 藤田 等 1994『弥生時代ガラスの研究—考古学的方法—』名著出版
 ダン・クライン/ウォード・ロイド編 渡典子・井上暁子訳 1995『ガラスの歴史』西村書店

報告書・資料典拠 (№は第24表に対応。●印文献からデータ取得。)

- 1 福岡県教育委員会 2000・03『西新町遺跡』Ⅱ・Ⅴ 福岡県文化財調査報告書第154・178集、●田中2007・中山2007
- 2 ●中島広顕 1993「東京都北区豊島馬場遺跡出土のガラス小玉鈿型」『考古学雑誌』第78巻第4号 日本考古学会
 ●小林 高編 1995『豊島馬場遺跡』北区埋蔵文化財調査報告第16集 東京都北区教育委員会
- 3 新井和之 1982「川戸下遺跡」『北総線』東京電力北総線道路調査会、四街道市教育委員会
 ●田中2007・酒巻忠史・喜多裕明 2011「四街道市川戸下遺跡出土ガラス小玉鈿型の再検討」(財) 印旛都市文化財センター研究紀要』8 (財) 印旛都市文化財センター
- 4 ●赤藤浩一編 2011『反町遺跡』Ⅱ 大規模小売店舗建設事業関係埋蔵文化財発掘調査報告 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第380集 ユニー(株)・(財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 5 酒巻忠史 1995『塚ヶ丘遺跡群発掘調査報告書』一鶴ヶ岡1号墳・鶴ヶ岡遺跡・依ヶ谷遺跡— 木更津市教育委員会
 ●酒巻1998・田中2007・酒巻・喜多2011
- 6 大阪市文化財協会 2004『藤波宮址の研究』第十二 宮殿周辺地域の調査、●田中2007
- 7 山内紀綱 1990「ガラス玉の鈿型」『天理参考館報』第4号 天理大学附属天理参考館、●清水1992・中島1995・田中2007
- 8 西口陽一 1991『遺良郡条里遺跡発掘調査概要』Ⅱ—寝塚川市出雲町所在— 大阪府教育委員会、●清水1992・田中2007
- 9 奈良県立橿原考古学研究所 1999『南郷遺跡群』Ⅱ 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第73集、●田中2007
- 10 ●隅田 眞編 1998『松月院境内遺跡発掘調査報告書』文化財シリーズ第84集 板橋区教育委員会
- 11 山田光洋・古堀紀之 2010「横浜市港北区新吉田東出土の表採資料—アメリカ式(大根布式)石鏝とガラス小玉鈿型について—」『利根川』32 利根川同人、●上野2011
- 12 桜井市文化財協会 1990『上之宮遺跡第5次調査概要』
 清水眞一 1989『阿部丘遺跡群』桜井市教育委員会
 ●清水眞一1992・同 2007「ガラス玉鈿型の最大例について」茂木雅博編『日中交流の考古学』同成社
- 13 ●田中2007
- 14 ●金田明大ほか 2005「石神遺跡(第17次)の調査—第134次」『奈良文化財研究所紀要』№2005 奈良文化財研究所、京嶋2009
- 15 大阪府文化財センター 2005『船橋遺跡』Ⅲ 大和川改修(高規格堤防)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、●田中2007・京嶋2009
- 16 ●田中2007
- 17 奈良国立文化財研究所 1992「飛鳥池遺跡の調査(飛鳥寺1991-1次調査)」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』22
 奈良文化財研究所 2004『飛鳥池遺跡発掘調査報告』Ⅰ、●中島1995・田中2007
- 18 ●奈良県立橿原考古学研究所 2004「藤原京右京十一一条一坊」『奈良県遺跡調査概報』2003年度(第2分冊)
- 19 桜井市文化財協会 1991『桜井市内埋蔵文化財発掘調査報告書』1990年度2、●清水1992・田中2007

- 20 奈良文化財研究所 2004『川原寺 寺域北限の調査 飛鳥藤原第119-5次発掘調査報告』●清水 2007(前掲12文献)・櫻考研 2011
- 21 ●寺内隆夫編 1999『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』26 更埴条里遺跡・歴史遊跡群—古代1編— 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 42 (附) 長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター
- 22 ●及川良彦編 2011『北区中里中上遺跡』—(仮称) 北区中里マンスジョン計画に伴う埋蔵文化財調査—東京都埋蔵文化財センター調査報告第256集。(財) 東京都スポーツ文化事業団東京都埋蔵文化財センター
- 23 齋藤明彦・今尾文昭 1989「四條大田中」『大和を掘る』IX—1988年度発掘調査速報— 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
●清水 1992・田中 2007
- 24 ●小林謙一編 1997『平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告書』奈良国立文化財研究所学報第56冊 奈良国立文化財研究所
- 25 ●玉田芳英 1991「平城京左京一条三坊出土のガラス小玉埴型」『奈良国立文化財研究所年報』1991 奈良国立文化財研究所, 中島 1995
- 26 ●土橋理子 1998「奈良市唐招提寺境内調査概報—平成9年度—8次調査概報」『奈良県遺跡調査概報』1997年度(第3分冊) 奈良県立橿原考古学研究所
- 27 ●松浦五輪美 2005「史跡大安寺旧境内(西塔跡)の調査 第94次」森下浩行編『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成13年度 奈良市教育委員会
- 28 ●松浦五輪美ほか 2003「大安寺旧境内出土のガラス小玉の埴型」奈良市埋蔵文化財調査センター速報展示資料No.13; 櫻考研 2011
- 29 ●山前智敬 1998「平城京左京三條一坊十一・十四坪環境小路の調査 第366次」藤原豊→池田裕英編『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成9年度(第2分冊) 奈良市教育委員会
- 30 ●櫻考研 2011・松浦ほか 2003(前掲28文献)
- 31 ●林 正憲ほか 2007「法華寺旧境内の調査—第412・414・417次」『奈良文化財研究所紀要』Vol.2007 奈良文化財研究所
- 32 本書
- 33 沼津市教育委員会・文化財センター 山本恵一氏ご教授。平成22年度調査、未報告資料。

第25表 土坑・ピット一覧表(1)

遺構名	位置	規模			出土遺物	取り分け
		長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)		
SK01	A1	245	216	62	弥生土器11.8g, 土師器369.9g, 須恵器319.5g, 瓦189.1g, 近世土師質土器116.3g, 同瓦質土器2561.9g, 同陶器665.2g, 同磁器65.3g, 同瓦333.3g, 同土製品13.6g, 同石製品107.6g, 現代ガラス製品183.6g, 同鉄製品55.9g, 鏝1358.3g	→SK02
SK02	A1	92	80	19	-	→SK01
SK03	A1	72	52	17	-	→SK01
SK04	A1	124	84	37	-	→SK03
SK05	A1	109	76	41	土師器13.9g, 須恵器20.9g	-
SK06	A1	72	88	62	-	-
SK07	B1	126	64	31	土師器241.5g, 須恵器208.2g, 鏝12.6g, 近世陶器52.7g	-
SK08	B1	124	84	15	縄文土器79.8g, 近代磁器11.1g	-
SK10	A1	124	92	69	縄文土器9.8g, 土師器281.5g, 須恵器595.6g, 瓦437.3g, 中世土師質土器25.3g, 近世土師質土器53.6g, 同陶器28.7g, 同磁器703.7g, 同石製品302.1g, 近世・近代磁器79.6g, 現代鉄製品58.4g, 鏝901.5g	-
SK18	C1	109	140	55	-	→S101
SK19	A1	84	64	24	-	-
SK20					欠番	-
SK21					欠番	-
SK22	C1	92	92	63	弥生土器25.3g, 土師器50.3g, 鏝5.7g	→P31・32
SK23	D1	112	92	26	-	→SK06
SK25	C1	100	96	46	土師器288.1g, 須恵器39.9g, 瓦169.9g, 鏝24.6g	-
SK26	D1	72	52	44	-	-
SK27	C1	140	84	36	-	→S105
SK31	B1	48	48	46	-	→S101
P01	A1	64	60	24	土師器151.2g, 須恵器123.4g	-
P02	B1	72	60	63	-	-
P03	C1	104	148	69	-	→S101
P04	C1	40	36	52	須恵器36.4g	→S105
P05	C1	68	44	37	土師器78.3g, 須恵器21.6g	→S106
P06	C1	56	40	48	土師器5.8g	→S105
P07	C1	-	44	30	縄文土器29.5g, 土師器63.3g, 須恵器26.4g, 瓦15.1g	→S106
P08	C1	52	44	30	土師器12.3g	-
P09	D1	28	36	7	-	-
P10	D1	40	40	40	-	-
P11	D1	36	32	31	-	-
P12	D1	32	28	31	-	-
P13	D1	44	32	56	土師器1.7g, 須恵器17.3g	-
P14	C1	64	52	59	土師器24.5g, 須恵器9.8g, 近世瓦質土器48.7g	→S101
P15	D1	32	28	15	-	-
P16	B1	40	32	40	-	→S101
P17					欠番	-
P18	B1	52	-	57	-	→S102
P19	B1	48	-	50	-	-
P20a	B1	52	-	43	土師器17.3g, 鏝9.4g, 中世土師質土器23.7g, 同陶器54.9g	-
P20b	B1	32	-	29	-	-
P21	B1	32	-	25	-	-
P22	B1	52	32	47	-	-
P23	B1	52	44	57	土師器15.9g, 瓦50.9g	-
P24	B1	40	28	26	土師器149.9g, 須恵器23.8g	-
P25a	B1	29	36	51	土師器16.6g	-
P25b	C1	40	36	35	-	-
P26a	C1	68	60	26	-	→S101

第26表 土坑・ピット一覧表(2)

遺構名	位置	規模			出土遺物	切り合い
		長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)		
P26b	B1	36	-	51		
P27	B1	44	-	47		
P28	B1	32	-	64		
P29	C1	32	32	31		
P30	C1	28	24	27		
P31	C1	(28)	-	31		→ SK22
P32	C1	(44)	-	37		→ SK22
P33	C1	72	48	33		
P34	C1	52	-	31		→ S105
P35	C1	40	28	35		→ S103
P36	C1	64	60	53		
P37					欠番	
P38					欠番	
P39					欠番	
P40	B1	88	(48)	39		
P41	B1	32	32	17		
P42	B1	24	24	11		
P43	B1	36	32	34		→ SX05
P44	D0	(40)	48	45		
P45	D0	76	(20)	25		
P46	B1	28	(20)	19		
P47	B1	60	56	61		
P48	B1	28	24	26		
P49	B1	24	16	30		
P50	B1	-	20	24		
P51	B1	-	24	15		
P52	C1	44	28	22		
P53	B1	28	20	54		→ SX04
P54	B1	24	20	7		→ SX04
P55	B1	28	24	17		→ P40
P56	B1	28	24	36		
P57	B1	32	28	19		
P58	B1	32	28	27		→ P02

*SK11～15・17・24・29～30はSK01・02の柱穴番号に、SK16は方形型穴遺構に振り分けた。

**切り合い：矢印は「古一新」を示す。

【参考引用文献】

府中城跡発掘調査報告書

小杉山大輔 2005『代官屋敷遺跡—石岡小学校温水プール建設にともなう調査—』石岡市教育委員会

小杉山大輔 2006『石岡市内遺跡調査報告書』石岡市教育委員会

小杉山大輔 2007『市内遺跡調査報告書』第2集 石岡市教育委員会

小杉山大輔・曾根俊雄 2008『市内遺跡調査報告書』第3集 石岡市教育委員会

小杉山大輔・曾根俊雄 2009『市内遺跡調査報告書』第4集 石岡市教育委員会

小杉山大輔・曾根俊雄 2011『市内遺跡調査報告書』第6集 石岡市教育委員会

常陸国街跡発掘調査報告書

豊崎 卓 1973『常陸国府跡発掘調査報告書』石岡市教育委員会

箕輪健一 2001『常陸国街跡—石岡小学校温水プール建設事業に伴う調査—』石岡市教育委員会

箕輪健一 2009『常陸国街跡—四角・曹司の調査—』石岡市教育委員会

赤井博之・古澤 新 1997『茨城県』『東国の須恵器—関東地方における歴史時代須恵器の系譜—』97シンポジウム発表要旨・資料 古代生産史研究会

浅井哲也 1991・92『茨城県内における奈良・平安時代の土器（I・II）』『研究ノート』創刊号・2号 平成3・4年度（財）茨城県教育財団

我孫子市教育委員会文化・スポーツ課 2006更新ホームページ及び電腦考古博物館「展示室—テーマ展示—ガラス瓶のある風景」

(web page URL: <http://kouko.bird-mus.abiko.chiba.jp/main/theme/glass1.html>)

石岡市史編纂委員会編 1979『石岡市史』上巻 石岡市

茨城県教育財団埋蔵文化財調査部中・近世研究班 1992「中世の型穴遺構について」『研究ノート』創刊号 平成3年度（財）茨城県教育財団

宇留野主税 2003「中世における方形型穴状遺構の基礎的検討—茨城県内の事例から—」『Archaeo-Clia』第4号 東京学芸大学考古学研究室

江戸遺跡研究会編 2011『図説 江戸考古学研究事典』柏書房

大賀 健ほか編 1983『井出村東遺跡—上越新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』山武考古学研究所

尾形則敏・鈴木 徹 2008『城山遺跡第58・60地点埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第17集 志木市遺跡調査会

香藤孝正・後藤健一編 1995『須恵器集成図録』第3巻 東日本編I 雄山閣出版

佐々木義則 1989「木葉下原跡群出土土・埴類の法量分化について」『優良岐考古』第11号 優良岐考古同人会

田原清彦 1986「歴史時代—常陸の9・10世紀の土器」大川清ほか編『日本土器辞典』雄山閣

高田 博編 1980『佐倉市江原台遺跡発掘調査報告書』II（財）千葉県文化財センター編・千葉県教育委員会

梁木 誠 1996「歴史時代—常陸の7・8世紀の土器」大川清ほか編『日本土器辞典』雄山閣

三木 弘ほか 1992『東京都新宿区内藤町遺跡—放射5号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書—』東京都建設局・新宿区内藤町遺跡調査会

山中敏史編 2003・04『古代の官衙遺跡』I遺構編・II遺物・遺跡編 奈良文化財研究所

写真図版



1 遺構確認状況 北から



2 テストピット 西から



3 S101・02 セクション 南から



4 S101・02 セクション 西から



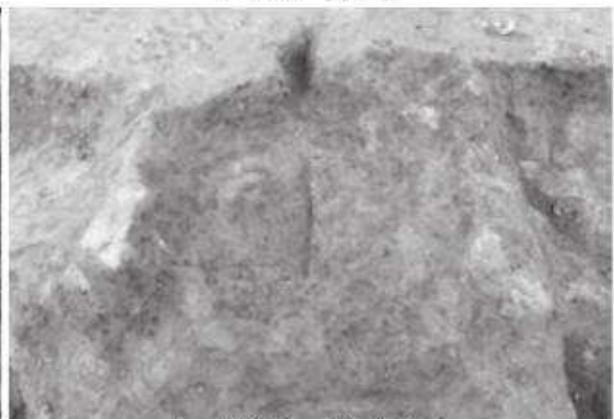
5 S101・02 遺物出土状況 南から



6 S101 南から



7 S102 カマド セクション 北から



8 S102 カマド 東から

住居跡・掘立柱建物跡



1 S103・05 セクション 北東から



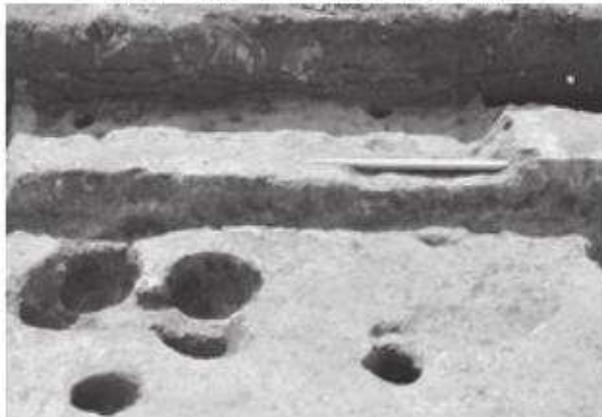
2 S103 東から



3 S104・SK18・P03 セクション 西から



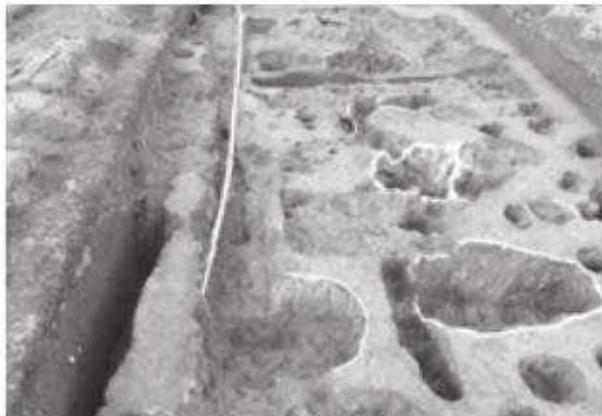
4 S104 西から



5 S105 東から



6 S105 カマド 南から



7 SB01・02 南から



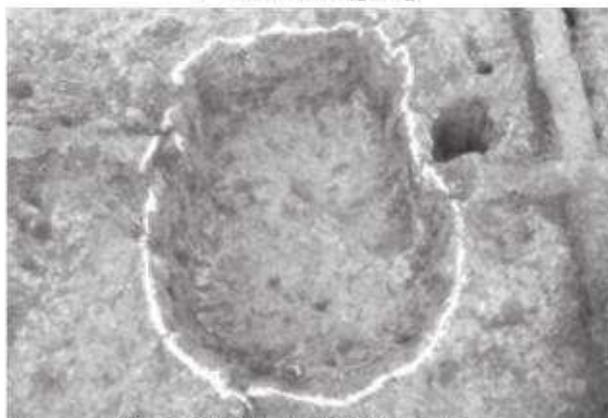
8 SB01-P1 セクション 東から



1 SB01-P2 北から



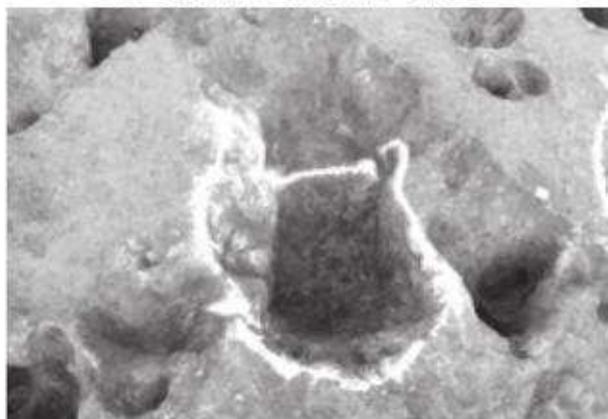
2 SB01-P3 北から



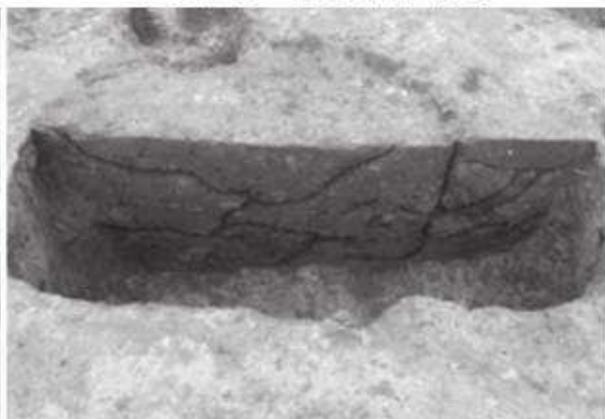
3 SB01-P4・SB02-P10 西から



4 SB01-P5・SB02-P11 西から



5 SB01-P6・SB02-P12 東から



6 SB01-P7・SB02-P13 セクション 南から

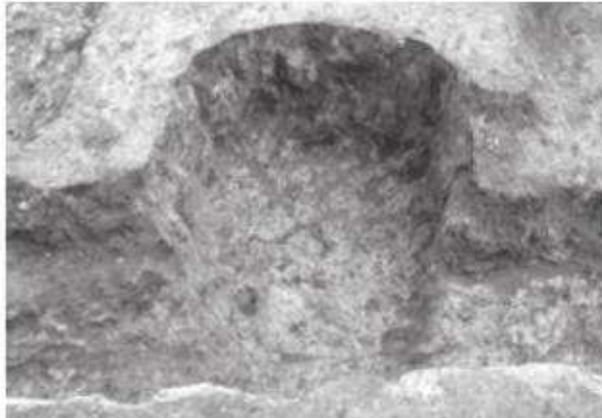


7 SB01-P7・SB02-P13 南から



8 SB01・02-P8 セクション 西から

掘立柱建物跡・土坑・方形竪穴遺構



1 SB01・02-P8 西から



2 SB02-P9 セクション 西から



3 SB02-P9 南から



4 SK10 セクション 東から



5 SX05 セクション 西から



6 SX05 南から

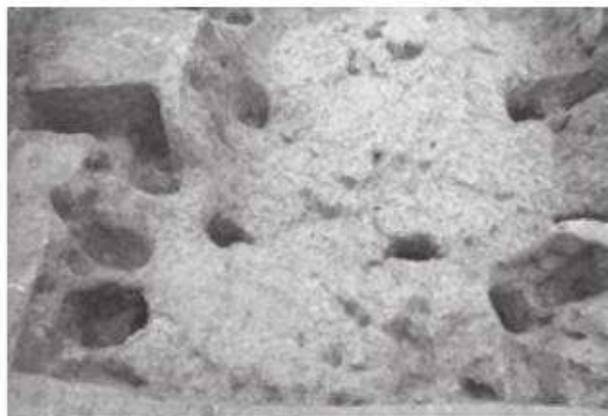


7 SX01 南から

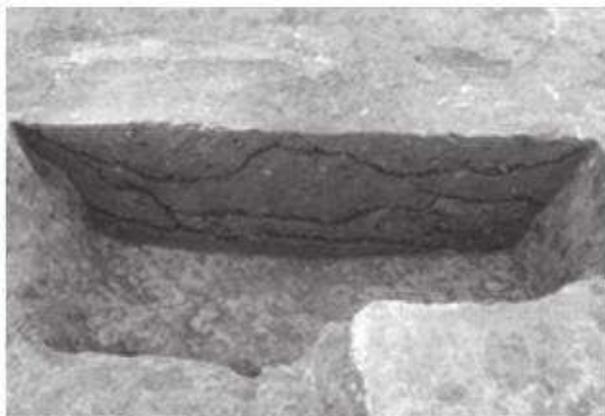


8 SX03 南から

方形竪穴遺構・井戸・土坑（近世）・調査風景



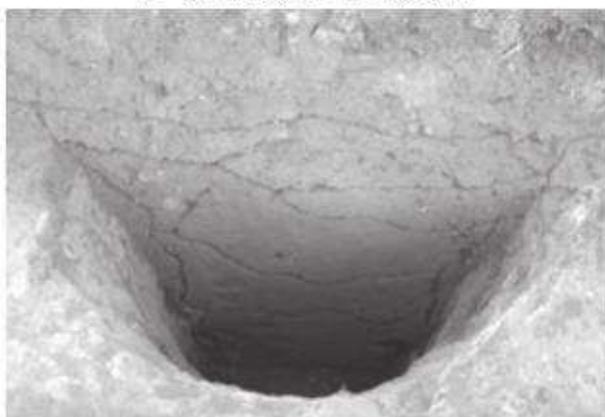
1 SX04 北から



2 SK16 セクション 東から



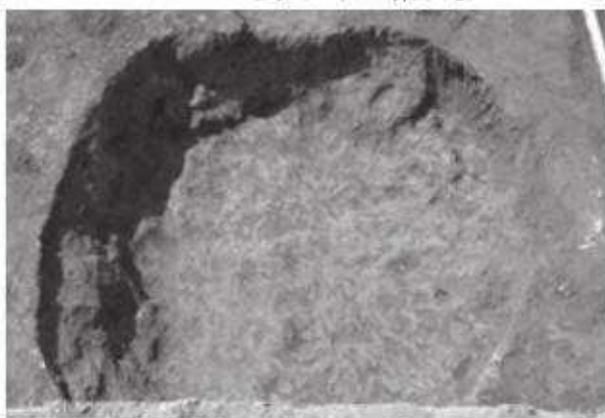
3 SK16 北から



4 SX02 セクション 東から



5 SK01 セクション 南から



6 SK01 北から



7 表土除去



8 調査風景 北から

調査区



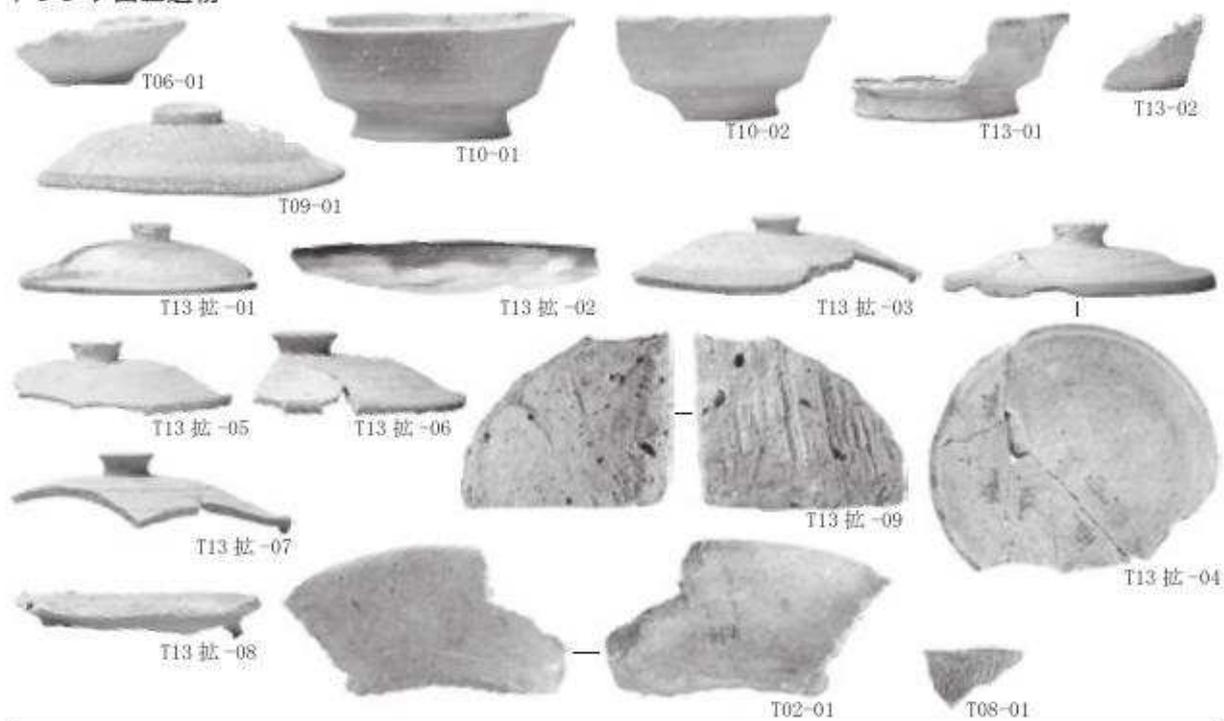
1 調査区全景 北から



2 調査区全景 南から

トレンチ・住居跡

トレンチ出土遺物



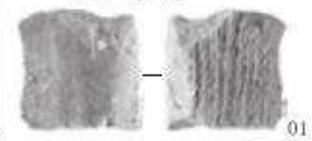
SI01 出土遺物



住居跡・掘立柱建物跡・土坑・方形竪穴遺構・表面採集
S102 出土遺物



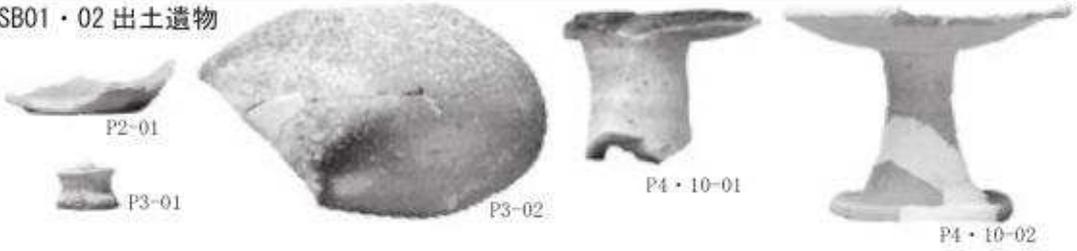
S103 出土遺物



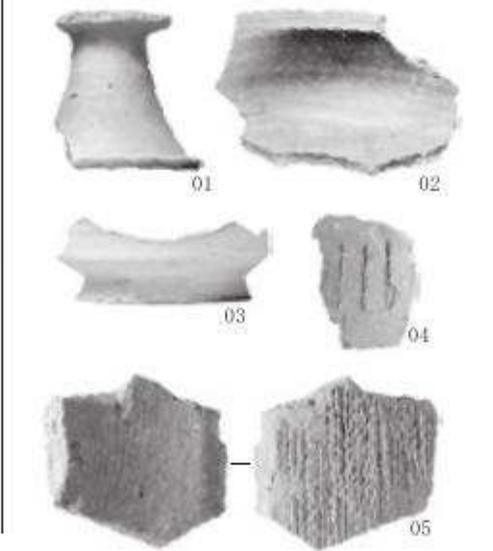
S104 出土遺物



SB01・02 出土遺物



SK10 出土遺物



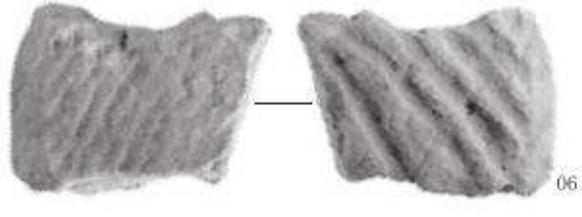
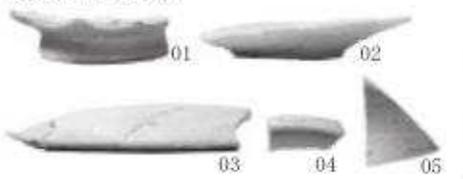
SK01 出土遺物



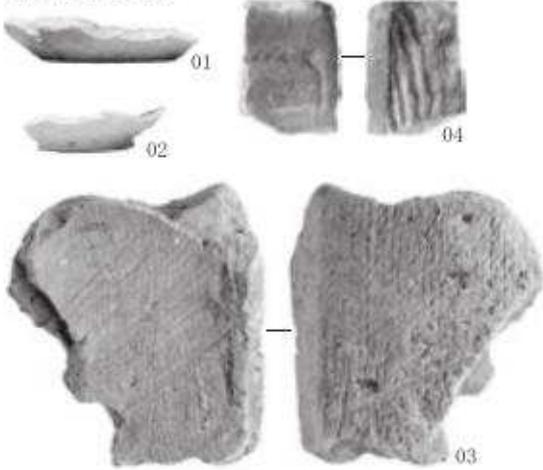
SX05 出土遺物



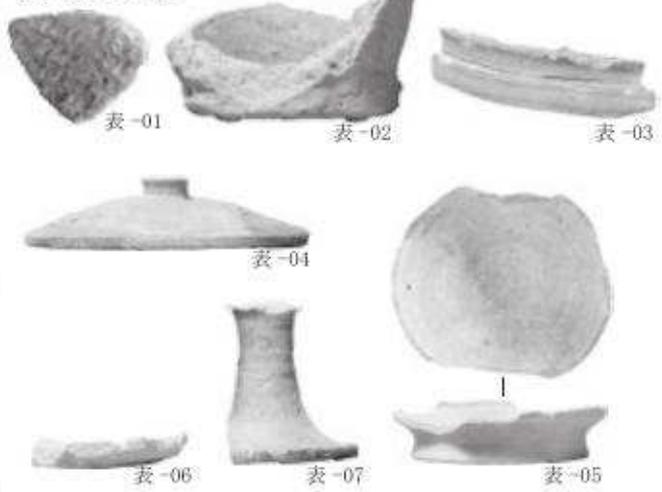
SX03 出土遺物



SX04 出土遺物



表面採集遺物



表面採集遺物

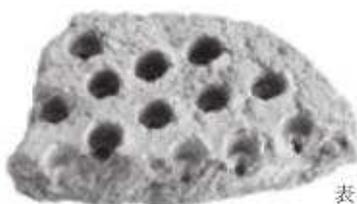
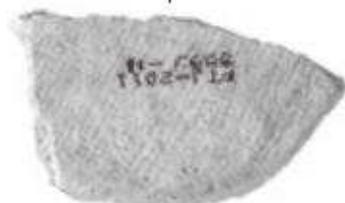
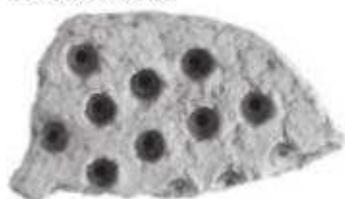


表-08



表-09

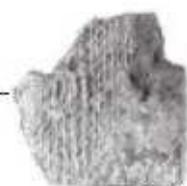


表-10

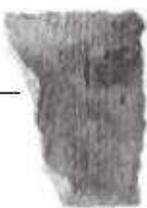


表-11



表-12



表-13



表-14

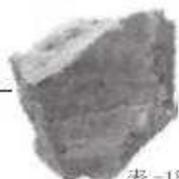


表-15



表-16



表-18



表-19

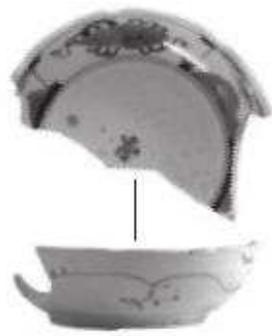


表-20

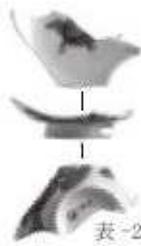


表-21



表-25



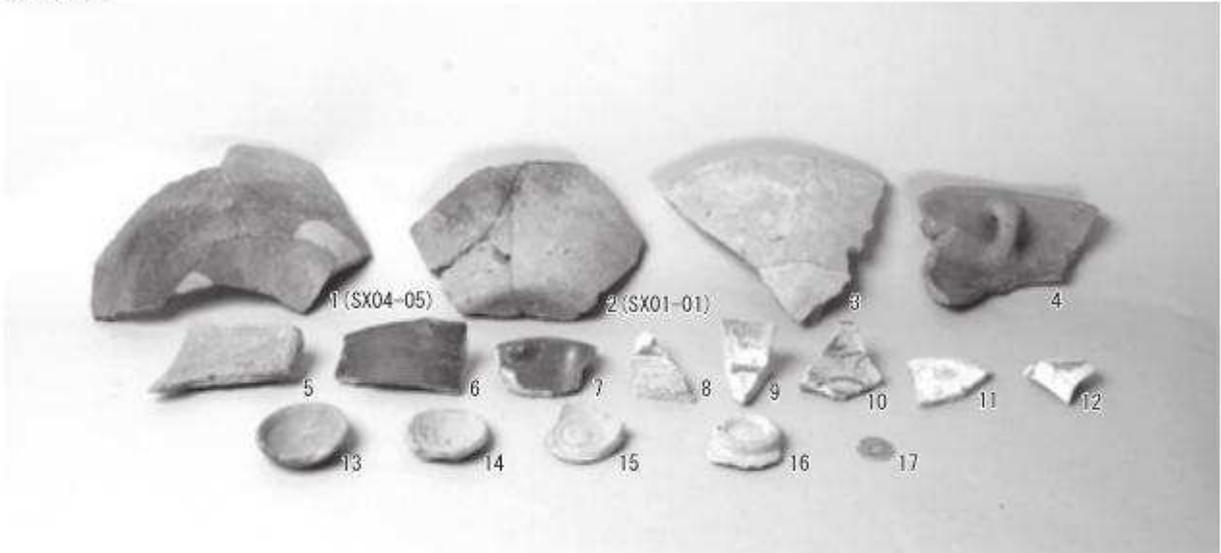
表-23



表-24



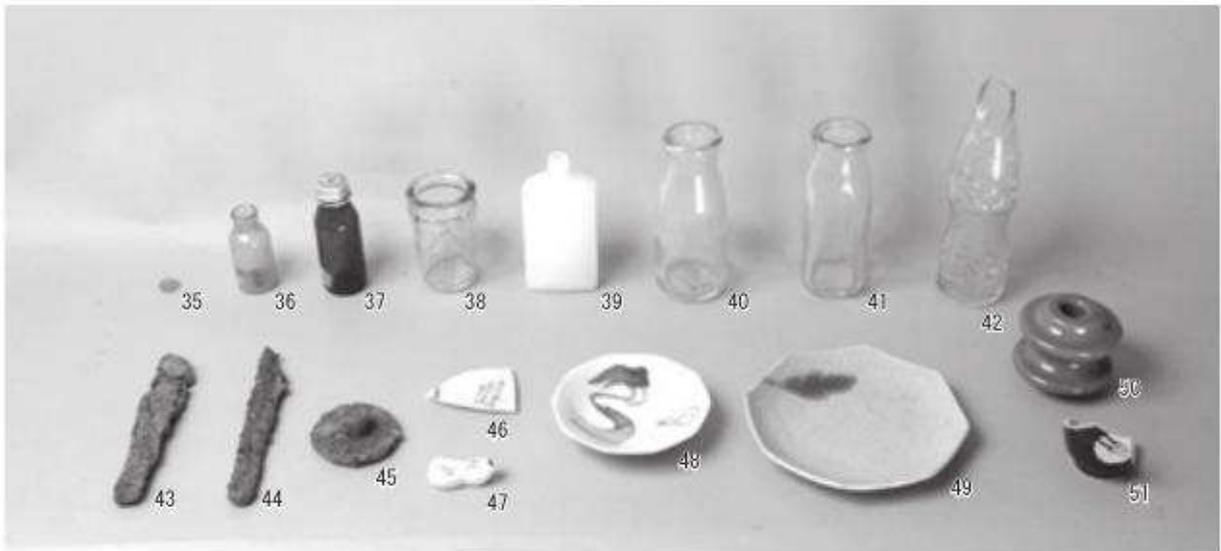
表-22



中・近世 土器・陶磁器・銭貨



近世 陶磁器・土製品・石製品・銭貨



現代 磁器・鉄製品・ガラス製品

抄 録

ふりがな	ふちゅうじょうあと							
書名	府中城跡							
副書名	私道建設に伴う発掘調査							
シリーズ名	石岡市埋蔵文化財調査報告書							
編著者名	小杉山大輔 曾根俊雄 石山 啓 鈴木 徹							
編集機関	有限会社 勾玉工房Mogi 〒286-0203 千葉県富里市久能238-100 Tel.0476(92)0658							
発行機関	石岡市教育委員会							
発行年月日	西暦2011(平成23)年12月28日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
ふちゅうじょうあと 府中城跡	いばらきけんいしおかし 茨城県石岡市 そうじやいっぢょうめい 総社一丁目 ばん 421番86ほか	08205	096	36° 11' 19"	140° 16' 14"	20110728 ～ 20110831	191㎡	私道（位置指定道路）建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物				
府中城跡	包蔵地 官衙 集落 城館	縄文時代 弥生時代 古墳時代 奈良・平安時代 中・近世	住居跡 5軒 掘立柱建物跡 2棟 土坑 方形竪穴遺構 4基 土坑	縄文早期（茅山式）・前期（黒浜式・浮島式）・中期・後期（堀之内式・加曾利B式） 弥生後期土器 古墳前期（土師器） 土師器・須恵器・灰釉陶器・瓦・ガラス小玉鋳型・鉄製品・石英 土師質土器・瓦質土器・陶器・磁器・瓦・ガラス瓶・鉄製品・銭貨・石製品				
要約	常陸国衙の曹司施設と推定される掘立柱建物を確認。その前後の時期（8世紀と9・10世紀）には住居跡が分布する。8世紀代に比定されるガラス小玉鋳型が出土。平城京跡出土例と同類のもの。当該期のガラス小玉製作工房の存在が想定される。中世では方形竪穴遺構を確認。府中城跡に関連する遺構と見られる。							

石岡市埋蔵文化財調査報告書	
府中城跡	
—私道建設に伴う発掘調査—	
発行	2011(平成23)年12月28日
編集・発行	石岡市教育委員会 〒315-0195 茨城県石岡市柿岡5680-1 Tel. 0299(43)1111
	有限会社 勾玉工房 Mogi 〒286-0203 千葉県富里市久能238-100 Tel. 0476(92)0658
印刷	株式会社 エイティー 〒289-1115 千葉県八街市八街13211 Tel. 043(444)2024